

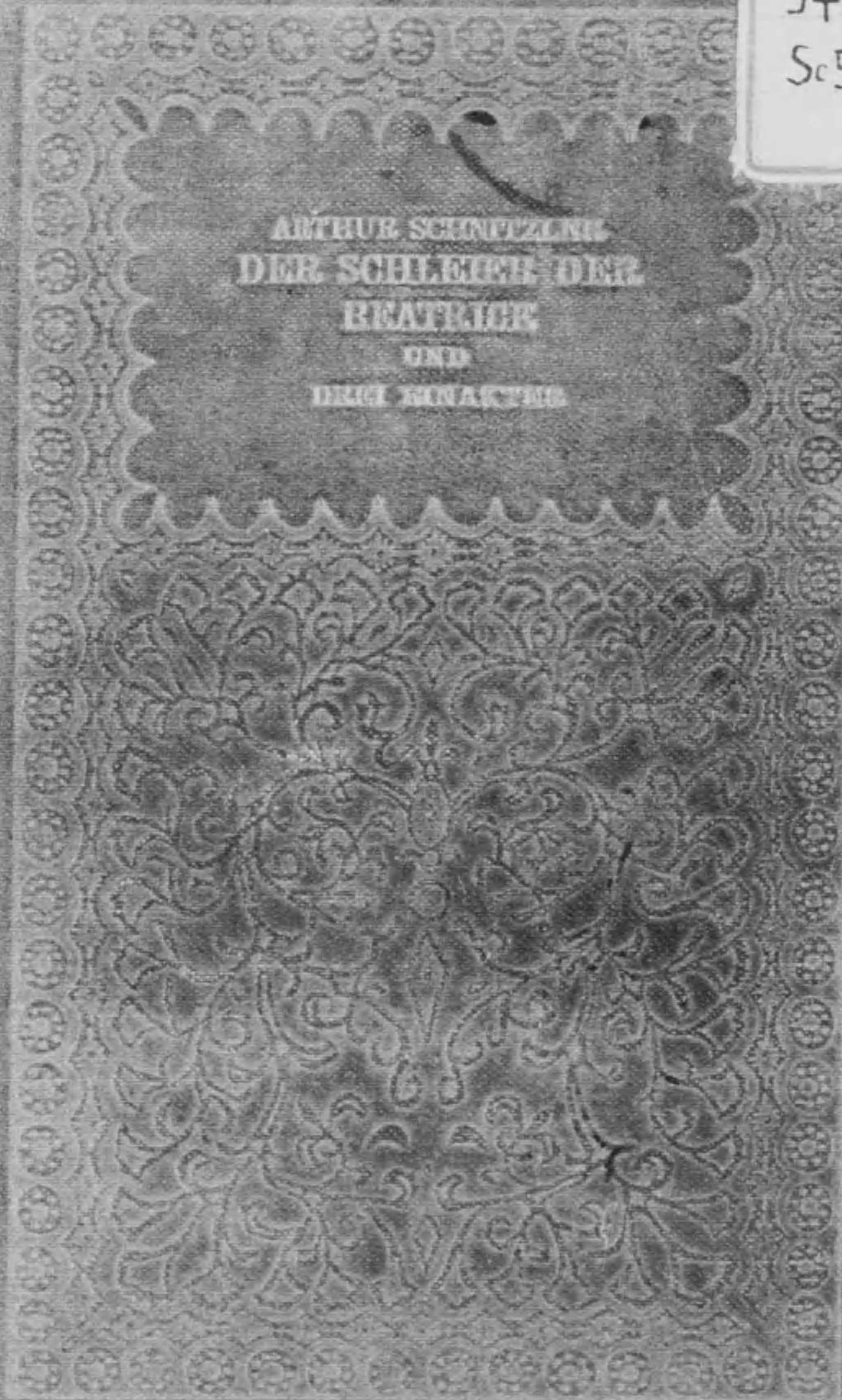
始



942

Sc5

ARTHUR SCHITZLER
DER SCHLEICH DER
BEATRICE
UND
DREI SONETTEN





Arthur Tappan

942
Sc5

ARTHUR SCHNITZLER
DER SCHLEIER DER
BEATRICE
UND
DREI EINAKTER

三井光彌撰譯

シュニツレル戯曲集

東京春陽堂版



序

獨特なる技巧と情調の氣分藝術として珍重せられるシユニツツルの一幕物は、之れ迄可なり
に多く我が國に紹介もせられ、一般に知られても居るが、その三幕以上に亘れる大規模の戯曲に
至つては、その數十數篇の多きに上れるにも係らず、僅にその一二を除いては未だ殆ど紹介せら
れて居ないと云つても善い。然しシユニツツルは、普通に云はれて居る様に、決して單に輕妙
な短篇小説或は一幕物の作家として獨特の位置を占むるのみならず、優に四幕或は五幕の大規模
の戯曲創造の手腕に於ても決して缺けて居る譯では無い。之等の大規模な形式の戯曲の中でも、
『詩的價值の豊富なる點に於ては、彼れの戯曲中此曲の右に出づるもの無し。』(山岸博士著「現代
の獨逸戯曲」と賞讃せられ、『彼れの全作物中最も完成せる、藝術的に最も至純なる物』(ヨゼフ・
ケルネル)と評せられる「ベアトリーチエの面紗」彼れの創作力の正に圓熟期に達せる三十七才
の作)の如きは、之れを如何なる點より觀察するも、實に堂々たる大戯曲である。
それは決して、量に於て稀に大きな五幕物であるとか、スケールが如何にも雄大であるとか

もまして「戀と死」の藝術である。何となれば曲中の人物は總べてこれ敵軍の重圍に陥つて直接に「死」に面せる人々、人情の常として「死」に面しては今更に「生」に執着し、「生」に懷れては「戀」を漁り、「戀」に疲れ或は破れては又「死」に歸する、すべて之れ「生」と「死」と「戀」との目まぐるしき輪舞と交響樂であり、此渦中に木の葉の如くに轉々翻弄せられる人間の憧憬と幻滅、愛慾と憎惡、希望と不安の反映ならぬは無い。従つて曲中の至る所戀と死に關する作者の考察と警句とに充ち、中にも第三幕の終、死に面せる詩人フィリッポが死の謎と不安と醜とを説く言葉の如きは一讀人をして戰慄せしめる力がある。誠に此曲はシュニツツレルの戀と死の詩及び哲學の集大成である、ケルネルの所謂「最も完成せられたる」といふのは此意味に於ても亦眞で無ければならぬ。

時代は文藝復興期の文明が正に爛熟期に達せる十六世紀の初頭、場所は文藝復興の淵源たるイタリアの中にも、世界最古の大學所在地として最も早くより文化開け、従つて享樂的色彩頗る濃厚なるボロニアの町である。兼ねてボロニアの領土を併合せんとの野心有つた梟雄チエザール・ボルジアはボロニアの城主リオナルド・ペンテウオリオ公がイタリア及びギリシア漫遊の旅に出でしを好機とし、その不在中代官として政權を握れる奸臣マリスコッテイミ相通じ、此機會に乗

登場人物が頼しい數に上る(名を現された者のみで三十五名)といふ様な事のみを云つてゐるのでは無い、單なる叙情的或は氣分本位的作品たるに終らずして、所謂戯曲的な力を持つて居るといふ點に於て大きいのである。——その目まぐるしく回轉する場面の變化(何幕何場の所謂「場」の多い事を云ふのでは無い)に於て、その多數登場人物の種類の豊富と動作の變幻を極むる點に於て、觀客をして人物の運命と事件の成行に對する好奇心と緊張とを最後迄持續せしめる技巧の點に於て、殊に及び難き技巧の妙を發揮せる群衆の場面(第一及第四幕)に於て。故に此作はやゝ倦怠を催させるかも知れない數ヶ所の長臺詞をどうかしさをすれば、實際の上演に於ても、やり方の如何に依ては、隨分成功し相な可能性を有つ戯曲である。此戯曲が或る評家に依て沙翁の戯曲殊に「ハムレット」のスタイルと共通する物を有すると稱せられて居るのは、決して韻文と散文とを巧になひ交ぜたその文體に於て酷似して居る爲めのみでは無い、その華やかな舞臺の雰圍氣に於て、そのロマンティックな悲劇的效果に於て、兩者の間に一派相通する物あるが爲に他ならない。之れを見ても此戯曲が一片の單なる「讀む戯曲」で無い事だけは了解せられるだらう。

シュニツツレルは由來「戀と死の詩人」と呼ばれて居る。此戯曲の内容を一言にして盡し得可き言葉を求めたなら、矢張り「戀と死の戯曲」と稱する他は無いだらう、否彼れの如何なる作物に

じて内外策應して年來の目的を達せんと計る。彼れは偽善の腕をさし延べて我が領地にポロニア公を迎へ、先づローマに於ける饗宴の席上公を暗殺せんとしたが果さず、更に公を歸國の途に要せんとして之れも失敗に終り、公は一年目に無事ポロニアに歸る事が出来て、叛逆を謀れるマリスコツテイを捕へて獄に投ずる。然し此時既にボルジアの大軍雲霞の如くにポロニアの町を圍んでしまつたので、その運命は最早定まり、血氣果斷の公は明日早朝敵軍の眞只中に斬入つて華々しき討死を遂げんと覺悟する。此曲は公が入城の日の午後始まり、その翌朝即ちポロニアの滅ぶる日の朝に終つて居る。

ローマ法王アレクサンデル六世の庶子チエザール・ボルジア（一四七五—一五〇七）は無論歴史的人物である。彼れは還俗して後には、目的の爲には手段を選ばざる有らゆる奸策と詭計とを用ゐ、果ては「ボルジアの毒」と稱せられる一種の毒藥まで發明して多くの貴族を亡ぼし富豪を殺害して領土や財寶を奪つたといふ有名な梟雄である。ペンテウオリオといふのは、當時ポロニアの町に於て榮えた「公」級の貴族の家名である事は事實であるが、此曲のリオナルド・ペンテウオリオ公といふのは果して實在の人物であつたかどうかは分らない。マリスコツテイ其他の貴族廷臣等の人名に至つては恐らく作者の空想から生れた

架空の人物であらう。但し十六世紀の初にポロニアの町が法王領に併呑せられたといふ事は歴史的事實である。

此ポロニア没落の日に先立つ前夜、ポロニア公は不可思議な運命の悪戯の弄ぶ所と成つて、今宵一夜の命にも係はらず、否むしろ唯一夜の命の故に、町の職人の娘ベアトリーチェと結婚の式を挙げ、城内に盛大な祝宴を開いて彼れの所謂貴族（「今宵は、家柄や出生の如何を問はず、美しくさへあれば、而して美しい者はすべて皆貴族だ。」）なる多くの男女を集へて、篝の光ほの暗き城内の庭に於て前代未聞の放縱な場面が展開せられる。公は互に抱擁熱狂せる幾百組の男女に向つて、「今宵取結ばれる總べての縁は只今宵限りの物だ、曉の光と共に總べては解かれて何の係累も残されてはならない。但し若し今宵唯一夜の奇縁に依て此世に生を享くる子供有らば、予はその紀念として、彼れに生涯貴族の稱を與へるであらう。」とさへ叫ぶ。只見る——肉は肉と赤裸々に相撃ち、エクスタシーの吐息は惱ましき呻吟の聲と相交る。斯くも肉の香にむせぶが如き群衆の場面は、戯曲に於ては云ふに及ばず、一般に如何なる種類の文學に於ても多くその比類を見ない。

此夜のあらゆる奇縁中の奇縁たるポロニア公夫妻を中心として、同じく「生」と「死」と「戀」の輪

舞に加はる者には——許嫁の娘を裏切つて他の女に走り、彼女に失望して毒を仰ぐ詩人（フィリッポ）有り、嫉妬のあまり自ら妹を殺さんとする妖婦（ロジーナ）有り、神の如くに渴仰する女の柔肌を唯一度觸れ得んが爲めには一瞬の陶酔の醒むるも待たで彼女の手に殺されて悔いざる若き貴族（マルウエツチ）有り、愛人に棄てられて絶望の極凄惨なる沈黙の狂亂に陥る可憐の少女（テレジーナ）有り、結婚式への途上花嫁を奪はれて我が心臓を刺貫く純潔無垢の青年（ウイットリ）有り、失戀の痛手の爲めに男性に對する復讐の鬼と成つて、今後我れを抱く程の有らゆる男は必ず立ちどころに死すべし、と物凄き呪の誓を立て、然も直に之れを實行する娼婦（ルクレチア）有り、……すべて之れ戀故身と魂とを燒盡して遂に死の手に歸する人々の群である。

而して女主人公ベアトリーチエに至つては、花に戯るゝ胡蝶の如くに輕々と男より男の胸へと轉々して、詩人の情熱を弄んではその許嫁と親友と國家とに對する義務を放棄せしめ、純潔にして眞摯なる青年を棄て、は之れを失戀自殺せしめ、彼女を一瞥したるボロニア公の胸には忽ち我が身のみならず國家の安危をも忘れしむる不幸なる情熱の炎を煽り、結婚の當夜夫を欺いては情夫の許に走り、更に詩人をして絶望の極毒盃を仰がしめ、遂には肉身の兄の成敗の刃に斃れるに至る迄の彼女の足跡を辿り來れば、常に異性の敵、男性に附纏ふ吸血鬼として至る所に禍の種を

撒散して憚らぬ虚偽の塊、惡の權化としか思はれない。彼女にやや類似せる女性のタイプは之れをストリンドベルク及びウエデキンドの戯曲にも見出す事が出来る。然しながらシュニツツレルのベアトリーチエは決して單なる「妖婦」でも無ければ「毒婦」でも無い、一見甚だ奇異に見える事實ではあるが、シュニツツレルの女性の最も特色ある一典型として、彼れの獨創の女性とさへ稱せられる彼の「ジューセス・メーデル」（可愛い小娘）型により近い類似の多くを見出す。何となれば彼女の本質は彼の「ジューセス・メーデル」と同じく素朴其物だからである、彼女の惡は決して意識せられたものでも無ければ、又故意に出でたものでも無く、むしろ彼女の中に深く潜んで居る或本質的な物無の意識的な發現である。彼女の氣紛れは偽より偽へ、罪より罪へと轉々して、その接する程の一切の人間を毒する事は事實である。それにも係はらず、詩人フィリッポの言葉に従へば、「彼女は決して嘘を吐く事の出来ない女である、只各々の脈膊の打つ毎に常に新しき別々の眞理がその脈管を駆廻るのみである。」彼女の「眞理」に従つての行動を、吾人が虚偽と稱する事が出来ない事は勿論である。「誰に對しても一度も敵意を持つた事の無い此私が、どうして多くの人々にあんな禍を及ぼしたのか分らない。」——之れベアトリーチエ自身の至極尤もな述懐である。彼女の爲めに最大の禍を蒙つた善のボロニア公でさへ彼女を評して「無邪氣な子供だ。」と云

ひ「わしはどうしてもあの女を憎む氣に成れない。」と云つて居る。此意味に於て彼女は最も素朴な「ジュネーセス・メーデル」で無ければならない。斯くして彼女の行爲が素朴であり、無自覺的であればある程、彼女の個性の色は益々薄く、元素エレメンタル的な物に成り、女性其物の原型としての意義が益々濃厚に成つて来る。斯くして彼女は此世に禍をもたらす物としての女性、或は「謎」としての女性の代表として見られて来るのである。而して今其「謎」を奥深く追究して行けば、我々は彼女を掩へる「面纱」の蔭に嚴然と控へて居る「生の衝動」といふ本體的な物に當面する。彼女がその戀人を裏切つて一人淋しく死なせたのも、死に當面してその凄惨に堪へ難かつたからである、其他の有らゆる氣紛れも嘘も、すべて皆彼女の生きんとする本能の現れで無いのは無い。而して彼女が最後に生の倦怠に疲れて却て死に憧れるに至つて、我々は彼女の中に殆ど解脱せる清淨崇高の一女性を見るに至る。彼女が第三幕の幕切れに於て、「生きなければならぬ——生きなければ……」と叫ぶのは、單に彼女自身の魂の偽無き叫であるのみならず、彼女に依て代表せられる一般女性の叫聲で無ければならない。シュニツレルは後年此モチーフを「生の叫び」といふ三幕物に於て、既に題名の示すが如くに、一層具體的に、問題的に取扱つて見せた。

ベアトリーチエの「面纱」なる物は、此戯曲の題名として用ゐられてあるだけに、何か由有りけ

に見えて、何を象徴して居るのだらうといふ様な好奇心と詮索心とを惹起す。然し茲に象徴といふ言葉を用ゐるならば、單に面纱のみを象徴として見るよりも、ベアトリーチエ自身を永遠に女性の裡に潜む謎の象徴として見た方が適切だらうと思ふ。此意味に於て彼女も亦一の「永遠の女性」である。然しながら「永遠の女性我等を導いて昇らしむ。」「ファウスト」の最後の一句の「永遠の女性」は、我々に魂の自覺と淨化とをもたらして我等の爲に天國の扉を開いてくれる物であつて、彼のダンテのベアトリーチエを初とし、ゲーテを経て浪漫派の藝術の「永遠の女性」は總べて皆之れであつた。然るに我々のベアトリーチエに至つては、その反對に、女性は「不義と罪惡の大なる容器、卑劣と汚辱の貯藏所」と云つたユイスマンの言葉にそつくりはまるものである。然し乍ら、其不義や汚辱は決して彼女自身に本質的な物では無く、少し無理な譬喩ではあるが、彼女自身は之れを「容器」に譬ふるならば、水晶或は硝子の器で無ければならない。それに盛られたら一切の汚物にも係はらず、その本質は硝子の如くに汚される事無く、水晶の如くに透明な清らかさを保ち續けて行くからである。此意味に於ては彼女の中にさへもまた我等の魂を淨化し我等を天國へ導く縁としての「永遠の女性」の一面が潜んでゐないとはどうして云へやう。

近く東京の最後の日を親しく目撃した我々は、ポロニアの最後の日の前夜を描いた此戯曲を見て、特種の感慨無きを得ないのは自然な事である。此曲に現れて居る當時のポロニアと震災前の我が帝都と——そこには多くの共通なる物を見出す事が出来る様に思はれる。——文化の爛熟に於て、卅紀末的頹廢の氣分に於て、有らゆる社會に漲れる淫蕩なる雰圍氣に於て。而して彼れは敵軍の攻撃に亡され、之れは自然の暴力に破壊せられる。彼れに於ては、最後の日の既に明日に迫れるを知るを以て上下擧つてその最後の一夜を最も本能的に極度に迄享樂せんと欲し、之れに於ては、何人も豫想し得ざる唐突なる末日の出現に只恐れ、惑ひ、戦くのみ。従つて此曲に描かれたる如き最後の一夜の放縱なる場面は、幸か不幸か我々の経験した所では無かつた。然しながら、若し假に東京市民が何等かの方法に依て彼等の最後の日の明日に迫れる事を豫知し得たとして、彼のボルジア軍の重圍に陥れるポロニア市民の狂態にもまさる自棄的放恣に陥る事が無かつたらうかどうかと省みて見たならば、恐らく思半ばに過ぎるものが有らう。少くとも我々は此戯曲を此方面から觀察する事に依て、震災前の東京の或一面を暗示せられ、反省せしめられる點に於て、單なる藝術品として以外に特種の興味を感ずる事は事實である。序に、勝れた戯曲的技巧の産物なる第二幕の群衆の場面に於ける「流言蜚語」の取扱方の如きも、此際藝術的に又心理的

に示唆する所頗る多きものである。

最後に此戯曲の總評としては恐らく最も妥當ならんと思はれるドクトル・ユリウス・カツプの言葉を以て此曲の解説を終へる事にしやう。——

「シユニツツレルは此戯曲よりも舞臺上に於てより効果有る戯曲や、より情調的なる場面を作り得た事は有る。然し乍ら之れに似たる詩美、之れよりもより偉大なる藝術品を創造した事は決して無かつた。「ベアトリーチェの面紗」こそは疑も無く一般近代文學の最も重要な産物の一つである。」

シユニツツレルの一幕物に至つては世既に定評が有る。その一幕物集「操人形」、「生甲斐ある時」、及び「緑の鸚鵡」の三卷に收められた十種的一幕物はすべて皆玉の如き藝術品であるが、今茲にその全部を譯出する餘裕の無い私は、各の集より一曲づゝ最も代表的と思はれる物を選んで紹介する事とした。

「操人形」集の三曲は何れも其題名の示す如く、一般人間を運命の糸に操られる人形と観する作

完全に残り、且つ不思議な事には、未だ組版に着手しなかつた原稿の大部分は、印刷所から持ち出されて助かつた唯一の物であつたといふ佛壇の引出しの中で無事であつた。結局失はれたる原稿は總べて二十八枚に過ぎなかつた。多くの貴重なる物が失はれたる中に、此書が果して斯くまでに思掛無き幸運に恵まれる程の価値有る物であるかどうかは知らないけれど、灰燼の中から生れ出た此『戯曲集』の出版に依つて、今春同じく春陽堂から出した同じ作者の小説集『甦れる春』に共に茲に兩姉妹篇を完成して、藝術家としてのシュニツツレルの全き面影を髣髴し得た事は、譯者の大なる喜びである。

大正十二年十一月

譯者

者の人生觀を戯曲化した一幕物のみを集めたものであるが、此思想を最も明瞭に強調せる『傀儡師』(一九〇二)は、おこがましくも自ら運命の神に代つて他人の運命を操らんとした所謂傀儡師が、却て運命に弄ばれる傀儡と成り終る事を描く。

『生甲斐ある時』集中第一の傑作なる『最後の假面』(一九〇一)はその思想的內容よりもむしろその技巧の點に於て、シュニツツレルの戯曲家としての天才を最もよく發輝したもので、若し之れが優れた舞臺の上に演ぜられたなら、殆ど凄慘面を反けなければならぬ程の素晴らしい効果を生ずる事だらうと思ふ。實に此集中の、否彼れの全一幕物中の白眉たるのみならず、私は常に近代劇の一幕物中の最も傑れた物の一つだらうと思つて居る。

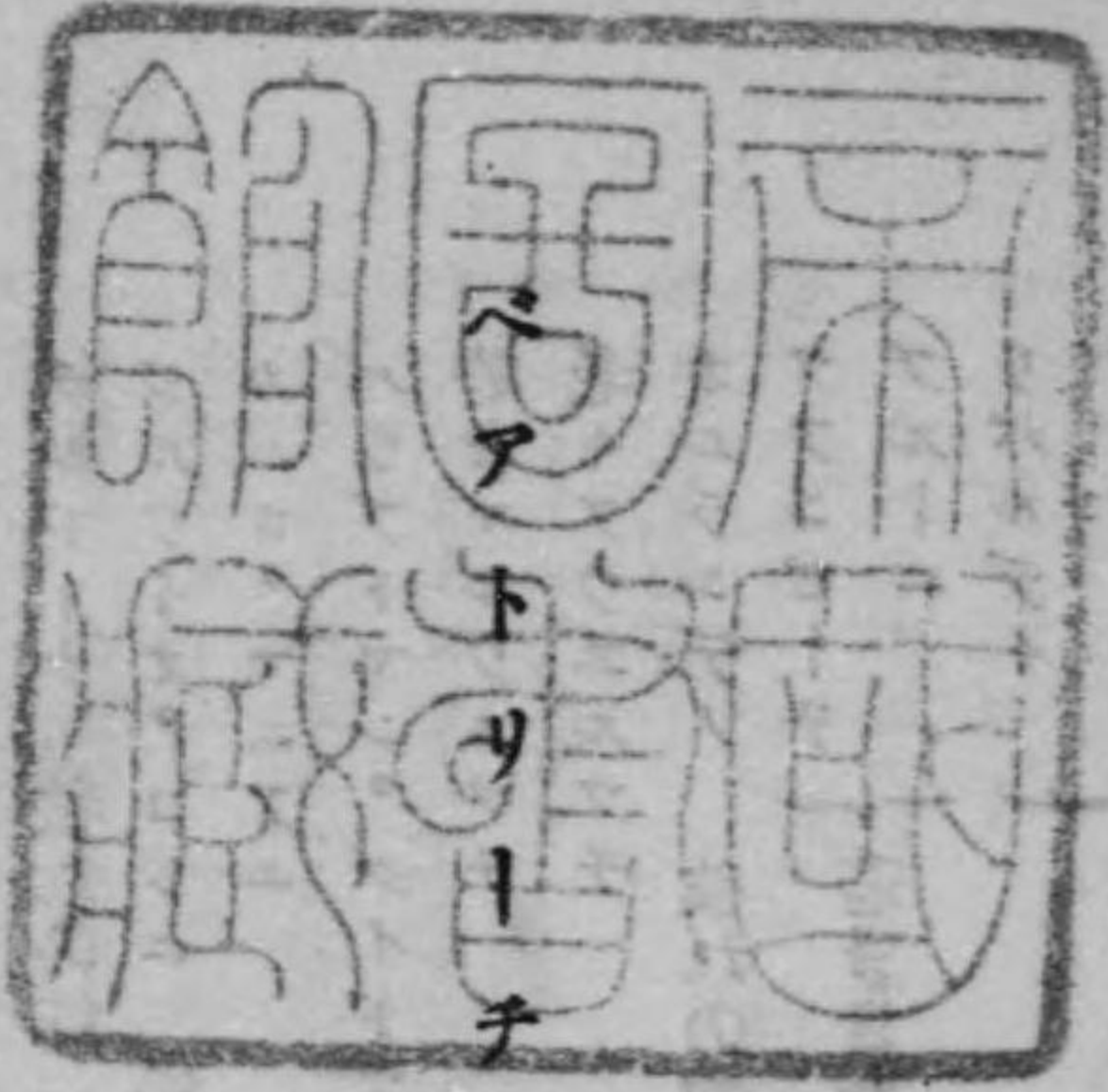
現實と夢幻の錯綜を主題とする『緑の鸚鵡』集中の『道伴¹れ』(一八九八)は、嚴肅の態度を以て人生に臨む人との之れを輕々しく片付けて了ふ人とを對照して前者の幻滅を描き、性及び結婚の問題に關する興味深き暗示を與へる作品である。

12

彼の恐る可き大震災は本書の印刷工程の殆ど三分の二に達せる時に突發して、芝罘町の印刷所は無論全焼した。然しながら幸にして二三四頁(ペアトリーチエ)の第四幕の終、迄の紙型は

内 容

ヘアトリリーチェの面紗 (Der Schleier der Patrice) 1
第一幕 (詩人フィリッポの家の庭園) 1
第二幕 (ホロニアの往) 21
第三幕 (詩人フィリッポの家の廣間) 110
第四幕 (城内) 174
第五幕 (詩人フィリッポの家の廣間) 232
傀儡師 (Der Puppenspieler) 252
最後の假面 (Die letzten Masken) 262
道伴れ (Die Gefährtin) 311
譯者の序 卷頭



エの面紗

(五幕)

アルトウール・シュニツツレルは今日既にクラシカルな位置に到達せる詩人である。彼れと同じ程の正確さを以て同様の事を主張し得る現在のドイツ詩人を私は一人も知らない。……………彼れは今日、過去二十年間に亘つて、最も多くの完成せる藝術品を寄與せるドイツ詩人として立つ。

フランク・ウエデキント

- ファイリツボ・ロスキー 詩人
- アゴステノ・ドツシー 音楽家
- エルコレ・マヌツシー 彫刻家
- チトー・テバルデイ
- アントニオ・ニジエツテイ
- 老ナルデイ BORONIAの紋細工師
- ナルデイの妻
- ロジーナ(十九才)
- フランチェスコ(十八才)
- ベアトリーチエ(十六才)
- ウイットリーノ・モナルデイ ナルデイの弟子
- カツボニ 香水香料商
- ベンノツツオー 彼れの息子
- バジー 商人
- クラウデア
- カテリーナ
- BORONIAの若き女

人物

- BORONIA公リオナルド・ベンテウオリオ
- 伯爵アンドレア・フアントウツチ
- テレジーナ 彼れの妹
- ジルウイオ・コジニ 秘書役
- カルロ・マニアニ
- ハウプトマン・グイドツテイ
- 若きマルウエツチ
- 老キアウエルツチ
- オルランデノ 彼れの甥
- ツアンビリー
- ブルーニ
- リバルデイ
- ウアロリ
- カンベツジ
- アルロツテイ
- 若き貴族
- 將軍
- 官廷の役人

時 代 十六世紀の初。
場 所 ボロニアの町。

マルジエリータ ボロニアの娘
イサベラ フローレンスの歌妓
ルクレチア
パツテスタ フイリツボの僕
第一、第二、第三の若き貴族
第一、第二、第三の市民
第一より第五迄の傳令
第一及び第二のヴァイオリンの樂師
笛の樂師
ラウテ(似た樂器)の樂師
捕へられた男(聲のみ)
其他 貴族、町の男女娘、兵士、番人、歌妓、僕等大勢。

第一幕

詩人フイリツボ・ロスキの家の庭園。正面の奥は塀。塀は可なりに高く、その大部分は木の葉で掩はれてゐる。塀の向側には往來が在る心。それを隔てて寺々の塔や家等が見える。遊彼方には岳。舞臺の前方右手から六級の廣い階段を上ると、柱で支へられた一種の露臺。此露臺は右手後方にて低い建物の正面で仕切られる。其正面の中央には建物の内部に通ずるドアが有る。三本の細徑舞臺の前方で交る。その一は前方左手より、他は後方右手、即ち建物の脊後より來り、第三の徑は前方で左手の其れと合し、彎曲して舞臺の奥に消える。建物の前、可なり近くに一本の高い樹木。その下には大理石の長椅子。暑い夏の日の午下り。フイリツボ・ロスキ、組合せた兩手に頭を載せながら、椅子の上に寝そべつて居る。アゴステノ・ドツシーはラウテ(マンドリンに似た樂器)を手にしながら彼れの左側に立つ。今や正に奏し終つて、丁度樂器を下したまゝ。静寂。

フイリツボ 濟んだ?
アゴステノ あ。

アゴステノ 一ヶ月にもなりはしないよ！

フィリツボ (活潑に、獨言の様に) まだ三日にもならない！

アゴステノ いや、三日よりはなるだらう。

フィリツボ (起上る。) 僕の「今日」と「昨日」とは實際そんなものさ、御互に目と目と見合せ
ても顔が分らないのだ。まるで眞暗闇の往來の眞中で出逢つた兄弟の様なものでね。いや、ア
ゴステノ君、そんな物を僕の作つた歌だなんて云ふのはどうぞ止してくれ給へ。どんな物だ
つて、忘れ得る様な物なら、もう自分の物では無いんだからね。我々がしつかりと此手の中に
握りしめて居る物——どんな心の奥底に潜んでるやうと、どんな世界の隅つこにかくれてるや
うと、いつでも生々と呼起せる様な物で無けりや、自分の物とは云へないんだからね。だから
今の歌なんぞは決してもう僕のものでは無くなつてゐるんだよ。

アゴステノ 君の作つた歌では無いつて？ しかもあのレジーナさんに捧げた歌だよ！ それ
でも君は知らないと言張るのかい？

フィリツボ どうも存じませぬね、そんな歌はまるで小耳にはさんだ覚えも無いと同様なんです
がね！

フィリツボ 君が作曲したのかい？

アゴステノ 否いいえと云つた方がい、だらうよ。作曲なんぞしなくつても、其ま、ひとりでメロヂ
ーを爲してゐる様な歌も有るものだからね。今のは全くそれなんだ。

フィリツボ そんな素晴らしい歌を作つたのはどなただか承り度いもんだね！

アゴステノ 君は夢でも見てゐるのかい？ フィリツボ君！

フィリツボ さうかも知れないね。然し平生ふだんよりも餘計寢惚けて居る譯でも無いのさ。(思ひ出さ
うとする様に) 其詩人の名前はもう聞いたのだつたかしら？

アゴステノ フィリツボ君！ 君は自分の作つた歌を忘れてしまつたのかい？

フィリツボ (見上げながら) 自分が？

アゴステノ もう忘れてしまつたのかい？

フィリツボ 全く、思ひ出せないね！ 何しろあんまり古い事だからね。

アゴステノ 古い？ フィリツボ君、君が今の歌を作つた時に咲いてゐた薔薇の花は今でもそれ
そこの花壇に咲いてるよ。

フィリツボ じゃあまだ一年にもならないんだね？

アゴステノ よくもそんな事が云へたもんだね——まるで、忘れて了つても差支無い事かなんぞの様に!

ファイリツボ 差支無い?——忘れなければならぬ事の様に、と云つて貰ひ度かつたね。そして忘れて了つたのは、歌だけじゃ無いんだからね!

アゴステノ (心配相に) ファイリツボ君、一體どうしたといふんだい? 三日間といふもの家を締切つて、僕も、有らゆる友達も、一切寄付けない。そしてやつと今日になつて溢々入れてくれたと思やあ、気が抜けた様な、困つた様な、變な顔をしながら握手だけはしたが、目付といふと何か甘つたるい夢でも見る様にトロンとしてる。おまけに、僕が頗るの重大事件を報告しやうと思へば、下らない饒舌か何ぞの様に抑へ付けて了つて、ラウテをやつてくれの、歌をうたつてくれのと云出す……!

ファイリツボ ほんとに僕の方からうたつてくれと云つたんだね? 今度こそ其重大事件なる物を拜聴するよ。何でもヴェニス軍勢が押寄せて来た……とかいふ話だつたね、それから、マリスコツティは悪者だとか何とか……さうじゃ無い?

アゴステノ マリスコツティは悪者に相違無いよ。然し僕はヴェニスの軍隊なんて云つた覚えは

無いよ。ローマニア公の軍勢が押寄せて来たんだよ。

ファイリツボ (全然器械的に) ボルジアがかい? そいつはいけないね!

アゴステノ いけない? いけないどころの騒ぎじゃ無いよ! 全く物凄いな話だよ——此二日間

といふもの、まるで大嵐に吹寄せられでもした様に、南の方からも、西の方からも、雲霞の如

き……

籠を携へたるファイリツボの僕二人庭の奥から出て来て、徑に花を撒き、階段にも撒き散しにかゝる。他の徑からも、果物や飾菓子の大皿を捧げ持てる僕三人現れ、階段を登つて家の中へ消える。ファイリツボ目で彼等のあとを追ふ。

アゴステノ (びつくりして言葉を切つたが、又口を開いて) どうしたの? 何かの御祝でもあるのかい?

ファイリツボ 「御祝」なんていふ貧弱な言葉で現せる物じゃ無いよ! けれど、蠟燭の燃残りから来るのも、太陽から来るのも、云つて了へば一樣に「光」だからね、その流儀で云へば、御祝をやるのさ。

アゴステノ こんな場合に? 悪いしやれだよ! ようく聴き給へ——今はね、一刻毎にチエザ

フリリツボ 僕は未だ逃けると……

アゴステノ 君は此ボロニアの町を、君の許嫁を置き去りにして逃げ出さうといふんだね？

フリリツボ 許嫁なんぞ僕には有りやしないよ。

アゴステノ 何だつて？

フリリツボ 許嫁なんぞ有りやしないよ！

アゴステノ さうだ、そんな言葉を吐く奴は我が親愛なフリリツボ君では無いに相違無い！ 白状し給へ、君は詭計を以て僕の親友に化けたのだらう、そしてほんとうのフリリツボ君は此際約束を守つて、ちやんと行くべき處に行つて居るのだらう。

フリリツボ 僕は正眞紛無しのフリリツボに相違御坐いませんよ！

アゴステノ そんな何かの魔力が君と許嫁の仲を割いたのだらう。然し君の本心を呼戻す力はそれよりも強いのだからな。(迫る様に) 此太陽が沈まない中に、フリリツボ君、いや、多分今此瞬間にも、あのテレジーナさんは君の他には誰一人此世に頼る者の無い孤兒に成つて了ふ筈だ。あの娘は今たつた一人で臨終のお母さんの側に附いて居る、此一日の間にあの娘にとつて一番大切な物を、母と——それからたつた一人の兄をも同時に失はなければならぬといふ悲

ールの大軍が此ボロニアの町近く迫りつゝある時なんだよ、そして肝腎のマリスコツティ氏は殿様の御留守中此町の實權を握つて居る身でありながら、自分も市民も擧つてあのボルジアの奴に降参して了はうといふ積らしいんだ。尤も防禦の命令は出して居るが、見え透いた嘘さ、どんな目の無い奴だつて騙されはしないよ。城門も今日は鎖して守つて居るけれど、今に見給へ、明日の夕刻前にはすつかり開け放して了ふに定つてる、さうなれば、チエザールの奴は堂々と此町に乗込んで来て、我々は奴の奴隷にされて了ふばかりさ。

フリリツボ (不安相に) 城門は鎖されてるつて？ 四方がみんなかい？ そして我々ももう町の外には出られなくなつたのかい？

アゴステノ 我々も？——君は何故そんな事を訊いてるんだい？

フリリツボ もう誰も此町を出る事が出来なく成つたのかい？

アゴステノ 何だつて？ そんなら君は……？

フリリツボ ねえ、君、もう逃避は無いのだらうか？

アゴステノ 君は氣でも狂やあしないか？ 君は逃出さうといふ積なのかい？

フリリツボ ねえ、君、もう逃避は無いのだらうか？

アゴステノ 君は氣でも狂やあしないか？ 君は逃出さうといふ積なのかい？

儻な運命に迫られて居るのだ。

フィリッポ そんならアンドレア君から何か凶い知らせでも有つたといふのかい？

アゴステノ いや、悪い知らせも無いが——善い知らせも無い。然しもう分つてるよ、あの人は再び生きては歸らないだらう。

フィリッポ 君は何を云つてゐるんだ？

アゴステノ アンドレアは再び歸つては来ないといふ事さ！ 一年前に殿様と一緒に出發して行つた連中は、一人も生残つては歸つて来ないんだからね、殿様だつてもう御歸りにはならないんだからね。

フィリッポ 誰がそんな馬鹿な事を云觸すんだい？ 殿様の一行は今歸郷の途中なんだらう？

アゴステノ 途中であつたんだ——今は然し何處か違つた所へ行つてるよ！

フィリッポ それはほんとうなのかい？

アゴステノ ローマから最後の消息が有つた切りさ。殿様は其處でボルジア家の奴等に表面上は大いに接待せられて、ローマを立つまでは儘に生きておいでになつたに相違無いのだ——今日になつて見ると、よくまあ御無事でローマを出られたものだと思議に思はれる位だがね。然

しそれからといふもの、一人の使者も、一本の手紙も来ないといふ始末さ。法王はローマでやつ付けて了ふ機會の無かつた荒療治をとうとう道中でやつたものと見える。そしてマリスコツチの奴だけは、何も彼も先刻御承知で居るらしいのだ。

エルコレ (ドアを開いて階段に現れる。) 世間は引繰返る様な大騒だよ！ 君達は一體こんな所で何をやつてるんだ？ (階段を降りて来る。) 御一人は椅子の上にもふんぞり返つてゐらつしやるしもう御一人は大事相にラウチなんぞを抱へ込んで御座る、そして僕は薔薇の花びらを踏んで行くといふ寸法だ。そんなら君達は未だ何んにも御存じ無いらしいね？

フィリッポ 此庭はぐるりを塀で圍はれて居るし、窓といふ窓は窓掛でたれ込めて置く、僕は戸外の往來をあばれ廻つて居る馬鹿騷は一步も内へ入れはしない。但しさうした馬鹿騷の先觸れだけは時々こゝへもやつて来るよ。

アゴステノ 一體何が始まつたんだ？

エルコレ 殿様が御歸りになつたんだよ！

アゴステノ ほんとうかい？

エルコレ 儘に此二つの眼で見て来たんだからね。

アゴステノ 君聞いた？ ファイリツボ君！（エルコレに）もつと詳しく聞かしてくれ給へ！
 エルコレ 未だ夜が明け切らない中に、何の門からかは分らないが、ともかく誰にも気が付かれずに、御歸城になつたらしいんだよ。尤も、早朝からそんな風の噂は町中に有つたけれど、誰も信じやうとはしないのさ。それから、こんな事を云ひふらす奴も有つたよ——マリスコツテイの甥の奴は尻に帆掛けて逐電してしひ、當のマリスコツテイは半へ打込まれたんだよ、なんてね。然しそんな流言飛語だけは非常にやかましいが、御城のあたりは相變らずシーンとしてるんさ——番兵はいつもの通りにちやんと出てゐるしね。そして物見の塔や城壁からは刻々と櫓の齒を挽くが如き注進さ——やれ南の方からは雲霞の如きローマ軍が押寄せて来るの、やれファエンツアにはチエザールの射撃兵が集つてるの、やれ遠くのモンテーゼ街道にはまるで塵埃と一所に地からでも飛出した様に騎兵の一隊が湧いて出たのと……それからあのマリスコツテイの奴が疑を避ける爲めにわざと八百長的に昨日繰出した五百の一隊は全滅だといふ事が分つたので、さうした根も葉も無い噂や殿様御歸城の風説等に煽り立てられて、ボロニア中に不安の念がバツと燃上つたといふ譯なのさ。未だ裏切られたとは思はないが、誰しもじつと落付いては居れない程に脅されて了つたんだね。それでイザイアの門を堅めて居た傭兵共はとう

／＼堪へ切れなく成つて、御城の前迄押掛けて行つて、城内の意向を確めやうといふ騒ぎに成つた。それを率ゐた者はリバルデイ將軍で、そのあとから熱狂した群衆が潮の如くに押寄せたといふ騒ぎ。と其時、御城の門をサツと押開いて、群衆の真只中へ——あの時の歡呼の聲はこゝ迄も聞えた善だがね——殿様と君の友達のアンドレア伯とが靜々と乗出して來られたんだ。
 ファイリツボ（昂奮して）アンドレアも？

エルコレ だから君がこんな處でぐづ／＼してるのが僕は不思議で堪らないんだ。そしてあの人の歸つた事さへ御存じが無いところを見ると、息子の歸るのも待切れずに、お母さんが昨夜の中に死んで了つた事も知らないだらうね？

アゴステノ ねえ、ファイリツボ君！ テレジーナさんのお母さんがとう／＼亡くなつたといふのだよ！

ファイリツボ（冷淡な困惑の色。）さうするとアンドレア君は息のあるうちにお母さんを抱いてやる事も出来なかつた譯だね？

アゴステノ そして君の云ふ事は只それ切りなのかい？ ファイリツボ君！

ファイリツボ 全く、あのお母さんが亡く成つたといふのは悲しい事だよ。

エルコレ (不審相に) 僕は一體何處に居るんだらう? かうしてゐると、僕にも何だかあんな町の騒ぎなんぞは嘘の様に思はれて来る! そこの木の葉や梢のあたりには今日の嚴肅な問題とは全く無關係な、冷かな空氣が漂つて居る様だ。君は一體どうなんだい? フイリツボ君!

フイリツボ (沈黙。)

アゴステノ 君のやる可き事は此場合たつた一つしか無いのだ。君は自ら欺いて居るんだね、君は自分の誓言を忘れて居るんだね、然し此瞬間にはいくら君だつて、深い睡りから醒めて、あの事を思出してもいゝ筈だ。君はあの純潔な許嫁の君の前に進み出て、自分の不實を詫びる氣は無いのかい? 考へて見給へ——人は棺の前に立つた場合、大抵の罪は許されるものだからね!

フイリツボ (突然激しい調子で) 「罪」だつて? 秋には木の葉が落ちるし、春になれば又萌え出すさ! 君達はそれを尚「罪」と稱するんだね? 僕には斷じて「罪」といふ物は無いよ! 永遠の法則に身を委ねる事が即ち罪惡だともいふなら知らぬ事——若しそんなら「罪」といふ物は赤ん坊の時から既に我々の中に宿つて居る物で無ければならない事に成るだらう——丁

度、人間呼吸して生きて居る間は「死」が我々の胸の中に絶間無く待構へて居ると同じ様にね! 僕を罪人だといふなら、青春といふ物は地獄の贈物に違無い、そして美は結局罪惡で、幸福は此上も無く猛烈な毒藥だ!

エルコレ さうかねえ! 何だか僕にはもつと小じんまりした言葉で云つても解り相に思へるがね。簡單にかう云つてしまつたらどうだらうね——僕は長つたらしい婚約が飽きくして了つたのだ、それで僕の飽く無き青春は、もつと美しい、もつと面白相な他の女に乗換へて慰めを求めたのだ、とね!

フイリツボ (一寸考へた後) そんなら御言葉通り簡單明瞭に云つてしまふ事にしやう——どうぞ御願だから歸つてくれ給へ、二人とも!

エルコレ (一寸むきにならうとするが、眞面目な調子で) 今日とは詰らない口論なんぞをやつて居られる日じや無い。だから僕は忠告する——之れから直ぐに出かけて行つて、君の親友を迎へ給へ、向ふの方から、どうしたのかと尋ねて來ない中にね。

フイリツボ 尋ねて來たつてちつとも困りはしないよ、屹度答へて見せるよ!

エルコレ 然しあの男にうっかり下手な事を云出して怒らして了はうもんなら、ひどい目に逢ふ

ぜ。尤も君の考へてゐる事なんぞには頓着無く、どうしても、一度はやつて來なければならぬ
 いたがね。

フィリップ それはどういふ意味だい——いやに氣を持たせるじや無いか？

エルコレ まあ聞き給へ！ 僕の首も、此男の首も、それから君の首も、凡そ今日ボロニア人の肩
 に載つかつて居る程の首は、僕はもう（身振で）三文の値も無いもんだと思つてるよ。町のぐる
 りは最早蟻の這出る隙間も無い、そして殿様が御歸りにはなつたと云つても、あのボルジアの
 奴に降参しておめく／＼生き長らへるよりは、むしろ潔く城門の前で討死した方がましだと覺悟
 して居る人達だけがそれを喜んで居る有様なのだ。ボロニアの町の自由は失はれた、そして此
 自由を愛する人々は共に滅びて行く。僕は殿様の御氣性はよく承知して居る積だが、もうかう
 なつては、決して一日もぐづ／＼しては居られないだらう。明日の太陽が沈まない中に我々
 んなの運命は決定する——決定すると云つても、最早唯一つの運命しか残つては居ないので
 が！ だから僕は君達に逢ひに來たんだ。但し僕は豫め仕事場へ入つて、やりかけの鑛物を微
 塵に打こわして、扉を嚴重に鎖して來た。どんな運命が頭の上に降りか、つてるやうが、我々
 三人だけは幸福な日に於けると同じ様に最後の瞬間迄も離れない積りだからね。

フィリップ（叫ぶ様に）最後まで？ たつた一晚の間にもうそんな事に成つて了つたのかい？

いや、そんな筈は無いよ、少くとも僕には最後なんて云ふ事は未だ考へられない！

パツテスタ（フィリップの僕、露臺から來る。）且那樣、只今殿様の秘書官ジルウイオ・コジニ様が
 御いでになりました。

フィリップ 誰だつて？

アゴステノ ジルウイオ・コジニ？

パツテスタ 殿様の秘書官で御坐います。

フィリップ そして僕に用が有るといふのかい？

パツテスタ 秘書官様は殿様の御用でおいでになつたのだと申す事で。

フィリップ 殿様の？

アゴステノ パツテスタ、フィリップ君は御目にかゝるよ！

パツテスタ（退場。）

フィリップ 殿様が此おれに何の御用が有るといふのだらう？ おれの事なんぞ御存じの筈も無
 いが。

エルコレ 然し君の名聲は夙に御存じだよ。

シルウイオ・コジニ (露臺より登場。)

ワイリツボ (彼れに向つて) 私がワイリツボ・ロスキーです。よく御いで下さいました！ 之れは私の友達アゴステノ・ドツシーとエルコレ・マヌツシーで！

コジニ (エルコレに) よく存じて居りますよ。あのケントの公園に立つてる劍士の像はあなたの御作でせう？

エルコレ 左様です。

コジニ (アゴステノに) 覚え違かも知れませんが、あなたは何時か……あれは何時でしたつけ？……

アゴステノ バドウア公が御いでになつて御城で御饗宴が有つた時でした。

コジニ (思出して) あれは私共がボロニアを立つ前日の事でしたね。あれ以来私共は方々で隨分度々ラウテの演奏を聴いたけれど、あなたの足下にも及ぶのは無かつたですよ——全くです。それはともかくとして、三藝術の大家に一度に御目にかゝる光榮を有しやうとは、吉兆がい、ですね。

アゴステノ 實は失禮ながら、私はさつきから不審でたまらないんですが、一體あなたは何時御歸りになられたのですか？

エルコレ 殿様とアンドレア伯だけが御歸りになつて、他の方々は未だ途中に在るといふ噂でしたが——然も無事に御歸りになれるかどうかは、甚だ疑はしいといふ様な事でしたが。

コジニ 私達は全く神様の御蔭で無事に歸れたんです、六人の友達と一所に殿様よりも二三時間程遅れて町に入りました。それから御土産を満載した十頭の動物と三輦の車も持つて歸る事が出来ました——どんな王様でも、學者でも、見た事も無いだらうといふ珍奇な品物を満載してですよ。

エルコレ それは屹度あなたが發見なすつたギリシャの古文書と云つた様な物でせう？

コジニ え、それも有りますがね、貨幣や寶石や、古代の武器や、ボロニアの美人達二十人分の衣裳が出来る位の立派な織物も有ります。それから槍擲けの大理石像も有ります——残念な事には片腕が缺けてるますがね、我々の目の前でカルゾリの燈臺から發掘したんです。若し機會が有つたら、あのケント公園へ持つて行つて建てるといふんですがね——(エルコレに) あなたの劍士の像と並べて。けれども、そんな物だけはまあどうにか持つては來ましたが、それ以

上の澤山の物を奪はれて了つたんです——然もさうした貴重品以上の物をゴフアロとマルコ・ビツテイの二人はもう町の塔が見える處迄來てから殺されて了ひました——七人の家來達も一所に。

エルコレ え？ そんならあなた方は矢張り敵の奴等に襲はれたんですか？

アゴステノ 可哀想なビツテイ！ 僕はその男をよく知つてゐますよ！ あの喜び勇んで出て行つた様子が今でも見える様です——そして故郷の町が見える處迄來てから暗撃に逢つてむざ／＼殺されて了ふなんて？

コジニ 一體敵の奴等は殿様の御一行を目掛けたものに相違無いんです！ ところが不可思議な天祐で、殿様は豫定の道筋を變更して、我々よりも一足御先においでになる事に成つたものですからね。扱て、そんな話を申して居ては中々盡きませんが、いよく御用の筋を申上げる事に致しませう。(アゴステノとエルコレが席を外さうとするので) いや、ちつとも秘密の用件ではありません——有名といふ事がちつとも秘密の事では無いと同様にね。(フィリツポに) 私はあなたに殿様の御挨拶と御賞讃の御言葉と、それから今晚御城への御招待の思召を御傳へする爲めに遣されたのです。

フィリツポ あなたの殿様の御城へですか？

コジニ (いくらか怪訝の面持、冗談の様に) 私の殿様は矢張りあなたの殿様でせう！

フィリツポ 然し私は私の拙い歌、んぞを殿様に捧げやうとは思ひもありません。

コジニ あなたがなさらなくとも、もうやつた人が有るんです。

フィリツポ アンドレア伯でせう？

コジニ さうです。道中度々、廣い野原の中で休憩する様な時には屹度あのアンドレア伯が——殿様はあの人の美聲にはすつかり惚込んでゐらつしやるんですがね——ペトラルカやウィルギールなんぞを朗讀して御聞かせしたのです。然しあなたの詩だけは、あの人はちやんと暗記してゐるんですよ。其時あの人の目は誇に輝くのでした——何しろ此驚嘆す可き詩句はすべて我が妹の淑徳を讃へたものであり、然も彼女は其詩人の許嫁に成つて居るといふのですからね。ほんとうにあなたの詩の中に潜んでゐる熱情はどんなに澤山の人達の血を湧立たせたでせう——尤も私の様な老人はその仲間じゃありませんがね——そしておしまひには、一方あなたを嘆賞すると共に、又腹を立てる者も出來るといふ始末でした——「此詩人は徒に我々の情緒をかき亂して今日の場合充される見込も無い憧れ心をそゝり立てた揚句却て絶望の淵に陥れる

ものだ。』なんて自分勝手な事を云出してしまつてね。然し殿様は誰よりも深く動かされたい御様子で、私にかうおつしやるのです——此様な詩人は唯君主の傍にのみ座を占む可きものだ。わしは此様な詩人の君主たり得る幸福を神に謝する。ボローニアへ歸つたら、誰よりも早く先づ彼れを呼ばなければならぬ。——此役目を果すのが今日の私の使命なのです。明日はどうなるやらも知れない今日です、一刻も躊躇す可き場合ではありません。殿様は今夕世にも稀なる御饗宴にあなたを御招きなさらうといふのです——赤く燃上る危険な松明の光に照されながら頭の上には運命を暗示する星を頂いて居るといふ不可思議な宴です。フィリッポさん、若し御承諾ならば、どうぞ私と御一緒に！

フィリッポ (暫し沈黙の後) あなたはどうも丁度悪い折においで下すつた様です。私は今日では最早殿様の御招待に預る様な人間では無く成つて居るのです。そして若し此御招きに應じたなら、私は殿様に對して嘘吐きにならなければならぬでせう。それですから、そして其他にも……我がまゝとでも何とでもいゝ様におつしやつて下さい——私は御免を蒙ります。今日の都合如何なる人間でもそれ／＼自分の御祝ひをやつてもいゝのです——王様だらうが、乞食だらうが、總べて同等の権利を以て、そして各違つた意味に於て。

コジニ (他の二人に、驚いた様子で) 諸君は……?

エルコレ 本人が云つてゐる通り、一時氣まぐれの我がまゝです、此男の癖で、次の瞬間にはもうけろりと豹變するのです。

コジニ 私は確な御返答を待つて居ります、どうぞ御断りの理由をもつと明瞭にして下さい、私はそんな子供の御使の様な返事を以て復命する事は出来ません。殿様は未だ曾て御命令を拒まれた経験は御有りにならないのです、況んやそれが御好意より出でた場合に於てをやです。殊に今日の如き危急の場合御返答の如何は、單にそれだけの意味に止まらずして、未來の運命を暗示する一種の前兆とも取られるのですからね。

フィリッポ 御尤もです。

あちこちの塔から鈍い鐘の響き。

アゴステノ 何でせう？ 危険が迫つたのでせうか？

エルコレ 有らゆる塔から響いて来る！

アゴステノ まるで葬の鐘の様に！

コジニ 矢張りそれですよ。

エルコレ 私は未だ會てこんなに強い鐘の響を聞いた事がありません。
 アゴステノ 然し、たつた一度有りましたね——ほら、殿様の御母公の御葬禮の時に！
 コジニ あれは誰の葬の鐘か諸君は御存じ無いのですか？

アゴステノ (氣が付いて) アンドレア伯爵母堂の御葬式が始まるんですね？
 コジニ え、今です。

アゴステノ さあ、來給へ、フィリツボ君！

エルコレ さあ、フロントウツチ家へみんな一緒に出かけやう！

フィリツボ 僕は残つてるよ！

アゴステノ そんなら、フィリツボ君、地上の有らゆる物の音は君には何の意味も無い馬の耳に
 念佛なんだね？ 有らゆる塔からの鐘の音が未だ響いて居る。來給へ、フィリツボ君、此間中
 君を包み罩めて居た物は妄想であつたんだ——然し此瞬間にはそれも醒めずにはゐないだら
 う！

フィリツボ 此世の中に迷ひといふ物はたつた一つしか有る筈が無いよ——自分にとつて何の値
 も無くなつた物を、友達だらうが、妻だらうが、乃至故郷だらうが、棄て去り兼ねてぐづぐ

して居るといふ事が即ちそれさ、そして、眞といふ物も唯一つ切りだ——何處から來たのであ
 らうと、幸福——が即ちそれさ！

アゴステノ それが君の返答だね？

フィリツボ さう思つてくれ給へ！

コジニ そして殿様への御返答もそれ以外には無いんですね？

フィリツボ 左様です。

エルコレ さあ参りませう、皆さん！ 馬鹿に付ける薬を探してゐる場合じゃありませんよ。

コジニ フィリツボさん、こんな譯の分らない復命をもたらさなければならぬ事は、殿様の爲
 にもあなたの爲にも悲むべき事です。

アゴステノ 僕は此ま、行つて了ふよ、僕達の精神と共通な物を之ればつかりも持つてゐない様
 な人間の側には一分だつて居れるものでは無いからね。

エルコレ、アゴステノ、コジニ退場。三人去つて了ふとフィリツボは暫時だまつて立つて居るが、それ
 から徑を奥の方へ急いで行つて耳を澄す。再び前方に歸つて家の方に近付き、階段を昇つて三段目に佇
 む、そして呼ぶ。

フィリツボ バツテスタ!

バツテスタ (直ぐに警臺に現れて立止る。) 且那樣!

フィリツボ 今直ぐに馬を二疋持つて来て貰ひ度いんだ。

バツテスタ (びつくりして答無し。)

フィリツボ 分らないのかい? 馬を二疋だよ!

バツテスタ 今日で御座いますか? 且那樣!

フィリツボ じれつたいね——今日だらうが、明日だらうが!

バツテスタ さういふ譯じや御座いませんが、且那樣! どうして私が……いや、之れだけ申上
けませう——今日馬を手に入れやうといふ事は全然不可能の事で御座います。

フィリツボ レゴンデイの所へ行つて御覽、あすこの厩には二十四疋も飼つてあるよ!

バツテスタ あすこなら私はよく存じて居りますが、もう一疋も無くなつて居るので御座います、

ギベルテイが有りつたけ差押へてしまつたので御座いますから。

フィリツボ 誰だい、其ギベルテイと云ふのは?

バツテスタ ギベルテイ騎兵大佐で御座います——あのサン・ステファノの門を堅めて居りま

す!

フィリツボ そんなら何處か他所へ行つて見るさ! マツシリオの所へでも——だがそれよりも

いつそ町中を歩き廻つて、丁度い、奴が見付かつたら、兵隊から買取つた方が早いだらうよ!

バツテスタ 且那樣!

フィリツボ 金はいくらでも持つて行け! 馬さへ手に入れば、値段なんぞどうだつてかまはな

いんだ! ぐづぐづしては居られないよ! さあ、おいで! 馬を買つて來たら、すつかり用

事を教へるからね。それからもう一つ——途中で誰かに訊いておくれ——物見の塔からはどん

な報告が來るか、どの街道が未だ通行が出来るか、そして何處から……(云々)何處から逃

せるか! そして若し……然しもう行つてもい、よ! (呼戻す) バツテスタ!

バツテスタ 且那樣!

フィリツボ 此事は決して人に云ふんじや無いよ。さあ、急いで行つて、早く歸つてくれ!

バツテスタ (去る。)

フィリツボ (獨。階段を降りて、何か物音を耳にしたかの如くに、再び徑を奥の方へ急ぐ、それから徐々に
前方に歸つて來る。) おれの生活はフワフワした翼に載つて空中高く飛翔して居るのだ、すると奴

等は寄つて集つて、重々しい言葉を投掛けてそれを下の方へ引下さうとしゃあがる。そんな物は此おれに取つて何だ？ おれの住んで居る世界では、運命や方向を規定する下界のごたく騒なんぞは三文の値も無いんだ。逃出す、とおれは云つたんだらうか？ 然し決してこわがつて逃出すといふ譯じゃ無いんだ。おれは門を鎖しはしない、そして若しあのアンドレアがやつて來たら、云ふだけの事は屹度云つてやる積だ。然しあの男を馬鹿正直にわざ／＼待つて居る必要も無いし、こんな危い町の中にのんびんだらりと止まつて居る必要も有りはしない。今假にたつた一遍おれの息を吹かけさへすりやあ、それで此町が救はれるとしても、若し其爲にあのベアトリーチエが失はれる様な事になるなら、おれは此ボロニアの町を見殺しにしてもかまはないといふ位の覺悟で居るのだ。そしておれの背後で此故郷の町が炎々と燃上らうと、それはおれ一人の幸福の爲の犠牲の焔に過ぎないのだ。

舞臺追々薄暗くなる。奥の方からベアトリーチエ登場、餘り歩を早めず、フラ／＼した足取り。ファイツが彼女を迎へる。

ベアトリーチエ さあ、参りましたわ。まあ、こゝは暗いのね、外は未だ明るいのに！ それに、ほら、あのがやく／＼して居る事つたら！ けれど、こゝはほんとうにシーンとしてるのね。わ

たしいつ迄もこんな處に居られるとい、けれど！

ファイツボ いつ迄でも居て貰ひ度いね！

ベアトリーチエ (椅子に腰を下して) 少し休まして頂戴、わたしすっかりくたびれちやつたの。今日の様にいろんな事を見たり聞いたりした事は無いもんですからね。まつたく目先がちら／＼して了ふわ！

ファイツボ (子供に物を云ふ様に) 此町は今恐しい目に逢はうとしてるんだが、お前は知つてる？
ベアトリーチエ わたしだつてまさか子供じゃありませんからね、其位の事は知つてますわ！ わたしも少しの事で此處まで來られなかつたかも知れないのよ。サン・ペトロンの御寺の前あたりはほんとにひどい人出なんですよ！ それにどうでせう、わたし人込の眞中へ梯を落して了つたの！ けれど、そんな物を屈かんで拾はうとでもしやうものなら、それ切りもう起てなくなつてしまふところでしたわ！

ファイツボ ねえ、お前はそんな騒を見て矢張り心配してるの？

ベアトリーチエ え、心配だわ！ みんながそりやあ心配してるわ！ けれど喜んでゐる人も有るのね、大聲で大きな事を怒鳴り散したりしてね。そんな人間が一人お寺の階段にかけ上つ

て「ボルジアをやつ付けて了へ！」つて（笑ひながら）怒鳴つたの、するとみんなも一緒になつてさう云つたのよ！

ファイリツボ（嬉し相な目付で女を眺める。）お前ほんとに僕を愛してる？

ベアトリーチエ あなたそれが分らないの？ わたしほんとうにあなたを愛してるわ、あなたといふ御方を覚えてから、わたしには世の中の物が何も彼もまるで變つて了つた様に思へる位だわ。さあ、どう云つたら此心持が分るでせうね？ さうね、今から考へて見ると、先には世の中の人間がみんな御人形の様な物でしたわ。ところが、あれからといふもの——さうくあの御祭の晩ですわね——あれから未だ三日しか経たないのね、初めてあなたに御目にか、つてから——あの時は御門外の廣場で踊りをおどつたり、音楽を聴いたり、弩の競射や、馴した約の競走が有つたり——あれから未だ三日しかならないのね！ ほんとうにあれからといふもの、わたしの目には何も彼もどんなに變つて了つたでせう、そしてバツと綺麗に見える様に成つたでせう、そしてあの御人形さんはみんな生きた人間に成つて了つたのですわ！（嬉し相に）ねえ、わたしそれを云ひ度かつたのよ。

ファイリツボ（決心して）ねえ、ベアトリーチエ！ 今日の中に僕達は此町を出てしまはうと思ふ

んだ。

ベアトリーチエ（驚いた様に彼れを見詰める。）

ファイリツボ 僕の心持をよく聽分けておくれ！ 今は未だみんなが随分大きな事を云つて居るけれどね、此ま、此處にかうして居た日には、一人残らず死ぬより他に無いのだ。然し僕とお前だけは——僕達は生き度いんだ。ねえ、ベアトリーチエ！ だからお前も一緒に逃げておくれ！

ベアトリーチエ 今日の中に？

ファイリツボ さうだよ。明日迄待つて居たら、命が無いかも知れないのだからね。覺悟はい、かい？

ベアトリーチエ あなたと？

ファイリツボ 僕とさ！

ベアトリーチエ 何處へ？

ファイリツボ 何處でもかまはないんだよ！ 只覺悟だけはい、ね？

ベアトリーチエ けれど、あなた、わたしを一人何處かに打棄つて置いて逃げたりなんぞしない

でせうね？

ファイリツボ 嬰兒だね、お前は！

ベアトリーチエ わたし決してこわがつてるのじや無くつてよ！ 眞暗くなるまでもあの邊の野原や岳のあたりを避んで歩いてた事がいくらも有るんですもの——たつた一人で。それでも、町の塔は暗くなつてからもよく見えるし、いろんな物音ががや／＼遠くの方から聞えて来るでせう、それで、あそこが町だ、と思つて安心してるの。然しまるで見も知らない土地でたつた一人ぼつちになつては迷兒に成つちまふかも知れないわ。

ファイリツボ いや、お前にとつては何處へ行つたつて「知らない土地」といふ物は無いだらうよ、只、たつた一つ考へて置かなければならない事が有るよ——ねえ、ベアトリーチエ、之れからお前は家の人達の顔を見る事が出来なく成つて了ふのだよ。

ベアトリーチエ 家の人達を？（考へ込む）わたしそんな風の事は夙にぼんやり感じては居りましたわ！ けれど、それはたつた今漸くはつきり氣が付いたんですの。

ファイリツボ どんな事を？

ベアトリーチエ ねえ、あなた！ わたし親達の家にじつとしてゐるのは何だか道中旅籠屋にで

も休んで居る様な心持がして仕方が無い事が有るんですよ——何處かこゝ遠い所から来て、又何處かへ行つて了はなければならぬと云つた様な……それから、朝ふと目がさめて、あたりを見廻して見ると、まるで……

ファイリツボ まるで——どうだい？

ベアトリーチエ ……親達の家の中に寝てゐるのでは無い様な、變な心持がする事が度々有りませよ。

ファイリツボ （氣乗りがせぬ調子で）うむ、さうかね！（立上つて階段を登る。）

ベアトリーチエ 何を見てゐらつしやるの？

ファイリツボ 時間はすん／＼経つて了ふ。バツテスタの奴は——馬は未だ來ないかしら！

ベアトリーチエ わたしもうあなたに話したか知ら——うちの兄さんは兵隊さんに成つたのよ。

ファイリツボ 僕はお前の兄さんなんぞ知りはないよ。

ベアトリーチエ まあ、忘れつばいのね！ あなた、兄さんを見た事が有るじやありませんか！ ほら、矢張り初めてわたしを見たあの日に——同じ時に。兄さんはあの時わたしと一緒に居たんですもの、それから姉さんのロジーナやウィットリーノや……

ファイリツボ (軽く) お前に惚れ込んでるといふ男だらう?

ペアトリーチエ まあ、あれは忘れなくて居るのだよ!

ファイリツボ (気が無さ相に) 兄さんは募集に應じて行つたのかい?

ペアトリーチエ い、え、自分で直ぐにサン・ウイターレの門へ駈け付けたんです。勝手に集つた人達であすこは一杯ですわ。『ボルジアをやつ付けて了へ』つて怒鳴つた男も其連中の一人ですわ! 全く亂暴なのね!

ファイリツボ そんならみんな随分泣いてるだらう?

ペアトリーチエ 誰が泣くもんですか? お母さんは一體フランチエスコをちつとも可愛がつて居ないので、姉さんなどは自分の勝手氣まゝが出来るから却て喜んで居る位だわ。

ファイリツボ そしてお前は?

ペアトリーチエ 自分の勝手に出て行つたんですもの、誰が泣いたりなんぞするもんですか?

ファイリツボ それからお父さんは?

ペアトリーチエ わたし未だ御話しなかつたか知ら? お父さんの目には何も彼も七年前のまんまなんです。わたし達のする事もみんな子供の遊びだと思つてゐるんです。

ファイリツボ (びつくりして) どういふ譯だい?

ペアトリーチエ 氣が變になつたんだつていひますがね。わたしにはちやんと分つてるの——七年前に何かでひどく心を動かされた事が有つたのに相違有りませんわ、其時切りお父さんには時間の歩みがヒタと止つて了つた様なもんです。それだもんだから、お父さんはわたし達を矢張り七年前の小さい子供だと思つてゐるんです。其積りで物を云つたり、わたし達を膝の上にだつこしたり、——わたしとロジーナをね——だつてフランチエスコはいやがつて逃げちまふんですもの——昔話をして聞かせたり……揺つたり、歌つて聞かせたり、ほんとについ吹出してしまふすわ。

ファイリツボ (彼女に近寄つて) お前はそれが可笑しいの? 悲しい事じゃ無いの?

ペアトリーチエ だつてお父さんは何んにも御存じ無しなんですもの! さうしてだんぐお爺さんになつて行くけれど、御人はちつとも感じてゐないんです、そしてお母さんは相變らず若くつて美しいと思つてるし、お母さんにどんな悪い事をされても直ぐに忘れちまふんだから世話あ無いわ!

ファイリツボ (じつと彼女を見詰めて) 僕はお前を連れ出してそんなみじめな境遇から引離して了ふん

だ！ お前は未だほんの子供だけれど、子供の様な心持で、其ま、僕の物に成るんだ——さう無ければならないんだ！ 僕はもう今では自分の物と云つてはお前の他には何んにも無いのだからね。僕だつてもとはいろんな物を持つて居たさ、然し完全に自分の物と云得る様な物は一つも無かつた、それで僕は有らゆる物をみんな自分の手から放り出して了つたんだ——お前一人の爲にね？ 何と云つてもお前だけは僕の所有してゐる物だからね——所有は幸福だ。そして我々が自分で創作した物だけがほんとうに自分の所有と云へるんだよ。

ベアトリーチエ あなたの御言葉聞いてると、ほんとうにわたしあなたが好きに成つて来るわ！ (立上る。) あなたの御庭もだん／＼夜になつて来たのね。今度はわたしあなたに訊ね度い事が有つてよ！

ファイリツボ (又奥の方へ目をやりながら、氣が乗らぬ様に) 何だか云つて御らん！

ベアトリーチエ (彼れの側に歩み寄つて) ねえ、あなた、わたしの馬の手綱を執つて下さる——此暗い所を歩く時に……

ファイリツボ (笑ひながら) 始終執つてゐなかりやならないのかい？

ベアトリーチエ さうして下さらなかりや、いや！ 屹度さうすると約束をして頂戴な！

ファイリツボ (彼女にキッスする、それから待兼ねた様に) 未だ来ない！ 中へ入つて待つて居やう。酒や果物も用意してあるよ、一つ門出を祝ふとしゃう。さあ、おいで、ベアトリーチエ！

(階段を登り始める。)

ベアトリーチエ (彼れの後から) わたしもう御話したか知ら？ わたし今日殿様を見たのよ！

ファイリツボ (立止つて) さうかい？

ベアトリーチエ そしてね、殿様もわたしの方を御覧になつてよ！

ファイリツボ (彼女の方へ振向いて) それがどうしたといふんだい？

ベアトリーチエ 家の前を馬で御通りになつて、わたしの顔をじつと孔の明く程見詰めてゐらつしやるのよ。

ファイリツボ 美しい女を見る時には、男といふ物は大抵そんな目付をするものだよ。それがどうかしたのかい？

紗面のエチーリトアベ

ベアトリーチエ 其時姉さんのロジーナも側に立つてゐたのよ。ところがどうでせう、殿様は姉さんの方には目もくれないんです。わたし姉さんが病氣にならなければい、と思つた位だわ、何故と云つて、姉さんはあの人にすつかり惚れ込んでゐるんですからね——あの殿様に。他に

も惚れてゐる男は有るには有るけれど、殿様へののぼせ様つたら無いんです、ほんとうの話ですわ！ 此頃なんぞ殿様が長い事御留守だったもんだから、戀煩ひでもし相な騒ぎでしたわ、それがやうやく久し振りで御歸りになつて家の前を御通りになるといふのに、わたしの顔ばかり見てゐらつしやるんですもの！

ファイリツボ 然しお前も随分己惚れが強いね、そんな事がそれ程の大事件なのかい？

ベアトリーチエ わたしそんな積りで云つたんじや無くつてよ、そんな事はもう忘れて了つても善かつただけれど、わたしそれから變な夢を見たもんだから……

ファイリツボ 晝中に夢を見たつて？ (そろ／＼階段を降つて来る。)

ベアトリーチエ さつきはほんとうにむし暑くつて堪らなかつたの、わたしそれから自分の部屋に引込んだんです。姉さんに怒られるのがこわいもんですからね——ぐづ／＼してゐたら姉さんに擲られたかも知れなくつてよ——之れ迄だつて随分そんな騒ぎが有つたんですからね——それから序に着物も着換へやうと思つて——あなたの爲めにですわ——それから靴もね！ そしてベッドに腰掛けて紐を結へやうとした機に、ついう／＼となつて了つたんです、そして變な夢を見ちやつたの！ わたしは一體いくら夢を見ても目がさめると同時にすつかり忘れて

了ふ質なんですけれど、さつきの夢だけは不思議にはつきり覚えて居りますの！

ファイリツボ 一體どんな夢だつたの？

ベアトリーチエ まあ、どうでせう、わたし御妃様になつてゐるのよ！

ファイリツボ (階段を降り切つて、彼女に近寄る。)

ベアトリーチエ どうかなすつて？

ファイリツボ さあ、残らず話して御らん！

ベアトリーチエ わたし御妃様に成つてゐるんです——大廣間の眞中の玉座に座つて、殿様とか、並んでね、それから大勢の人達が——百人も千人もですわ、男も有り、女も有り、中には子供も有るんです。そしてみんなわたしが毎日町で見る顔なの。あゝさう、あなたも居りましたわ。そして矢張り他の人達と同じ様に、わたしの前にかうやつて跪いて居るのよ。けれど、それがあなたで、ファイリツボといふ人だといふ事は分らなかつたけれど、顔だけはあなたに相違無いんです。すると、あなたはみんなと一緒にスウィーツと前を通つて何處かへ消えて了つたんです。可笑しいじやありませんか、わたしこんな事迄覚えて居りますわ、わたし其時此手をかうして(左手を舉げて) 椅子の肘掛にかけて、やわらかい天鵝絨を指尖で撫で、見たりしたんです。そ

してニツとほ、えんで見せたの、ねえ、分るでせう——女王様の様にね——いくらか威厳が有つて、然も御情深い様にね！ すると何處からとも無く音楽が聞えて來たんです、そりやもつとつとりとなる様な、澤山のオルガンでも一緒に鳴す様な音なんです。けれど、どうしてもそれはオルガンじゃ無いの、それでわたし樂師達は一體何處に居るのかしらと捜して見たけれど、見えませんの。すると殿様が御起ちになつて、わたしの手を執つてしづくくと廣間を御通りになると、みんなが最敬禮をやるんです。と、大きな扉がスーッと開いた拍子に突然音楽がハタと止んでシーンとして了つたんです、そりやもう眞夜中よりも靜な位にシーンとね。それからわたしと王様は二人で屋根の無い狭い廊下の様な所を通つて行きましたの。兩側の壁は目も届かない程に高く聳えて、上には青空が見えるの——いつもよりもすつと遠方に、そして赤い雲が浮いてるんです。それから二人は階段を降つて暗い所へ入つて行くと、殿様も何もまるで見え無くなつて了つたの——と思つたら殿様の聲が直ぐわたしの耳の側に聞えて「ベアトリーチエ！」と囁くんです、するとそこらがだんく明るく成つて來て、ベッドの上の燭臺に青い蠟燭の火が燃えて居るのが分りましたの、そして殿様の目がわたしの顔の上に光つて——殿様の唇がわたしの口の側に來て、殿様の息を吸込んだと思つたら——目がさめて了つたんです。

ファイリツボ ベアトリーチエ！

ベアトリーチエ (いくらかびつくりして、不安相に、然し未だ彼の心持が分らずに) ほんとに變な夢を見たものね！

ファイリツボ ベアトリーチエ！ お前、そんな夢を見てから——よくも饑の所へ來られたものだね！

ベアトリーチエ あら、來ちやあいけないんですか？ ほんとに變な顔をなさるのね！ どうかなすつて？

ファイリツボ そんな汚れた身體でよくもお前は……へ……！

ベアトリーチエ (彼れは何か勸進してるのだと思つたので、快活な調子に返つて) だつて、あなた、夢じやありませんか！

ファイリツボ いつそ夢で無くて、ほんとうの事であつた方が善かつたんだ、ベアトリーチエ！

其方が此おれには苦痛でも無く、胸の悪くなる様な感じも薄かつたんだ——現實に有つた事なら、生活其物が又萬事い、様に取繕つてくれる事もあるからね。けれども、夢といふ奴は仕末が悪いよ、あれは本能的の欲望だ、日の光に怖ぢて心の隅つこに引込んで居る腹がましい情慾

だ、そして夜になるとそろ／＼這出して来るんだ。此本能が腕を擴げて何物かを喘ぎ求めながら、夢と成つて飛出すのだ——お前自身をば置き去りにしてね。實際に於てはお前は未だちつとも僕の物には成つて居なかつたんだね——一寸目を塞ぎさへすりやあ、もうお前の魂は他の男との冒険に飛出さうと待構へてゐる始末だからね、そして此僕なんぞはお前にとつては何の意味も必要も無い千人中の一人たるに過ぎなかつたんだ、お前にはまるで何でも無い物だつたんだ、そして今でも矢張りさうなんだ——そして此僕はいふと、まあどれだけの物をお前の爲に犠牲にした事だらう、とても想像も出来ない程の事なんだよ——若し僕の愛に正當に報いやうとするなら、お前は、此世界には他にもつと男が有るといふ事を思つたばかりでも胸を悪くしなければならぬ程の事なんだよ！僕は世間の御人好しの御亭主並にお前の唇から他の男のキッスを吸込む様な御目出度い男だとも思つてるのかい？そして夢の賣女として僕の所へやつて来たのかい？早く出て行つておくれ、ベアトリーチエ！

ベアトリーチエ まあ、わたしどんな悪い事をしたといふんですの？ そんならもうわたしを愛してはくれないんですね、フィリップ：あなたは！

フィリップ お前を愛するだつて？ 愛するどころか、僕はお前が怖くつて仕様が無いんだよ！

ベアトリーチエ フィリップ、今日まではわたしほんとに之ればつかりも殿様の事なんぞ思つて見た事も無いのよ！

フィリップ けれどお前は今日あの人の物に成つて了つたんだ！

ベアトリーチエ だつて、夢の中ですわ！

フィリップ だから行つてくれと云ふんだよ！

ベアトリーチエ あなたはそんな本気でそんな事を云つてらつしやるんですか、え？ そして

もう一緒に連れて行つては下さらないんですか？

フィリップ もう何處へも出かける必要も無くなつた！

ベアトリーチエ あなたもうわたしを信じては下さらないの？——わたしあなたと一緒に何處か

へ行つて了ふのがほんとに嬉しいと思つてるのに！わたしほんとうにあなたを愛してよ、フ

ィリップ！

フィリップ あゝ分つてるよ！ そりやあ今だつてお前は僕と一緒に何處へでも行く積りで居る

んだらうよ——丁度三日前に大人しく僕の後からついて来たと同じ様にね！だから行つてく

れと云ふんだよ！

ペアトリーチエ　そして今度は何時来たらいいんです？

フィリツボ　何時来る？　僕の所へかい？　ほんとにお前は——僕の云つた事が分らないのかい？　もう来ちゃあいけないんだよ、もう決して！

ペアトリーチエ　（目を丸くして）まあ、もう決して！

フィリツボ　もう一遍お前の手に觸つて見るだけでも、僕はゾツとするよ！　お前の正體がばれて了つた今と成つては、お前を抱擁する位なら、いつそ幽霊を抱いて寝た方がまだ！（戦慄の身振り。）さあ、どうぞ行つておくれ！

ペアトリーチエ　いよく、本氣なのかしら——此人はわたしを追出さうとする！

（彼女は顔を反向ける、彼女は佇む。間。）

フィリツボ　（又彼女の方へ向いて）お前涙なんぞ流してるのかい？

ペアトリーチエ　ねえ、わたし之れ程あなたを御慕ひしてるのに！

フィリツボ　あの最初の晩にね、庭の門がお前の背後にギーツと鎖されて、新しい運命の不安な眞暗がりの中へ入つて行く様に、小暗い此庭の中へ忍び込んで来たあの時にお前の扇がこわれたらう——其時にもお前は泣いたんだっけね？　たつた一本の扇の爲にあんな大袈裟な、馬鹿

らしい涙を流すなんて——それから此僕の爲にも泣いてくれる！　お前には物の價値と輕重とが分らないんだ！　左様なら——もう二度と御目にはかゝらないからね！

ペアトリーチエ　そしてもう来てはいけませんか？

フィリツボ　え、生きてゐる間はね！

ペアトリーチエ　（ほゝえむ。）

フィリツボ　何がをかしいんだい！

ペアトリーチエ　生きてゐる間はいけない——御自分でさうおつしやるのね！　若しわたしが、あなたが居なくなつてはどうしても生きては居れない様に成つて死に度く成つたら、其時こそ互参りますわ、そしてあなたと一緒に死にますわ！

フィリツボ　お前は「生」を玩具にして居ると同じ様に、「死」をも玩具にして居るのだね！　ど

うか行つておくれ、左様なら！

ペアトリーチエ　そんなら、又ね——フィリツボ！

フィリツボ　左様なら！

（ペアトリーチエ暗い徑を靜に奥の方へ消える。）

フィリップ (獨。彼女の後影を返る。長き間の後) 影かなんぞの様に消えて行つてしまつた！ おれはあんな女を自分の物だと思つて居たのだな！ 恥かしくつて死に度い位だ！ どんな物でも全然自分の所有に爲し切れるものじゃ無いといふのが人間の運命なのだらうか！ こんな自棄を起したら人は笑ふかも知れない、然しそれは自分の物を何も彼も投げ出した経験の無い人間だ。おれの様にごん底迄騙され切つた馬鹿者だけだらう、あんな女の爲に何も彼も犠牲にして丁つたのは——名譽も勇氣も！ そして敵の攻撃からも友達の恨みの刃からもおれはおめく逃げて出して丁ふ氣で居たんだ——まるで子供かなんぞの様に！ おれはあの女のあとを追かけないのだらうか？ あの女を自分の物にするには一つの方法が有るには有る——然も大膽無類な！ 夢の中であの女をおれから奪つた男を現實に於て殺すのだ！ けれども、こんな事を思付いたつて、おれは城の中へ駆込まうとはせずに、まるで棒の様にこんな處へ突立つたまゝだ、そしてその實行の困難を思ふと、決心の力も鈍つてしまふ。あんな綺麗な言葉を並べてあの女を追返したといふだけでおれの様な男には精一杯だ。そしていつか此馬鹿けた経験から一篇の詩でも生れ出る事が有つたら、それは誇を以て人生を生きて行く事も出来ぬ様な不面目極まる此おれに與へられる最高の賞品だらう。(耳をそば立てる) 戸が開いた！ (希望を以て)

アンドレアだつたら！ 案外早く最後の解決がやつて来たな！ 今のおれ位に命も何んにもいらないといふ覺悟を決めてゐる人間は恐らく此町中に二人とは無いだらうよ！

室内から露臺に通ずるドアにアントニオ・ニジュツタイとテト、テバルデイとが現れる。前者は縦も横も大きな男、後者は華奢に出来てる小男。彼等と共にフロレンスの歌妓ルクレチアとイサベラ。彼等がそろそろ前方に進み出ると、その後から四人の樂師——二人はヴァイオリンを、一人は笛を、一人はラウチを持つ。彼等の姿が現れぬ中から樂の音聞える。彼等は露臺に立止る。二人の儀は松明を持つてドアの左右に突立つ。

テト (快活に) フィリップ・ロスキー氏の御宅だよ、そして御主人公が、にらつしやる！

今晚は、フィリップ・ロスキー氏！

アントニオ (酔つてゐる) 止さないか、間拔な奴等！ 樂器を打こわしてやるぞ！

音楽止む。

テト フィリップ・ロスキー氏、今夜は一つ我々と共に愉快な一夜を御過しあらん事を希望する、と云つた様な次第ですよ！ 我々は勿論こんなやくざな野郎共ですが、左様申し上げる権利が有ると思ふのです——論より證據、我々が其愉快なる一夜なる物をちやあんと此處へ持參

致したといふ様な譯ですからね。

アントニオ 我々は全くそのやくざな野郎共としてそれを持參致したといふ次第です——それに相違が御座いませぬ。

テト——と云ふ次第はですね——ここに控へてゐらつしやるあてやかな御婦人方が若し貴下の詩を讀んで有頂天になつたと同じ程度に於て、貴下に拜顔の結果のぼせ上つて了はうもんなら、それこそ此御兩人の運命は狂人の他にありません、然り而して我々野郎共の運命は絶望落膽といふ氣の利かない役廻りなので！

アントニオ (叫んで) いや、おれ達の運命は死——死だよ！

フリリツボ (随分びつくりするが然し鄭重に) こんな愉快な紳士諸君と美しい御婦人方とを御迎へする事は大きな喜びです、けれども……

イサベラ あなたは何んて好いたらしい御方でせうね！

ルクレチア あなたは何んて美しいんでせうね！

フリリツボ 無論初めて御目にかゝりますが、よくいらつしやいました！

テト——拙者はテト——テバルデイと申します。而して之れなるはアントニオ・ニジエツテイ。

然しそんな名前なんぞ並べたつて何になるでせう？

アントニオ 下らない名告りなんかよせ——！

テト——そんな名前なんぞは我々がくたばると同時に土の中へ埋められて了ふんです——ちと手廻しが善過ぎる位にサツサとね。それで、我々は何と稱する人間であるかは彼れ之れ云ふがものは無いとして、扱て我々は如何なる人間であるか、といふ段に成りますると、若くつて、金持で、それにいくらか男振もいゝので！

アントニオ いくらかじや無いよ、素敵にいゝんだよ、素敵に！

テト——そしてもう明日になれば何んにも無く成つて了ふので！

アントニオ 蛆虫共の餌食だよ！

フリリツボ (面白がつて) そんな馬鹿な事が有るもんですか！ (獨言) 何といふ面白い人達だらう！

テト——次に之れなるはフローレンスから參られた姫君達です。十日位の豫定で我々と面白く騒がうといふんで、わざ／＼ボロニアへおいになつたんです。遊ぶ方の策戦計畫に於ては決してぬかりは無い積りですがね、遺憾ながら肝腎の日數が無くなつて了つたといふ譯です。御兩

人の御所望は拙者大骨折で全部残らず満足させて上げました、けれども多分明日は我が熱愛するボロニアの町が灰燼に歸して了ふだらうといふ事を聞いて、今生に思残すところは唯一つ……

イサベラ 一目あなたに御目にかゝり度かつたのです！ 何故と云つて、あなたの御歌の甘き句は、睡れる睫毛にかゝる戀人のいぶきの如く、而してその妙なる調べは、如何なる罪をも許し給ふて女神の恵みのそれにも似たり——とでも申しませうか！

フィリップ (もだん／＼調子に乗つて来て) あなた方の様な美しい御方に御目にかゝつたら、私の歌は罪の許しなんぞにはならないで、どん／＼新しい罪を犯す様に刺戟すればいゝと思つたでせうよ。

ルクレチア フィリップさん、若しあなたが此處で見付からなかつたら、わたしは何處の果敢でも追掛けて行く積だつたんですよ——洗足で石ころ途を駈けてなりともね！ 明日は此町がどんな恐ろしい事にならうと、わたし笑ひながら火にでも水にでも飛込む覚悟なんです——わたしの髪の毛にあなたのキッスの匂を一遍吹掛けて貰ひさへすりやあ、もう死んでも差支無いと思つてる位なんですからね！ 若しあなたが死んでしまつたら、わたしもうみんなと一緒に笑ふ事

も出来なかつたらうと思ふわ——わたし未だあなたの御顔を見もしない中から、それ程までに惚れ込んで了つたのですわ！

フィリップ (獨言) あんな厭な目がこんなに愉快に終らうとするのだらうか？ まるであの陰氣臭い、しがめつ面をした奴の肩から黒い上着が下り落ちたら、其下から美しい手足にピカピカした絹がまつわつて居るのが見え出した、とでも云つた様な話だ！ (みんなに) 段々との御好意ひたすら感謝の他はありません。扱て、如何致したものでせう——此庭の中でゆつくり休んだ方がいゝでせうか、緑の並木道をぶらぶら歩いた方がいゝでせうか、それとも内へ入つて酒や果物で元氣を付けるといふ様な事に致したものでせうか？

テト 我々の如きみじめな馬鹿野郎共の爲めに、我々の惱ましき此一生の最後の一夜を……

アントニオ なまけ者とならず者の一生だよ！

テト ……名聲噴々たる詩人フィリップ・ロスキー氏と食卓を共にして過すの光榮が與へられ得るでせうか？

アントニオ さあ、やつたく、笛も、ヴァイオリンも根限りやつてくれ！

フィリップ 誠に見すばらしい住居では御座いますが、珍客の方々の御用に立ちまする物ならば何なりと早速整へまする。(ドアーの所で獨言)折角の代物だが來様が少し遅かつたかな? いや、然し、ちやんと出來てゐる——遅かつたといふ事は無いだらう、之れからどんな事が始まるだらうと考へると、おれの血は今迄よりも温かに流れ出して來る、そしておれの期待は吃度充されるに違無い!(室の中へ消える。)

アントニオ さあ、おれ達もついて行かう、イサベラ嬢!

イサベラ あなたわたしに何の用が有るといふの?

アントニオ イサベラ! お前のいどしいアントニオさんがお前に腕を貸してくれと云つてるんじや無いか!

イサベラ 誰か此飲んだくれを追拂つてくれる人は無いだらうかね!

テトー ルクレチア!

ルクレチア 何ですつて?

テトー 此おれはどなただつね? ルクレチア! つい今日の午頃の事だがね、其眞球の頸飾を御前さんの雪の様な肌にかけてやつた御方はどなただつね?

ルクレチア (頸から眞球の飾をもぎ取つて、彼れの足下に投出す。) さあ、持つておいで! かうして丁へばわたしの頸はもうあなたの眞球やあなたの腕の御厄介にはなりませんからね!

アントニオとテトーびつくりして顔を見合せる。

フィリップ (歸つて來て) さあ、用意は出來ました、どうぞ御入り下さい!

イサベラ ねえ、わたしのフィリップさん! 先づ此堪らなく小汚い、口やかましい奴等を追出してからの事にしやうじやありませんか?

フィリップ え、何ですつて? どうすればいゝんです?

テトー (ルクレチアに) 少くともおれだけはお前の側に居る事を許してくれるだらうね? ねえルクレチア!

ルクレチア え、許して上げませう! けれどよく覚えてゐらつしやい、若しわたしの膝に一寸でも觸らうもんなら、此針を心臓にズブーリ突通して上げますからね!

テトー (心配相に) 然し有難い事には、お前は自分の誓言を守つた例が無いからね。

ルクレチア 愛の誓言ならさうかも知れませんが、けれど、こんな事になるとわたしはそりやあ堅いんですからね! 嘘だと思ふなら、フロレンスに居るあなたの從兄にきいて御らんなさ

い！

アトニオ 我が敬愛するイサベラ嬢よ！ あなたはあんまり脅しつゝ無しに願ひますぜ！ ねえ、一寸位その……

イサベラ わたしルクレチアの様に残酷じやありませんわ、それだからわたし申上げて置くんです——御歸りになつた方がお爲めでせうよ！ わたし達をフィリップさんの處へ連れておいでになれば、それでもうあなたの御役目は済んで了つたんです！ 之れからはもうあなたには物も云ひません、唾も吐掛けません！ お猿さん！——之れがわたしの最後の言葉よ！ さあ、参りませう、美しい——フィリップさん！

フィリップ (面白がつて) 紳士諸君、私は諸君の御困却の態を見ながら、餘りに冷淡だと思ひしのですか！ 然し御自分の事は御自分で始末をなすつた方が御宜しいでせうよ！

アトニオ 僕達の事にはどうぞ御かまひ無しに願ひませう！ テトー、さあ行かうよ！——何も、他に女が無いといふじや無し、そしてもつと上品な女がいくらかも有るよ——いや、もつと品の悪い女でもい、がね、却て其方が僕等には有難いんだ！

テトー (眞珠の首飾を地から拾ひ上げる。) 之れは何處かの御方のもつとすべくした御頸筋に掛け

奉るんだ！

フィリップ さあ諸君！ 何方が女を手に入れるか、眞劍勝負の御相手をして定めませう！

イサベラ 萬一彼奴等が勝つてあなたに手傷を負はせたつても、却て彼奴等の籤蛇になるばかりですよ！ あなたの其唇よりも石榴の様に熱み割れた傷を吸つた方がわたし達には一層おもしろいんですからね！

アトニオ (眞赤になつて) さあ樂師共、メナスキーの酒屋へ引返した、そして思切つて陽氣に騒いで此もしやくしやする腹の蟲を静めてくれ！

イサベラ 御前さん此人達をどうしやうといふの？ (樂師達に) 御前さん達はこゝに居るのですよ！ さあ、中へ入りませうよ、フィリップさん！ 然し樂師達は此露臺に残つて居て、のべつ幕無しに演つてく、やり續けるんですよ！

音楽始まる。

ルクレチア として此ドアの隙間から樂の音が洩れて来て、わたし達の歡樂を陽氣な音色でふわりと包んで、それからやわらかな音楽で氣持善くおねんせやうといふ寸法なのね！
パツテスタ (大急ぎで登場。) H那樣！ (びつくりして了つて、開いた口が塞がらす。)

ファイリツボ (女達と家の中へ入らうとしたが、振返る。)
バツテスタ (未だ息を切らして) あの、馬を……旦那様！

禁止む。

ファイリツボ 何だつて？ (やうやく思出して笑ふ。)

バツテスタ 旦那様、やうやくの事で手に入れました、銀貨を二百枚も投出して……！

ファイリツボ 馬をこゝへ持つて来たのかい？

バツテスタ はい、非常な難儀を致しましてね、旦那様！

ファイリツボ 御氣の毒だが、此方では御留守の間に別の狂言が始まつてしまつたんだ！ そして彼奴まるで寝惚けた道化役者と云つた格好で、出る幕でも無いところへ飛込んで来やがつた！

——ほんとにお前、馬をこゝまで持つて来たのかい？

バツテスタ (ひどくびつくりして) 旦那様、どうして私が嘘を吐くもので御座いますか——

馬は二疋ちやあんと御庭の門に待つて居ります、柵に繋がれて！

ファイリツボ (俄に決心して) 其馬はこゝにゐらつしやる御兩所の爲めに用意したのだ！ どうぞ

御遠慮無しに御受けを願ひます！ 此人のいゝ親爺が町中を駆廻つてやうやくの事で手に入れ

て来たんですからね！

テトー 君、打たれたり、蹴られたり、之れ程散々な目に出逢つた人間を捕まへて、また悪戯をする必要が有るんですかい？

アントニオ 何しろ残酷過ぎるよ！

ファイリツボ 飛んでも無い事です！ 諸君は私の爲にはほんとうによくおいで下すつた——殊に諸君には恐らく想像も付き兼ねる程に丁度善い折においで下すつた——その御禮の印として此贈物を御納めを願ひます！ バツテスタ、御客様を門まで御見送り致せ、そして若し必要なら——多分必要だら——と思ふんだが——なるべく御鄭重に鞍の上へ乗せて上げるんだ！ 左様なら御機嫌よう、そしてメナスキーの酒屋でゆつくり御楽みなさいまし——丁度私が諸君の御蔭で此處で居ながら存分に楽しんで居ると同じ様にね！

アントニオとテトー、及びバツテスタ退場。

イサベラ (笑ひながら) 左様なら！

二人の婦人は室内へ。音楽又始まる。

ファイリツボ 獨り階段に立つて、活潑な調子で、向ふからやいの〜と押掛けて来た物を有難く頂

戴して、何の心配も無く太平樂をきめ込んで居ると——厭がる物をむりやりに引張込んで来て逃げられない様に自分の側に抑へ付けて置くのと——たとひそれは堪へ難い此瞬間を一時最も愉快にごまかし去る物で有つたとしても——御月様と鼈程の大違だ！

女達 (室内から) ファイリツポ！

ファイリツポ 一生の最後といふ瀬戸際に臨んで、おれにも華やかな冒險の機會が與へられるのか——丁度人の寝入りばなにいろんな幻影が目まぐるしく頭の中を駆廻る様に！ 醒めてゐるんでも無いが——然し確に睡つてるんでも無いで！

女達 (ドアに現れる。) ファイリツポ！

ファイリツポ 只今直ぐに参りますよ！ 最後の今夜はくよくよく物を考へるのは止めにして、思ひ切つて生を樂む事だ！

樂師達音樂を始める。ファイリツポ女達に迎へられて内へ入る。

(幕)

第二幕

ゴロニアの往來。道は右から左奥の方へ通つてゐる。右に一軒の角家、左にも同じく。此二軒の家の前にも舞臺を斜に突切つて往來が有る心、従つて舞臺の前方中央は二つの道路の交叉點に成つてゐる。家の前面は柱廊になつてゐて、人物の動作の一部はその穹窿の下で演ぜられる。家の内部は店になつてゐて其前に商品載せる臺が出てゐる。右の家には交叉點に近くナルデイの店、それと並んで、香料香水商カツホニの店が有る。ナルデイの店の前には、何も載つてない卓、カツホニの店の前には小さな櫃や箱などの載つてゐる二つの卓。

時は黄昏。往來には可なりの人通り。左手から二三の市民が話しながらやつて来て、奥の方へ。彼等に向合つて、數人の兵士が列を整へずに奥の方から現れ出で、舞臺を右手へ突切る。それから、左手から若い男女が出て来て、兵隊の跡からついて行く。ナルデイの妻とロジーナとが一寸店先に姿を現すが直ぐに消える。カツホニ自分の店の前に立つて通行の人に挨拶をしてゐる。右手からゴロニアの町の女々ラウデアとカテリーナ登場。

クラウデア こ、ですわ！ 今晚は！

カツボニ 今晚は、奥さん！ 何を差上げませう？

クラウデア 薔薇水を一本欲しいんですの。

カツボニ へえ、どれを差上げませう？ 薔薇水と申しましても、二十五種か三十種位も種類があるんですからね。普通のバドウア製に、ナポリ製に、キプロス製に……

クラウデア (面倒臭相に) 名前なんか知らないけれど、わたし去年の冬に御店で一本買った事があるんですの——其時には他の人が賣つてくれたんですがね——綺麗な、若い方かたでしたわ。

カツボニ 悴のベンノツツオーですよ！ あ、あ、神様！

クラウデア まあ、あなたどうしてそんなに溜息を吐いてるの？ 亡くなつたんですか？

カツボニ 飛んでも無い事をおつしやつちやあ困りますよ！ 手前の溜息は一つの癖でしてね——善くない癖だと申されても仕方がありませんが——然し何しろ哲學的な癖でさあ。それはそれとして、薔薇水の話ですが、奥さんは屹度ベルシア製を御求めになつたのでせう。

クラウデア え、息子息子さんもたしかそんな事を云つてた様でしたわ！

カツボニ 早速御目にかけます、奥さん！ 奥の方へ仕舞つてありますからね。何しろ他の香水

と一緒にこんな店先なぞへさらけ出して置かうもんなら、朝から晩までボロニア中の娘さん方や奥さんが店の前に立詰めませうよ——それに、無論御若い旦那方もね。あ、あ、神様！

そしてみんなが一文も出さずにい、匂を鼻に一杯嗅込んで持つて行つちまひませう！

クラウデア (カテリーナに) あなたも一本如何？

カテリーナ 何にしますの？ わたしそんな物要りませんわ。わたし毎朝シ、リーのオレンヂを

風呂の中へたらしさへすればそれで澤山よ。

カテリーナ うちの人はまたわたしの髪が花の匂のするのは好きだけれど、そんな果物の匂なん

ぞ好かないものですからね。

カツボニ (壺を持つて来て二人に見せる。)

クラウデア あ、それですよ！ 嗅いで御らん、カテリーナさん！

カテリーナ ほんとうにね……！

クラウデア ほら、おあしを上げますわ。

カツボニ すみませんが、奥さん！ これは値段のたつた十分の一じゃありませんか！

クラウデア だつて此冬に貰つた時にはそれだけでしたわ。

ツボニと！　そして怪しげな代物をどうかうする様なそんな人間じゃ決してありません——何處かの奴等の様に——例へばあのバジニの様な……

カテリーナ　バジニさんの處では何を賣つてるといふの？

カツボニ　それだけはどうぞ御免なすつて、奥さん——ほんとに恐い事です！　彼奴、絞首臺に引張つて行つて然る可き奴ですよ、それから彼奴の店へ物を買ひに行く女達もね！　あ、あ神様！

カテリーナ　何を云つてるんですよ？　（クテウデアに）つい昨日もわたし御妹さんがあの店へ入るところを見かけましたわ！

カツボニ　彼奴夜夜中墓場のあたりをうろくしてゐる事が有るのは、或は偶然だと云つて済ませるかも知れませんが、けれども眞夜中の丑満時に墓場の塀の側で爪で以て土を引掻いてゐるのも矢張り「偶然」だと申して済みますかね？　然し私はもう何んにも云ひませんよ、バジニだつて御客様を殖さうとすればあ、するより他に實際仕方が無いんですからね。——といふ譯はね、彼奴の御客さんと來たら、何か餘程突飛な物でも用るなけりやあ男を夢中にさせる事の出來ない様な女ばかりなんですよ。そこへ來ては、手前共の御客さんなどは、一寸笑顔を見せさ

カツボニ　それはさうでも御座いませうがね——今日の場台とはいさ、か違ひまさあ！　もう二三日も経つて御覽じろ——百倍に賣れまさあ。何も彼も馬鹿値に成つちまひますよ。もう町には何一つ持込む事が出來ないんですからね。何しろ連絡がすつかり杜絶して居るんですから。此ま、で一週間を過ぎたら町中の人間が残らず餓死にできあ——それ迄幸に生きて居られるとしたら——それも實は甚だ覺束無いんだが——と云つて私は何もあなた方を侮辱しやうといふんじやありませんぜ。

クラウデア　それはあなたの云つてゐる通りかも知れないけれど、そんな町中の人が残らず餓死する様な騒に成つた日には、こんな薔薇水なんぞに一丈だつて出す人も無く成りますわね。それはそれとして、どうぞほんとうの事を聞かして頂戴な——一體之れには何が入つてゐるんです？　無論薔薇の葉の汁ばかりでは無いでせうね？

カツボニ　じやあ何だとおつしやるんです？

クラウデア　何かあの——惚藥なんぞに調合したりする物じや無くつて？　わたしそんな風に思へる理由が有るんですの。

カツボニ　御冗談でせう！　手前はカツボニと申す人間ですよ——よく覚えてゐて下さい——カ

へすりやあ、大の男を生かさうと殺さうと勝手次第といふ別嬪さん揃ひなんですからね。
 バジニ (舞臺奥の方からのぞくと出て来る。瘠せた、ひよろ長い老人、人を見下す癖あり。) 今晚は！
 カツボニ 噂をすれば影だ！ (女達に目くばせをする。) 丁度今お前さんとの香料や石鹼しゃばんの話をして感心して居たところさ！

バジニ 此男はわしの事を、何か怪しい薬でも調査するといふ様な蔭口でもききましたかね？
 カテリーナ え、何かそんな風の事をね！

バジニ かまふもんか——明日になれば、ボロニアの人間はみんな同じ事だからね、わしの様な男でも、あなた方の様な御歴々でも！

カツボニ へいえ、お前さんはそんなに悲観して居るのかい？わしは未だそれ程じゃ無いよ。町の城壁は未だ堅固なものだし、それに何と云つたつても我々の殿様は英雄でゐらつしやるからね！

バジニ それがボルジアの様な悪魔にか、つては何の役に立つもんです？

カテリーナ お前さん、悪魔だつて？ 大へん綺麗な男だつていふ評判じゃ無いの？

カツボニ 何しろボルジアの奴が居る處迄は未だ大分遠いよ！

バジニ ところがお前さんが思つてる程に遠くは無いと來てるんだ。さうで無かつた日にやあ、彼奴が昨日誓を立てたといふ言葉が、今日はもうこゝらに知れ亘つて了ふといふ様な事は譯が分らなく成るじや無いかね？

カツボニ フム、そんなら奴やつどんな誓言を立てあがつたといふんですえ？

バジニ 彼奴は神様をないがしろにする此不義の町に對して恐しい審判を下さうといふ誓を立てたといふ事だよ。

カツボニ (最初驚く、それからバジニの肩を叩く。) 嚇しつゝ無しにしやうぜ！ (女達に) ね、あんなんです——先刻ちやんとさう云つたでせう？

バジニ 人はどうだか知らないが、わしの所だけはもうちやんと店を締切つて了つたよ、そしてもう決して開ける事では無いんだ。

兵隊通行する。

クラウデア 何故もう店を開けないつていふの？

バジニ だつて奥さん、御客さんが有りますかい——御客さんが？ 明日此町を占領する奴等は上等の御得意様だらうとも思つてゐらつしやるんですかい？ 奴等あ自分の欲しい物が目に

付いたら何でもかまはずにかつさらつて行きますあ！

カツボニ お前さん、一體何を云つてるんだね？ まるで明日は御經にある最後の審判の日でもある様な事を云つて——そしてボルジアの奴がもう此町に入り込んででも来た様な事を！

それからフランス人とスペイン人も！

バジニ (兵隊を指して) あれを御覧じろく！

クラウデア 何處から来たんだらうね？ ボロニアの兵隊じゃ無いわ！

バジニ さうです、ボロニアの兵隊じゃありませんや、あれはリバルデイの部下の者でミラノから来たんですよ。(兵隊他の方からも来る。)又やつて来た。

カツボニ ロツカの奴じゃ無いか？

バジニ さうさ。あそこには近所の轆轤屋のフォンターナも居る。

カツボニ 残らず武装をして！

バジニ さうさ、明日はみんな出陣だ！

カツボニ 明日だつて？ 誰がそんな事を云つてるんだい？

クラウデア 明日！ そんな筈は無いわ！

バジニ 無い事が有るもんですかい？ 殿様はもうかうなつたら一刻もぐづぐづしてゐらつしやる御方じゃありませんからね——保證しても宜しいですよ！

カツボニ ロツカー！ロツカー！(二人の兵士に走り寄り話を交す。)

バジニ 奥さん方も旦那が従兄弟か御友達でも兵隊に取られなすつたんですかね？

クラウデア え、従兄弟が二人までね——けれど、旦那はちやんとうちに居りますわ。うちの人は未だ見掛け程には危急に迫つて居ないと云つて居りますわ。

バジニ (カテリーナに) そして奥さんは？

カテリーナ わたし亭主は有るけれど、従兄弟なんか有りはしませんわ、そしてそんな物は之れ

からも無いでせうよ。

カツボニ (戻つて来る) お前さんの云ふ事はどうも受取れないよ。もう明日に迫つてゐるといふ

様な譯じゃ無いんだ相だよ、あの兵隊さん達はみんな警備に出かけるんだつて云ふがね。

市民二人登場。

第一の市民 (第二の市民に) ねえ、あなた？

第二の市民 全く正直の話ですよ。——わたしには悴が三人有りますがね、家に残つてゐるのはた

つた一人切りに成つて了りましたよ!

カツボニ 他の二人はどうしたんです?

第二の市民 ウアローリの所へ突走つて、ウイターレの門を堅めて居りますよ、そしてでつかい
劍を振廻しては「法王をやつ付けて了へ!」つて怒鳴つてまさあ?

カツボニ 二人共募集に應じたんですか?

第二の市民 なあに、勝手に行くちまつたんですあ! そして「法王をやつ付けて了へ! おれ
達はお前達を保護するんだ!」つて怒鳴つて居るんですあ!

カツボニ 何——あなたの息子さん達がわたし共を護つて下さる?——あの何千萬といふ寄手に
向つて? とても防ぎ切れる譯のもんじやありませんぜ! どうして、殿様だつてあなた
の息子さん達を犬死にはさせないでせうよ! そんな無慈悲な殿様じやありませんからね!

バジニ 少し氣を付けて口を利くがい、ぜ、うっかりそんな事を云つたら首が危いよ!

カツボニ (不安相に) 首が危い?——一體おれは何を云つたんだらう? そんなら、平和を好む
市民は罪人だともいふんですかい? さうは云つてもわしは叫んでるんですぜ——ボルジ
を倒せ、マリスコツタイを殺せつて!

數人の市民 (追々其間に集つて来る。) マリスコツタイの犬奴! マリスコツタイを殺せ!

カツボニ ボロニア公萬歳! ねえ、バジニさん、何故お前さん黙つてるんですよ? お前さん
の云草じやあ無いが、首が危いですが、へ……!

ロジーナ (ナルデイの店から出て来る。此時市民、娘達、女房連など又集つて来て大分の群をなす。) ねえ、
バジニさん、何か耳新しい事でも有つて?

バジニ 大有りさ! 今日中にもお前さんがどんなやんごとなき御身分に成上つて了ふかも知れ
ないといふ大事件が出来してるんだぜ、ロジーナさん!

ロジーナ それは一體どんな事なの?

一人の娘 ロジーナさんがどうなるといふの?

バジニ ロジーナさんか、お前さんか——(色々の娘達に)それともお前さんか——お前さんか……

二三の娘 どうだといふの?

バジニ 飛んでも無い玉の輿に乗つちまはうといふ話さ!

ロジーナ さつさと云つておしまひよ!

バジニ ——なんて、まるでお前さん方はちつとも御存じの無い様な口振だね!

多くの娘達 どんな事？ どんな事？

バジニ お前さんはほんとに御存じ無いかい、今夜殿様が……いや止さう、お前さん達は屹度知らない振りをしてるんだから！ 左様なら！（立去り相にする。）

娘達（一生懸命に）あたし達はほんとうに何んにも知らないのだわ！ 殿様がどうだといふのよう？

ロジーナ そんなに人をじらすもんじや無くつてよ、バジニさん！

バジニ お前さん方は未だ御存じ無いかね、今夜殿様がお前さん方の中の一番美しい御方を――

尤もお前さん方と云つてもね、無論こゝにゐる御方々だけを云つてゐるんじやありませんよ、お前さん方は只偶然今此處へ來合せただけだからね――さうで無くても、わしはボロニア中の美しい娘さん達残らずの事を云つてゐるさあ――え、さういふ譯ですよ！

娘達 それがどうしたといふの？ じれつたいつたら無いね、ほんとうに！ 何の事だか未だちつとも分りはしないわ！ 殿様があたし達をどうしやうといふの？

バジニ お前さん方の中で第一等の美人を今夜御城へ御召しにならうといふんだよ！――だが、お前さん方はそんな事尻に御存じだらう！

第一の娘 あたし知つてるなんて云はないわ。

第二の娘 あたし尻に知つてるわ！

カツポニ それからどうしやうといふんだね？ そんな風の話は以前にも有つた様だけれど。

ロジーナ バジニさん、それはほんとうの事なの？ 正直の話なの？

バジニ 誰が嘘を吐くもんか、ロジーナさん！

カツポニ そんな事になるなら、あの薔薇水をあんなにやすく賣つて了ふんじや無かつた！

第一の娘 若しほんとの事にしろ、バジニさん、其第一等の美人といふのをどうして捜し出すんです？

第二の娘 みんなが御城へ出頭して届出るの？

ロジーナ（バジニに）それはほんとうに嘘じや無いの？ お前さん、わたしにからかつて怒らせやうと思つて、そんな出鱈目を云出したんじや無いの？

バジニ お前さんを怒らして何になるんですよ、ロジーナさん！

ロジーナ あの人は今頃何處で何をしてるんだらう？ バジニさん、バジニの叔父さん、わたし今夜御城へ呼ばれなかつたら、呼ばれた女を食殺してやるから！

バジニ 今夜で無くつたつて、之れからも有る事だよ！

ロジーナ 有るもんかね、わたしだつてそれ位の事はちやんと分つて居ますよ！

バジニ わしは又お前さんの戀は殿様の御留守中にすつかり冷めて了つたのかと思つたら！ だつてあれからお前さんが若い、いゝ男といちやついてるのを随分方々でよく見かけたものだからね！

ロジーナ どんな男と關係して見ても、却て殿様の戀しさが一層募つて来るばかりなのさ！

此時カツボニの伴ベンノツツオー登場。

カツボニ 何故そんなに息を切らして来たんだい？ 懶者奴！ 一體何處をほつ付き歩いてゐやがるんだ？

ベンノツツオー 塔へ行つて来たんだよ！

二三の者 どの塔へ？

ベンノツツオー 僕は何處へ行つて来たんだと思ひます？ ロジーナさん！ アジネリの塔ですぜ！

74 ロジーナ アジネリの塔がどうしたといふんだね？ お前さん塔に攀登つて来た事を褒めて貰ひ

度いともいふのかい？

ベンノツツオー そして僕に見て来た物はどんな物だつたと思召しです？

二三の者 何を見て来たといふんだい？

ベンノツツオー まるで赤い蛇の様に遠くの方から光りながらのた打つて来るんですぜ——そして深い霧の底からでも這出して来る様に此方へそろ／＼やつて来るんです！ それはね、塔の番兵の云ふには、夕日の光にきらめく兜や楯や槍の穂尖だといふんです。そしてね、みんなローマとシエナからやつて来た軍勢で、中には例のチエザール・ボルジアの大將がちやんと控へてゐるんだつて云ひますぜ！

人々動搖。

カツボニ ボルジアが其中に居るつて事は何奴がぬかしたんだ？

ベンノツツオー だつて、みんながさう云つてるよ！

カツボニ 一體誰か實入た者でも有るといふのかい？ ボルジアの奴は未だローマに居る筈だが！

バジニ それで無けりやローマと此處とにね！

カツボニ 何——何だつて？

バジニ それじゃあお前さん未だ御存じ無いかね——あのボルジアといふ男は二つの場所に同時に身を現す術を心得てるんですぜ！

カツボニ 何だつて？

第一の市民 二つの場所に同時に？ そんな馬鹿な事が有つてたまるかい！（笑ふ。二三の者共に笑ふ。）

第二の娘 いゝえ、笑話じゃ無いわ、ほんとうなんですつて！ うちのお母さんもさう云つてよ！

第一の娘 神父のマルコさんも同じ様な事をおつしやつてよ！

ロジーナ（ベンノツツオー）にねえ、お前さんの見て来たのはそれ切りなら……

ベンノツツオー それからあの城壁の邊りさへ——直きそこのね、ほらよく夕方なぞに散歩に行きますね——あの邊までも何千といふ人数でさあ、それにあの邊の畑も岳の上も一杯なんです、そして新軍の兵隊が續々と繰込んで来んですがね、それがまるで豫め一人々々の持場がちゃんと定められてもゐるのかと思へる位に整然としてるんです。さういふ工合に隊と隊とが相

並んで陣取つてゐるんですが、不思議な事には此方には何の物音も聞えては来ず、そりやあ氣味が悪くなる位にシーンとしてるんです。一體之れはどうしたもんでせう？ 奴等だつて少くとも我々と同じく生きた人間ですぜ、しかもつい手も届き相な處に居るんですぜ！——それである、奴等の足音は愚、咳せき一つ聞えて来ないといふのは變じやありませんか？

驚き。叫び。

第一の市民（説明して）それはね、實際は君が思つてるよりもずつと遠方に陣取つてるからなんだよ。薄暗いので目が騙されるんだよ。それに、蟹氣樓とか空中の鏡とかいふ様な話も有るからね、そして何千里といふ遠方に在る物が手に取る如くに見える夜も有るといふからね。さうなると、今ベンノツツオーが見て来た大軍といふのも、實は此ボロニアよりも却てローマの方に近い何處かの野原にでも陣取つてるのかも知れないね！

第三の市民 珍しい話を聞くものだ！「空中の鏡」だつて？ 其奴は確に奇蹟だよ！

バジニ 何故お前さん達はそんな奇蹟の何のといふ話を持出すんだい——それ位の事は造作も無く説明が出来らあね！

二三の者 どうして？ どうして？

バジニ それはね、かうだよ——奴等の足音がちつとも聞えないといふのはね、奴等の足が地面に付かないからの事さ！ 飛びでもしなかつた日にやあ、足で歩いたばかりでどうしてそんなに早くやつて来られるもんかね！

二三の者 さうとも〜！

他の者 あんな奴の云ふ事を本気にしなさるな！ 彼奴はおれ達を馬鹿にしてるんだよ！

初の者 だつてお前さん達は空気が鏡だつて云つた奴の言葉は信用したじや無いか？

或る男 何——空気が鏡だつて？ ハ、ハ、ハ、ハ！（拳で空を切る。）そうれ見ろ、鏡に輝が入つた！

混亂。群衆は散る。舞臺漸く薄暗くなる。

ウイットリーノ（奥より急いで登場。ロジーナの側へ行つて前方に引張つて来る。急ぎ込んで）ベアトリー

ーチエさんは何處へ行つてるんです？

ロジーナ わたし知らないわ、そんな事！

ウイットリーノ（非常に早口で）未だ日が入らない中にあの人が姿をかくす様になつてから之で三日目ですよ！ 何か物を訊ねでもしなけりやあ、わたしなんぞに口も利かなく成つてから今日で三日になりますよ。一體どうしたといふんでせう？

ロジーナ 三日？ わたし達がみんなで御門の外で御祭を見てから丁度三日じや無いの？

ウイットリーノ あの日の晩から見えなく成り出したんですよ！ あなたはもう忘れて了つたんですか？ あの時わたし達だけが家へ歸つて来て、ベアトリーチエさんは遅くなつてから獨で歸つて来たでせう？

ロジーナ 道でも迷つたんだらうよ——然しそんな事では無いかも知れない！ そんな事どうで

もいゝじや無いの？

ウイットリーノ フランチエスコさんは何處に居るんです？ 何時歸つて来るんです？

ロジーナ 多分もう歸つては来ないだらうよ！ 御門を守つてゐるんだからね、一時間だつて持場が離れられるかどうか分るもんじや無いわ。

カツポニ ねえウイットリーノ、お前さんの御祝儀は何時だね？

青年達、或者は全く武装し、他は武器のみを携へ、嬉遊と談笑しながら通過する。

バジニ 今夜は随分方々で婚禮が有るらしいぜ、坊さんの御祈禱なんぞは抜きでね。

ウイットリーノ 何ですつて？ バジニさん！（新たな不安を以つてロジーナに）ベアトリーチ

エさんは何處へ行つてるんでせうね？

カッポニ 其立派な人達はどなただらう？

バジニ お前さん未だ知らないの？ ファントウツチ伯と妹さんじゃ無いか！

カッポニ あんな黒装束をして？

第一の市民 お母さんが亡く成つたんだよ！

第二の市民 午過ぎのあのやかましい鐘の音はその爲めだつたのかい？

バジニ お嬢さんを御覧——フィリッポ・ロスキーとかいふ詩人のお嫁さんに成るんだとよ！

二三の者 フィリッポ・ロスキーの？

人々丁度其時登場せるアンドレアとその妹とに挨拶して四方に散す。二人はしづくと舞臺の前方に歩みを進ぶ。二人の松明持先に立つ。アンドレアいくら話しかけてもテレジーナはそれを理解せらるしき表情を見せず。

アンドレア ねえ、妹、たつた一言でい、のだから口を利いてくれないか？ 一年振りで家へ歸つて来て、死んだお母さんの枕頭にお前を見出してから、わしは未だお前のあのなつかしい聲を一度も聞かなかつたのだ！ 一體どうしたといふものだ、テレジーナ！ 涙一滴こぼしもしないで、そして一言も口を利かないなんて！ わしはわざとあの墓穴の様に眞暗い所から明る

バジニ ベアトリーチエ？——多分もう抱かれに行つてるだらうよ！

ウイットリーノ 誰に？

バジニ 殿様さま！

ウイットリーノ 氣でも狂つたのかい？ バジニさん！ 誰が殿様に抱かれに行つたんだつて？

バジニ だつてベアトリーチエはホロニア中で第一等の別嬪さんだらう？

ウイットリーノ 何云つてるんだい？ 一體それは何の事だい？

カッポニ それはね、かういふ譯だとさ——殿様が今夜ホロニア中で一番綺麗な娘を御城へ御召しにならうといふ事に成つたんだ。

ウイットリーノ (一寸びつくりするが、笑ひ出す。) 馬鹿な！ 誰がそんな事を云ひふらすんだい？

誰がそんな馬鹿な事をほんとうにする奴が有るもんか！

ロジーナ それはほんとうよ！ ほんとうの事よ！ お前さん分らないの？ わたし達はみんな

殿様を待つてるんだよ、これから殿様の御迎ひに出かける所なんだよ。

ペンノツツオー (叫出す。) ロジーナさん！

みんな舞臺の奥の方へ首を向ける。

みへ連れ出して来る迄は、何んにも訊ねはしなかつた、それからわしはかうしてにぎやかな町へ連出して見た——かうしたガヤ／＼した處へ出たら、お前の其恐しい沈黙も解けるかも知れないと思つたものだからね。お前は子供の様に黙つてわしについて来た。わしは百遍も千遍も繰返し／＼訊ねて見た——フィリップは何處に居るのだ？ あの男がこんな場合に影も形も見せないといふのは一體どうした譯だつてね。けれどもお前はじつと空を見詰めて相變らず押黙つたまゝだ。お前の心の苦痛がお前の言語を奪つて了つたのかい？ 泣くに泣かれぬ涙が胸に押詰つて聲が出ないといふのかい？ 此兄に是非とも打明けなければならぬ必要に迫られてゐる事が有りながらも、然もそれは身顛ひのする程にいやな事だといふのかい？——それでお前は無言の行をやつて居るのかい？ どうぞ後生だから話しておくれ！ (新なる希望を以て) そんならお前は何か神様に誓でも立てた爲めに、今日限り、或は七日七夜、或は永久に沈黙を押し通さうとするのかい？ 若しそんな譯でもあるのなら、一寸頭を傾けてその意味を傳へて貰ひ度いものだね。お前はこんなに云はれても目の色も變へないのだね、身振で理解の意味を現す事さへしないのだね！ お前の身の上で起つた出来事はそれ程までに類の無い様な事件なのかい——お前の其心持を傳へる爲には此世の如何なる表現も力無いものと思はれる位に！

(追々不安の念を昂めつゝ) そんならいよくほんとうの狂亂に成つたのか知ら——未だ會て聞いた事も無い様な恐しい狂亂に！ 若しさうとしても、わしはお前の中に潜んでゐる正氣を戻す爲に根限り命限り叫び続ける積りだ——丁度、遠く靜かな波の上に漂つてゐる死骸を求めて海の中に叫ぶ様に！——こんなに一生懸命に話しかけても、お前は果して解つたのか解らないのかすらも察する術が無いといふのは何といふ恐しい事だらう！ 然しこんな有様のお前を唯一人亡び行く此町に残して置いて、又もかし一人どうなるかも知れぬ運命の手に身を委ねなければならぬといふ事は、その十層倍も恐しい事だ！ わしは今お前の額に今生の名残にわしの唇を觸れるのだ、そして同時に、熱情を籠めた其キッスもお前に取つては單に空氣のいぶきに過ぎないといふ恐しい事を思はなければならぬ！ せめては最後の慰めをも——お前の口からの別れの言葉をも聞く事さへ出来ずに絶望に沈むのだ！ (彼女の答を待つ) そんならおいで！——うちへ連れて歸らう。そしていよくお前の其恐しい沈黙をどうする事も出来ない場合には、わしは此町に滞在する最後の時間を利用してあの男の所へ行つて見る積だ——それは今でも身顛ひがする程いやな事だけれど——あの男の所へ行つて乞食の眞似をするのは此唇が承知しないし、さればと云つて、彼奴を殺して了ふのは此手が承知しないのだからね！——そして

思切つて二つの中の方かを決行すれば、わしは此恐しい苦悶から免れられるのだがなあ！

アンドレアとテレジーナ松明持を先立て、退場。前場の間に老ナルデイとその妻彼等の店の前に現れ、陳列臺を片付ける。

ナルデイ 手に一の指輪を持つ。小さなウィットリーノは何處へ行つたやら？ わしは彼奴を褒めてやるよ。ねえ、御覽、此首はほんとにうまく刻んであるじや無いか！ 彼奴で無けりやあ到底出来ない細工だよ！ フランチェスコだつてこんなに出来はしないよ、ウィットリーノはどうしてもわしの仕事の跡継ぎになる可き奴だよ！ 彼奴何處へ行つてるんだ？ 何處へ？

ナルデイの妻 わたしにそれを頂戴——頂戴よ！ 他のと一緒にして置くんだからさ！

ナルデイ 他のと？ 何故お前はみんな箆笥なんぞへしまひ込んで置くのだい？ そして何故其箆笥はみんな窖の中へ押込んで置くのだい？ 一體どういふ譯だか、わしにはさつぱり合點が行かないよ。

ナルデイの妻 さうしなけりやあならない譯が有るんだよ——打ちやつてお置きよ！

ナルデイ (泣出し相に成つて) 此指輪だけはわしの物にさしてくれよ！ 今日中に金にして了ふんだから。

ナルデイの妻 今日あたりそんな指輪なんぞ買つてる人が有るもんかね！ さあ、此方へおよし！

ナルデイ キアウエルツチさんなら屹度買つてくれるよ。百ドウカーテン位は出ささ、屹度！

それで子供達に着物をこさへてやるんだ！ 子供達はどうしたんだい？

ナルデイの妻 遊びに行きましたよ！

ナルデイ 何故未だ歸つて来ないんだい？ もう暗く成つて了つたじや無いか——どうして未だ歸らないんだ？ ペアトリーチエが又迷兒に成るといけないうよ、昨日の様にね！

老キアウエルツチとその甥オルランデノ登場。

キアウエルツチ え、どうしたつて？ あのペアトリーチエが昨日迷兒に成つたつて？

ナルデイの妻 分つてるじやありませんか——ほら七年前の話でさあね！

キアウエルツチ 大きく成つた娘だつて時々迷兒になる事も無くは無いさ。あの綺麗な娘さん達は何處へ行つたんだい？ おかみさん！

ナルデイの妻 あなたは今日の様な場合にもそんな事より他考へないんですね？

キアウエルツチ 何時だつて其他の事は考へないよ——何時だつて！ あゝ、美しいロジーナさ

んの御入來だ！

ロジーナ登場。

オルランデノ 今晚は、美しいロジーナさん！

ナルデイの妻 何故お前髪を解いて了つたのさ？

ナルデイ 何處を遊び廻つて歩くんだい？ ロジーナ！ お父さんは目を泣腫してるよ！ フラ

ンチエスコは何處に居るんだ？ それからベアトリーチエは？

ナルデイの妻 迎ひにでもいらつしやいよ——屹度其邊で子供達に出逢ふから。

ナルデイ (去り際に) 屹度御目にかけてまさあ——夜遅くまで、夜が更けるまで——待つてなさい

待つてなさい！

キアウエルツチ (笑ひ出して) お爺さんは實際滑稽だね！

ナルデイの妻 あの人の事を笑つちやいや！

キアウエルツチ おや、變な事を云出したね！ 何故笑つちやあいけないんだい？ お爺さんを

あんな物にして了つたのはお前とわしの二人だと思ふとたまらなく面白くなるじや無いか！

ナルデイの妻 どうぞそんな事は後生だから云はないで！今日はわたし達が悪い事をやつた罰を

受けなければならぬ日じやありませんか！

キアウエルツチ 罰だつて？ お前どうかしてるんじや無いかい？ まるで幽霊の様に眞蒼だ

ぜ！

ナルデイの妻 わたし怖くつて仕方が無いの！ 何萬といふ軍勢が町の外に押寄せてゐるでせう、

そして町の四方八方に火を掛けて攻込んで来て、わたし達を斃殺しにして目の玉を抉り出すん

でせう？

キアウエルツチ ハ、ハ、ハ！ 何を馬鹿な事を云つてるんだい？

ナルデイの妻 ボルジアの兵隊はそりやあ亂暴ですつて！ 明日はまるで最後の審判をつくりで

せうよ！

キアウエルツチ 一體誰がお前にそんな事を云つて聞かせたんだい？

ナルデイの妻 今朝御寺へ懺悔に行つた時に、神父のマカリオさんがさうおつしやしたんです

よ！

キアウエルツチ あんな者の云ふ事を眞に受ける奴が有るもんか！ 坊主達はみんなボルジアの

肩を持つに定つてらあね。

ナルデイの妻 あなた、殿様の所へ行つて御願をして下さらない？
キアウエルツチ 御願ひ？ 何をさ？

ナルデイの妻 あなた御殿では信用が有るんでせう、わたし知つてゐるわ。あなたが御役人達と一緒に殿様の前へ行つて御願をしたら——手遅れにならない中に殿様もわたし達も此町を舉つてボルジアに降参する事にしたら……

オルランデノ (其間にロジーナと話し續けてゐる。) ロジーナさん、伯父さんに聞いて御覽な！ 伯父さん、此人はどうしても僕の云ふ事をほんとうにしないんですよ——僕は二百人の弩手隊を率ゐて、多分明日早朝出陣する事に成るだらうつて、いくら云つて聞かせても！

キアウエルツチ さうだ、若い者は是非共出かけなければならぬ場合だ！ わしだつて左の脛に痛い所さへ無けりやあ、屹度一緒に出かけるんだが！

ナルデイの妻 わたし達は往來や家の中で矚殺しにされるのね！

オルランデノ さうですよ、敵兵を一步でも町の中へ入れさへすればね！

ナルデイの妻 フランチェスコも出かけますわ。あの子は今朝早く家を出て行つて了つたんです。

オルランデノ 出かけて行つた人数は大したものだが、扱て其中幾人歸つて来る事やら！ ロジーナさん、あなたを之れ程までに思ひ詰めてゐる此オルランデノの命は今宵一夜限りかも知れないんですぜ！

ロジーナ ねえ、あなた、殿様が町を御通りになる時には、松明持が何人御供をするんでせう？

オルランデノ 規則では六人といふ事に成つて居るけれど、殿様は決してそんな規則なんぞに拘泥なさる御方じやありませんよ。それよりもね、ロジーナさん、どうぞ僕の云ふ事を聞いて下さい、御願ひだから！ ガリゼンダの門から十歩ばかりの處に僕の小さな家が有るんです——

屹度御存じだらうと思ふけれど！ ボロニア中の娘達は残らず知つて居ますよ！ あなた、僕の家を内部から觀察し得る最後の機會を捉へやうといふ氣にはなりませんか？ 僕は今生に思ひ残す事之れ一つです！ ねえ、考へても御覽、若き英雄の最後の一夜を甘美ならしむる事は此上も無き愛國的の行爲と云ふ可きじやありませんか！ ロジーナさん、多分明日の今頃は僕の身體は城門外の砂の上に冷く成つて居るのですよ！

ロジーナ オルランデノさん、あなたそんな餘計な事だけは云はないで置けばいゝのに！ ほんとうにそんな事を思ふと堪らないわ！ あなたの死骸の事がわたしの頭にこびり付いてどうし

でも離れなく成つて了つたわ！ どうぞわたしの事は諦めて下さい！ わたしあなたなんぞと一緒に居たつて面白くも何とも有りやしないわ！

オルランデノ ロジーナさん、あなたは薄情な——ほんとに薄情な女ですね！

フランチェスコ 武装して登場。

キアウエルツチ やあ之れは、フランチェスコ君、すっかり武装をして！

オルランデノ 今晩は、フランチェスコ君！ほんとに立派になつたね！

フランチェスコ (餘り高聲で無く) 行つてくれ！

オルランデノ 何？ 何を云つてるの？

キアウエルツチ 腰に劔を一本ぶら下げさへすりやあ、忽ち豪く成つて了ふんだね！

オルランデノ 君は八字鬚でも生やして来たのかと思つたよ！ 君は一體何を云つたんだね？

フランチェスコ お前さん達は分らなかつたのかい？ 行つて了へ！

ナルデイの妻 お前どうしたの？ フランチェスコ！ こんな立派な方々に向つて、何を冗談云つてるんだい？

90

フランチェスコ 黙つてゐて下さい、お母さん、御願ですから！

91

オルランデノ フランチェスコ君は屹度酒でも飲まれたんだらう！

キアウエルツチ 此男の恐しい目付を見たばかりでもローマ人なんぞは尻に帆掛けて逃げ出すに決つてるよ。

オルランデノ さあ、おいで、ロジーナさん、あんな狂人には勝手な事を云はして置くとして、

我々が此世に於て與へられた最後の美しい此一夜を散歩でもして過すときませうよ。

フランチェスコ 君は「最後の」夜と云つたね？ 今即座に君の御言葉通りにして御目にかげや

うか？

オルランデノ え、何だつて？ そんなら君は本氣なんだね？ さういふ了簡なら此方にも覺悟

が有るよ！ (劔の柄に手をかける。)

フランチェスコ (劔を抜く。)

ロジーナ (感心した様にフランチェスコを見詰めて) ほんとに立派になつた事！

オルランデノ いや、明日は大事を控へて居る場合、大切な劔をこんな子供らしい喧嘩で汚して

了つてはならない。僕の命はもう自分の勝手には出来ないのだ、僕の命は祖國の物なのだ！

さあ、伯父さん、参りませう。

キアウエルツチ さうだ、行かうよ！ 然し其前にな（立去り際に）此滑稽な青二才殿をうんと笑つてやらなけりやあ！（大儀相に短い、低い笑聲を押出す。オルランデノと退場。）

フランチェスコ ベアトリーチエは何處へ行つてゐるんです？

ナルデイの妻（心配相に、然しわざと強く）お前何の積りであんな真似をしたんだい？ 氣でも狂つたのかい？

ロジーナ けれどお前、随分立派におなりね！ それだけはほんとうよ！

フランチェスコ ベアトリーチエは何處へ行つてゐるんです？

ナルデイの妻 あの子はまだ歸らないよ、お前あの子に何か用でも有るの？

フランチェスコ 僕はベアトリーチエに別れを告げる爲に來たんです、それからあの子を確實な保護者の手に渡す爲に。

ナルデイの妻 それはどういふ事なの？

ロジーナ 今夜はうちに泊らないの？

フランチェスコ あなた方は分らないんですか？ ベアトリーチエだけにお別れを云ひさへすり

やあそれでいゝんです、他の人にはちつとも用が有りません！ お父さんがたとひ物事が分る

としても 僕はだまつて行きますよ！

ナルデイの妻 お前何處からやつて來たの？ フランチェスコ！

ロジーナ 屹度オルランデノさんの云つた通りよ——酒があんな事を云はしたのよ、屹度！

フランチェスコ（母の腕を掴んで、彼女だけに）僕が何故あなた方を棄て、出て行くのか御分りで

せう、お母さん！ 僕は今日の様な機會を待つて居たんですよ、萬一神様の思めしで運よく此

首がつかれてゐやうとも、僕は再び此家の敷居は踏がない決心です！

ナルデイの妻 お前よくもお母さんに向つてそんな口が利けるね！

フランチェスコ お母さん！ 僕はあなたの様な「お母さん」が有つたといふ事すらなるべく早

く忘れて了ひ度いと思つてゐる位なんです！ 僕は此家の中で見るに堪へない醜態を除りに多く

見せ付けられました、そして又ぞろ新しい汚辱が始まりかけて居るのです。僕も未だ子供の時

分にはぼんやりそんな風の事を感じて居たばかりで、未だよくは分らなかつたんです。然し僕

の目が明いてからももう一年経ちました。そしてお父さんは何が原因であんななみじめな阿呆に

成つたのかといふ事も分つて來たのです。そして今度は此人があなたの二の舞をやらうとして

ゐるのです——自分の身體に目を付けてゐる男に自ら身を賣らうとしてゐるのです。だから僕

はこんな汚れた家を去つて、あなた方を忘れて了ふ事の出来る日と時とが来た事を有難いと思ふのです。

ベアトリーチエ登場。

ロジーナ　そうら、お前さんの大好きなベアトリーチエのおいでだよ。

フランチェスコ　(ベアトリーチエの方へ進んで、真情を籠めた、殆ど不安に近き柔しさを以て) 妹!

ベアトリーチエ　フラチンエスコ!

フランチェスコ　(母と姉とに)　一寸ベアトリーチエと僕と二人だけで話をさせて下さい!

ナルデイの妻は店の中へ　シーナは町の方へ去る。

フランチェスコ　(前とは打つて變つたやわらかな調子で)　何處へ行つて来たの?

ベアトリーチエ　遠くの方よ。　だけど、誰がわたしにそんな事を訊ねる権利が有るの?

フランチェスコ　僕さ!　お前の兄さ、ベアトリーチエ!

ベアトリーチエ　い、え、誰だつて決してそんな権利は無くつてよ。それはさうと、兄さんはひどく立派に成つたのね、わたし見違へる程だつたわ?

フランチェスコ　ねえ、ベアトリーチエ、僕の云ふ事をよく聞いておくれ!　僕はお前も知つ

ての通り戦争へ行く、けれど僕はお前の事が心配で堪らないのだ!　僕は出て行く前にお前を安全な場所へかくして行かうと思ふんだ。

ベアトリーチエ　わたしをどうしやうといふの?

フランチェスコ　此家にはお前はもう一日も居てはならない、僕は實際お前の身の上が心配でたまらないんだ!　僕には何だか、お前の身體の何處かに一點の火が燃え上つて、その光が不安な方向へ向つてゐる様な気がするんだ、然も僕の身體はもうこんな風になつてはお前の身の上を守る事も出来なくなつてしまつた!　僕はお前がいつまでも立派にしてゐてくれ、ばい、と思ふ、けれどもお前にはどうも他の人達の様にちやんと自分で自分の身を護つて行くだけの力が無さ相に見えるのだ——しかも僕は最早自分でお前を保護する事が出来ない!　然したとお前の運命はどんな物であるにしても、萬一僕の希ふ所と違つた物に成つてゐる様な事があつた日には、僕は嫌惡の情の爲に死んで了ふかも知れない、或はお前に唾を吐掛けるかも知れない!　僕はお前が立派に身を護つて、一番適當な人を——お前をあんなに愛してゐるあのウイットリノーを夫に持つてくれる様に御願するのだ。

ベアトリーチエ　兄さんは早くからさういふ考でゐるらしいといふ事はわたしにも分つてゐた

わ。

フランチェスコ 僕はあの男に代つてお前の心に話しかけるのだよ、ベアトリーチェ！ それから又僕自身の爲にもだ——神様の命する處へ何處へでも安心して出かけられる様にね！ どうぞあの男を夫にしておくれ！

ベアトリーチェ そしてわたしあの人と何處で暮す事になるの？

フランチェスコ 此家の人達と一緒にでは無く——又此町の中でも無くだ！

ベアトリーチェ だつてもう町の外には一步も出る事がならないつていふじや無いの？

フランチェスコ

明日になつたら屹度其通りだらうよ、けれど今日は未だそれ程では無いんだ、東の方の街道は未だ開いてるよ。尤も何百人も何千人も一度に押掛けて行つては駄目だがね、然しお前達二人だけなら屹度安全に抜出られる様に僕が工夫するよ！

ベアトリーチェ まあ兄さんはそんな事を云つて——それじやあ今日中に？

ウイットリーノ登場。

ウイットリーノ 僕の大事のベアトリーチェさん、やうやく御歸りになりましたね！

ベアトリーチェ 今晚は、ウイットリーノさん！

96

97

フランチェスコ 今妹と話してゐたところだよ、ウイットリーノ君！

ウイットリーノ もうあの事を云つて下さつたんですか？ わたしが自分で云出すよりも、其方がベアトリーチェさんはよく取つて下さるでせう。そして返事は如何でした？——いや、然し待つて下さい、ベアトリーチェさん、今直ぐには何んにも云はないで下さい——そんなよそよそしい目付でわたしを見て居る間は！

フランチェスコ ウイットリーノ君、どんな返答であらうと、今はそれを延してゐる時では無いよ。今日は短い時間の範囲内に非常に澤山の事件が込合つてゐるんだ。それで今日の一時間は一日に相當し、一日は一年にも當つてゐるのだからね。

ベアトリーチェ 兄さん、ほんとうにさうよ！

フランチェスコ だから、ベアトリーチェ、早くウイットリーノ君に承諾の返事をした方がいよ、ウイットリーノ君に身を委せる積りであるのなら。

ウイットリーノ 然し御断りの返答なら、どうぞ今直ぐには云はないで下さい——わたしに取つては心臓を突刺される程の痛手なものですから。せめて一寸の間なりと希望を抱かせて下さい。(フランチェスコに)わたしはベアトリーチェさんの返答を聞くのが恐しいのです、フランチェス

ベアトリーノのエチ

コさん！ 近頃ベアトリーチエさんはちつともわたしの側に寄付かうとしないのです。(ベアトリーチエに) 毎日御日様が沈むと同時にあなたは見えなく成るのですね、ベアトリーチエさん！ 然しわたしは知つてゐます、あなたは只門外の岳や畑のあたりをぶらぶらしてゐらつしやるのでせう。けれども、一寸振返つて見たら随分遠く迄来て了つたとは思いませんか？ だからわたしはあなたの返事を聞くのが恐いんです。

ベアトリーチエ 恐い事なんかちつとも有りはしないわ、ウイットリーノさん！

ウイットリーノ (忽ち勇氣と希望とを得て) じやあ、あなたは、わたしを愛して下さるんですか？
ベアトリーチエ い、え、ウイットリーノさん！ けれどわたしあなたの願も兄さんの望みもかなへて上げる積りなの。兄さんはほんとうに怜愍^{れんみん}だわ。わたしもあなたの胸にすがり付いてさへるれば誰に頼るよりも安全だと思ふの。わたし決してあなたのキッスに憧れてゐる譯じや無いのよ、ウイットリーノさん！ わたし只あなたの側でゆつくり休み度いの、わたし全く疲れちやつたの。

フランチェスコ お前一體どんな事を経験した爲めにそんなに疲れたといふの？ ベアトリーチエ！

ウイットリーノ (不安相に) 訊ねないで下さい どうぞ訊ねないで下さい！ いつかわたしが訊ねて見る事も有るでせうから。それから、ベアトリーチエさん、あなた承知してゐるんですか？

——出来る事ならわたし達は今日中に式を挙げて此町を去らなければならぬのですよ！

ベアトリーチエ 今日中に？

フランチェスコ それが出来るのは今日だけなんだ、だから今日中にしなければならぬといふのだよ！ ねえ、僕の云ふ事をよく御聴き！——サン・ステファノのお寺でお前達の式を擧げる爲めに坊さんが待つてゐるのだ。そして式が済んだら僕はお前達をサン・ウイターレの門迄送つて上げやう。僕も今朝に成つて始めて聞き込んだのだが、そこには一本の拔途が有つたね、城壁や土の底を潜つてランジの古い別荘の所迄来て、その庭に出口が開いてゐるのだよ。それで、其庭からルーゴの方へ行く道を辿つて行けば、夜が明けないうちにブドリオに着く筈なんだ——そしてそれから……

ウイットリーノ そこ迄漕ぎ付けさへすりやあ、もう大丈夫ですよ。ブドリオからは白晝大手を振つて安全にわたしの故郷の町へ行けます、わたしはあなたを親達の側へ連れて行きます、親達はどんなに喜んであなたを抱くでせう！ 總べての準備は整つて居りますから、一三日の中に

仕事場が開けますよ。實際わたしは仕事と喜びとに充ちたわたしの一生が目の前に見えるのです！

ベアトリーチエ あなた方は全くうまく考へたのね——筋書通りに運びさへすればね！

フランチェスコ 尤も此計畫にも全然危険が伴はない譯では無いさ、然し今夜此ま、ボロニアの町にぐづぐづしてゐるよりも、思切つてそれをやつて見た方がどの位望みが有るか知れやしないよ！

ベアトリーチエ そんならわたし矢張りウイットリーノさんのおかみさんに成つて了ふのね！
まあ考へて御覽なさい——人間なんてどうなるか分らないものね！——つい一年ばかり前迄は御門外の牧場で無邪気に遊んで居たのに！

ウイットリーノ ベアトリーチエさん、わたしほんとにどの位あなたを愛してゐる事が！

ベアトリーチエ わたしつくづくさう思ふわ「時」なんて只の言葉に過ぎないのね——只それ切りの物だわ！ 兄さん、わたし先刻からあなたの様子ばかり眺めてゐるのよ！ 昨日迄は未だほんの坊ちやんだつたのに、今日はもう立派な兵隊さんに成つてゐる！ それからあの御伽噺も……！

フランチェスコ お前は御伽噺の事なんぞ思出してゐるのかい？

ベアトリーチエ お父さんがよく話してくれたでせう——水の中に頭を突込んで、此世でならば二十年間もかゝる程の色んな冒険の夢を見て、それからひよいと頭を擡げて見たら、それは一瞬間の事であつたといふあの話を！（髪をつかむ。）

ウイットリーノ どうしたんです？ ベアトリーチエさん！ 何故あなた髪なんか掴むんです？

ベアトリーチエ 未だ髪が濡れてゐやしないかと思つて！

フランチェスコ 一體お前の官能はどんな刺戟を受けたのだい、ベアトリーチエ、此頃の蒸暑い夕方の時刻に！

ウイットリーノ それはどうぞ訊ねないで置いて下さい！

ベアトリーチエ ほんとにさうよ、夢で見た事はお互にそつとして置いて訊ねない事にしませうよ。醒めてゐる時だけが人生で、誰にも共通なのは光だけなんだから。さあ、ルーゴーとかへ連れて行つて頂戴、ウイットリーノさん！

ウイットリーノ え、ベアトリーチエさん、御連れ致しませう、そこへ行つてあなたの爲めに家庭を作りませう——あなたが此頃此町で見た色々の夢の疲れを癒して、早く其夢を忘れて了ふ

機にね!

フランチェスコ そんならお前はすっかり承諾したのだね、ベアトリーチェ!

ベアトリーチェ もうさう云つたじやありませんか——ねえ、ウイットリーノさん!

フランチェスコ そんならおいで!

ベアトリーチェ 御寺へ?

フランチェスコ 先づ家へ入つて、お父さんの祝福を受けてから。

ウイットリーノ 親方はそんな事が分るでせうか?

フランチェスコ 子供の祈りできへ神様に通ずるんだもの、お父さんの祈だつて無意味ではある

まいよ。

ウイットリーノ ベアトリーチェさん、ほんとうに有難う! わたしは全く幸福です! わたしの心は今、あなたはわたしに取つて總べてだといふ感じで一杯です。無論わたしはよく知つて居ます——あなたは如何なる點から見ても只の職人風情の女房には出来て居ないといふ事を。然し此事もよく考へて見て下さい——あなたは只今の御言葉に依てあなたの全部を永久にわたしの手に與へて下さる事に成つたのです、それから、世界中にわたし程あなたを愛し得る人間

は断じて有りません、それからどうぞよく覚えてゐて下さい——萬一あなたがあなたの御言葉を忘れる様な事があつたら、わたしは決して生きては居りませんからね!

三人内へ入る。

四人の松明が舞臺の奥に現れる。其後より徐々に前方に歩み来るものは——ゴロニア公、延臣カルロ。

マニアニ、グイドツテイ、若きマルウエツチ及び他の數人の貴族達。

公 わしは此役目にはお前以上の適任者が有るまいと思つてゐるのだが。

マニアニ 殿様の其思召は實に身に餘る光榮とは存じながらも、尙失禮を顧みず御言葉に背くのは仔細が有るので御座います。——明日の如き大事の日にこそ我が君の御側離れず身命を抛ち度き望みは何物にも換へ難き強さでは御座いますが、然しそれとてもかうした仔細が無かつたら決して私の口から甲上ける様な差出がましい事は致さなかつたので御座いませう——と申しますのは、我々が出陣の留守中此町に居残る様にまるで運命が撰んで置いたかと思はれるばかりの打つて付けの御家來が有るので御座います。

公 お前はアンドレアの事を云つてゐるのだらう?

マニアニ 御言葉の通りで御座います。彼れは母親を失ひ、尙其上に妹は世にも不思議な狂亂に

陥つたと申す事で御座います。何とぞ御慈を以て私の代りに彼れを町に御残し置かれまする様に！

公 それは出来ぬ。わしは明日の如き日にはどうしてもあの男を自分の側から離す譯に行かないのだ。わしはお前よりもアンドレアの方が可愛いのだよ、マニアニ！と云つても氣を悪くしてはいけないよ、お前はわしにとつては誰よりも大切な人間なのだから！それから御前の云ふアンドレアの妹も決して一人ぼつちにしては置かぬ積だ。といふのは、アンドレアがわしの言葉に従ふならば、今日中に彼れの妹とその愛してゐる若者との結婚の式を挙げさせるだらう——母親の喪にも係はらず、といふよりもむしろ母親が死んだからこそさうさせるのだ。今の時は徒に悲哀に沈んで居る可き場合じや無いのだ——又若者達が死んだ、の爲に流す涙は割合に早く乾いて了ふものだからね。此縁はわし自身が進んで取持つてやらうと思ふのだ——之がわしの敬愛して止まないあのフィリップに君主らしい御慈悲を以てせずして、親友の如くに打解けて近付きに成り得る最上の方法だらうと思ふのだ。さあ、城へ歸らうよ！歓迎の爲とも送別の爲とも見える妙な宴を開く爲に呼集めた大勢の中に交つて其フィリップ。ロスキ—もわしを待つてゐる筈だ。之れから歸つてあの詩人に逢はう。(一行退々前方に進む。こゝはあ

つきの町じや無いかね？ マルウエツチ！

マルウエツチ 先刻のアツエリオ街で御座います！(微笑しながら) あの先刻——そしてあの美人が出てゐる家は丁度之れで御座います。

公 今日は町を歩きながら随分澤山の美人を見たが、矢張りあれ位のは見當らないね。

マルウエツチ 今日に限つて澤山の美人に御出逢ひ遊ばされましたのは決して偶然では御座いません。不思議な噂が町中に擴がりまして、其爲に自惚の強い女共が我先に御通行の道筋に押出したので御座います。

公 どんな噂が？

マルウエツチ 馬鹿らしい噂で御座います——殿様が町の娘達の中から第一等の美人を御撲び出しなされて今宵限りの……

公 ——「命」といふ積だらう、それでい、のだよ、實際其通りなんだからね。いや、それはいい思付きだ！何故わしはそんな考へが浮ばなかつたのだらう——殊に先刻此處であの素晴らしい美人を見つけたあの時に！然し却てそれでい、のだ！未だ残つてゐる之れからの時間をば、女達の浮氣な御情が與へてくれる歡樂を味つて過すとしやうよ。わしは實際之れ迄随分多

くの奇蹟と稱する物に出逢つた事もあるが、所謂戀と稱する奇蹟にも是非一度御目にかゝつて見度いものだと思ふものだ。わしは快樂の欲求と享樂とその飽滿の味は已に充分経験して来たが、未だ曾て「戀」といふ物の奇蹟にめぐり逢つた事が無いのだ！ 御前は何か笑つてゐるね？ マルウエツチ！

マルウエツチ 御許し下さいまし、殿様！

公 ほんとにをかしな奴だなあ、御前は！ わしには分つてゐるよ、お前はあのビザンツの娘の事を思出してゐるのだらう——お前に秋波を送つた爲にわしから嚴刑に處せられたあの娘の事を！ 然し若しわしが心からあの娘に戀したのであつたなら、今日海底に朽ち果てゝゐるのはあの娘の身體では無くて、お前の身體であつたらうよ！

マルウエツチ 私が只今考へて居りましたのは、あの娘の事では御座いません、殿様の爲にその國を棄て、その夫を棄て、遂には此世をも棄て去つた女の事を思ひ出したので御座いました。

公 あの女が此世を棄て去つたのは非常に多くの物を犠牲にしてつた事に成るとでも思つてゐるらしいね。然しわしは決してあの女の死を憐み悼まうとは思はないよ。空虚になつた心を抱いて、色も香も無く褪せ果てた生活に再び戻つて行く様な事をしなかつたのが、せめてものあ

の女の幸福であつたと思つてゐるのだ、あの女はともかく自分の幸福を最後の一滴迄味ひ盡したのだからね。わしは如何なる人間もすべてあの女のように死す可き時に死す可きだと思ふ、そして我々は人の墓の前に佇んでもそれ程の哀愁を感じずしてすむだらうと思ふのだ——丁度あの女の場合と同じ様にね。さあ、城へ歸らうよ、諸君！

コジニ (右手より登場。)

公 コジニ！ 之れは偶然のめぐりあひだらうか？

コジニ いゝえ、殿様、私はわざ／＼御跡を追ふて参りましたので。

公 お前フイリツボに逢つて来たのか？

コジニ はい、逢つて参りました。

公 あの男は今何處に居るのだ？ そして返事は？

コジニ 殿様、殆ど何と申上げて宜しいか……！

公 そんならあの男は來度く無いとでも云ふのかい？

コジニ 左様で御座います！

公 (發笑しながら) 厭だつて？ (家臣達に) お前達聞いたかい？ どうして來られないのだ？

あの男はその理由をどう云つてゐるのだ？

コジニ 先づ眞先に奇怪極まる事から申上げますれば、あの男は自分はまだ詩人などといふ物では無いと申すので御座います。

公 もう詩人では無いつて？

コジニ はい、詩人を招かうといふ思召のところへ自分の様な者が罷出たら、嘔吐者に成るであらうと、かう申すので御座います。

公 まるで自分が経験し來つた過去といふ物を自分の勝手氣ま、に吹消して丁ふ事も出来る様な云草だね！ さうは行くもので無いよ！ たとひ目の見えなくなつた人間でも矢張り見る事は出来るのだからね——その底に深く灼付けられた物象の色や形が消え去らぬ以上は！ 然るにあのロスキーは、おれはもう詩人じゃ無いと云つてゐる！ もつと詳しく聞かせておくれ、お前だつてそんな返答に満足しておめく引退る様な男では無からうと思ふんだが。

コジニ 勿論で御座います、殿様！ 然し如何に申しましたが、それ以外の返答が無いので御座います。何しろ先生非常に昂奮してゐるらしいので御座います、そして丁度そこに居合せた彼れの親友二人の熱心な忠言に對しても、まるで怒つてでも居る様に、口を噤んでゐるので御座

います。

公 そんならアンドレアもそこに居合せたのかい？

コジニ いゝえ、他の友達で御座いました、テレジーナとの婚約はどうも破れて了つたらしいので御座います。彼れの友達の申す所に依りますと、あの男はどうやら他の娘を愛して居る様子で御座います。

公 誰だらう？

コジニ それは二人の友達も知つてゐないので御座います。

公 アンドレアにきいたらその事情はもつと詳しく分る事だらうと思ふが。然しあのファイリツボがわしの招待を全然拒絶し去つたといふ事は、單にそれだけの事に止まらず、まるで我々に對して不機嫌に顔を反向ける「運命」の侮辱の様に身に堪へる。いや、それ以上だ！ 自分の親友に裏切られた様な感じだ！ わしは親友を愛すると丁度同じ氣持であの男を愛して居たのだからね——彼れがその友達の口を通してわしの心に囁いたあの美しい詩の言葉は——（怪む様に自ら問ひながら）——もう嘘に成つた、といふのかい？ 然しあの言葉の中には實に類無き眞實の響が籠つて居た、わしをして未だ會て感じた事の無かつた物をも信ぜしめる程の力が漲つ

て居た。他人の熱情からも、自分の享樂からも、又は踏こたへた危険に依ても、我が爲めに棄てられた命に依ても、如何なる生の充實からも、わしの心には響いて來た事の無かつた或物があの詩人の言葉からのみ響いて來たのだ！ わしは實際彼れに逢つて見度かつた——わしをしてあれ程までに……然しあの言葉は嘘だつたのだといふ……どうも最後の今夜は豫定とは大分違つた物に成り相だね。さあ、行かう、諸君！

マニアニ 殿様、我々の運命がたとひ如何様に成りませうとも、最後の夜といふ様な事を申すのは未だく早過ぎるかと思つて存じます。(熱心に) 我が君、ボロニアの城壁は昔に變らず堅固に聳えて居ります、食料も未だ七日間は保つ筈で御座います。

公 七日は措いてたとひ七年間保つにしたところで、どうなるものか、マニアニ！ 只遠い碧空に依てのみ限られて居る様な無限の自由を樂んでゐた昨日とは打つて變つて、今日からは窮窟な壁の圍みの中に押籠められた身の上だ。わしは到底一日も堪へられない、よしや再び自由の身に歸られ相な希望の光がほの見えて居やうとも堪へられない——況んや今日はそんな光の一筋さへも認められないのだ！

マニアニ 然し、殿様、ナポリとシシリアの君達はよもや此頃結んだあの同盟の約束を反古にする様な事は有るまいと存じます。

る様な事は有るまいと存じます。

公 お前は有るまいと思つてるのかい？ お前はマリスコツタイの家を捜して発見したあの書類を未だ見ないのかい？ あれを見せてやれ、コジニ！

コジニ 殿様、私は随分綿密に取調べまして御座いますが、謀叛人奴等はあのナポリをもチエザールの仲間へ引入れやうと企らむらしい形迹が見えるので御座います、然し其計畫の成功しらしい迹は何處にも見えないので御座います。

公 さうだ！ わしは今日初めてそれが分つたのだ！ それから、我々が未だ事件の真相に徹し得ない時既に、わしは何かしらそんな風の豫感を心の隅に持つて居たのだ——已に二ヶ月前、我々がナポリでアンジュー公の饗宴に連つて居たあの時にね。ローマで法王が偽善の腕を延べて我々を迎へたあの時に、わしは已に何かしらあのボルジアの脅威を感じて居たのとよく似た事實なのだ。あのローマの送別宴では我々を暗殺しやうといふ計畫が熟して居たのだからね、だからわしは未だ宴會の始まらない中に暇を告げて席を立つたのだ。

マニアニ ナポリの己に敵方に加擔した事は事實としても、未だ一つ思案の餘地が残つて居るかと思つて存じます。ボルジアの奴は、殿様がうまく御忍びでボロニアの町へ御歸りなされたといふ事

は未だ夢にも思つてゐないので御座います。矢張りマリスコツテイの奴が此處を支配してゐる積りで居るので御座います。然し今や彼等の計畫は齟齬し、ボロニアは再びもとの君主を戴いた以上、事に依つてはチエザールも考へを改めて……

公 折角こゝまで押寄せて来たのに、おめく引返すだらうとでもいふのかい？

マニアニ さういふ譯でも御座いませんが！ 然し何等かの條件を提出して協議を開始するといふ様な事に……

公 條件？ もうそんな香気な物を持出す餘地は無いのだよ！

マニアニ 然し乍ら、殿様！ 若し彼れの要求する所は、將來ボロニアに於ても他の都市と同じく法王の使節を置く事に同意するといふ保證だけであるとなりましたなら？

公 そんな事も有り得るだらうよ、それから又それ以上の事をも何か云出すかも知れないよ！

警へばこんな風にね——ボルジアの奴、急速に條約調印の運びをし度いからなど、云つてわしを陣營に呼寄せるだらう、それから以前にもよくやつた手だが、新同盟の「確實な」調印をする爲にと稱して一緒にローマまで連れて行くだらう、そして丁度あのウエロナの従兄の様に、ローマの城門前で最も確實に縊り殺される位が落ちだらうよ。そんな事は勿論想像に過ぎない

のだが、これだけは間違の無い確實な事だ——わしとチエザール・ボルジアとは俱に天を戴く事の出来ないかたき同士だ、然も彼奴の方が此わしよりも強いと來てる。已にチエザールの足下に蹂躪せられ終つた此奴隷的のイタリーの真中に、我がボロニアのみが孤立して獨立を續けて行くといふ事は最早不可能だ。然し征服せられた町に於ても市民は相變らず生きて行く事は出来る——最も安全に、わしが早く去つて了へば了ふ程それだけ早く！ 来る可き物は遂に來らなければならぬ、然し、生き長らへて此恥を見るを欲しない者をも無理にそれ迄生きて居ると強ひる事は、何物にも出来る筈が無いのだ！

彼等が徐々に前方に進まんとする時、ナルデイの家のドア開いて、ウイットリノ、ベアトリーチエ及び二人の後からフランチェスコ現れる。彼等が丁度往來に出た時、松明が進んで來て、公の一行が赤黒く照し出される。公ベアトリーチエを見付けて一歩退く。

公 あの女だ！

マルウエツチ 左様で御座います、殿様、先刻の女で御座います。

公 (ベアトリーチエの側に歩み寄つて) そんなに急いで行つて了つてはいけないよ、美しい娘さん！ お前は多分お前の君主の挨拶を輕蔑する様な事は有るまいと思ふんだが。

フランチェスコ これに代つてこれの兄が謹んで殿様に敬意を表し奉ります。(ペアトリーチエとウ
イツトリーノに) さあ、行かう!

公 それはいけない! わしの挨拶の返答はお前から直接に聞き度いのだ、美しい娘さん!

ペアトリーチエ (じつと公を見詰めて、それから頭を垂れる。)

公 わしはそんな馬鹿鄭重な御辭儀などを要求して居る譯では無いのだ! わしはむしろわしの
如何なる人間であるかをお前に忘れて了つて貰ひ度いのだ! (従者等に) あんまり仰々しい、
お前達は行つて了つた方が宜しい! わしは笏を持つて町中を乗廻したとかいふビザの殿様の
眞似はし度く無いんだ! わしは決してわしの高い位が必要だとは思はない!—お前に……だ
がお前は何といふ名前だね?

ペアトリーチエ ペアトリーチエと申します。

公 まるで音楽の様な聲だ! わしはお前に愛し、貰ひ度いのだ、ペアトリーチエ!

フランチェスコ 殿様、こゝに居りまするは妹の夫と成る可き男で御座います、そして私共は之
れから御寺へ参るところで御座います。

公 御寺へ? 何をしに? 結婚式でも挙げやうといふのかい?

フランチェスコ 御言葉通りの次第で御座います。

公 さういふ譯なら行つたがよい。わしは他人の物に軽々しく手を出す様な所存は毫頭無いのだ。
許してくれ、ペアトリーチエとやら、それからお前達も……(ペアトリーチエ眞直に公を見詰めた
るまゝ動かす。) 何故お前はそんなにわしを見るのだから、そして行つて了は無いのだ?

フランチェスコ さあおいで、ペアトリーチエ!

ペアトリーチエじつと佇みたるまゝ。

公 どうしたといふのだ? (フランチェスコに) そんならお前は妹の身を保護せんが爲にわしに出
鱈目の嘘を吐いたのかい——どうだい? 殆どそんな風に見えるよ! 何故なればペアトリー
チエはわしが何を云つても黙り込んで居る——此若者もさうだ!

フランチェスコ 此男は殿様の御目通りに出た爲に顛へて物が云へないので御座います。然し私
は眞實有りのまゝを申上げた事を誓ひます、不肖乍ら婚約など、いふ下手な口實は構へずとも、
兄として如何なる人間に對しても妹の身を完全に護る位の心得は有る積で御座いますから。
公 (彼れをじつと見る。間。) お前はそんなら一體何者だ?

フランチェスコ フランチェスコ・ナルデイと申します、今朝以來殿様の旗下に馳せ参じて居る

一人で御座います。

公 誰がお前を軍隊へ引入れたのだ？

フランチェスコ 私は自分から進んで志願致したので御座います。

公 誰の隊に？

フランチェスコ フアントウツチ伯の部下で御座います。

公(グイドツチイに) 志願兵はウアローリの部下に属する事にしたのでは無かつたのか？

グイドツチイ 左様で御座います。

フランチェスコ 殿様、私はフアントウツチ伯の下に属する事を志望したので御座います。

公 式は急いで擧げなければいけないよ、お前が介添人といふ譯なら！ (ウイットリーノに) そし

てお前は——お前は誰か？

ウイットリーノ 私はウイットリーノ・モナルデイと申します、そして此娘は私の許嫁いひよめで御座います。

公 それは知つてる。

ウイットリーノ そして私の幸福の全部で御座います。

公 (嫉妬の動作を以て) お前はまるで乞食の如くに此女の愛を求めて居る様に聞えるでは無いか？

「私の幸福の全部」——それを有難く頂戴して、さつさと行つたらいいだらう！

フランチェスコ さあおいで、ベアトリーチエ！

ウイットリーノ (懇願する様に) ベアトリーチエさん、参りませう！

公 (將に過行かんとして、今一度振返る、そしてベアトリーチエが相變らず身動きもせずに行んで居るのを見る。) 行け——とわしは云つたのだよ！ それではあんまり柔し過ぎるのかい？ わしは強く

命令しなければならぬのだらうか？ 行け、美しいベアトリーチエ！ さあ？ お前は矢張

り突立つて居るのかい？ わしはお前を止め度がつてゐると思つてゐるのかい？ お前が

歩き出したら、わしは呼戻すだらうとも思つてゐるのかい？ わしは決してお前の後姿を追

かける様な眞似はしやしないよ！ わしは只お前の許嫁いひよめの男と兄の事を思つて、お前に行けと

云つたのだ——わしは之れ迄出逢つた如何なる女からも之れ程強い魅力を感じた覚えが無いと

いふ事はほんとうの事だが！

ナルデイとその妻とは彼等の店より、ロジーナは往來より登場。

フランチェスコ おいで、ベアトリーチエ！

ウイットリーノ ベアトリーチエさん!

公 何故お前はそんなに釘付けにされた様に突立つてるんだ? わしは何かそんな風の事でも云つたのだらうか? わしはお前を脅迫したのだらうか?——其他の人達をも? 誰かお前の手を塞いで居るとでもいふのかい? (家来達に) みんな道を開けてやれ! さあ、行け、ベアトリーチエ! 然し決してまご／＼しないで、歩一歩と——途中で立止つたり振返つたりしてはいけないよ、そして出来るだけ早くわしの目から消え失せてくれ! お前は此處に止まつてゐるのに、わしはお前を追拂つて了ひ、お前の心はわしに憧れてゐるのに、むざ／＼お前を他人に渡して了ひ、お前はわしの抱擁を熱望して居るのに、わしはお前を抱いてもやらない! 全くそれは馬鹿氣切つた話だ、そして此機会を逸しては最早やそんな愚を後悔してゐる暇すら無い場合だ。さあ、わしと一緒に居る間に、ベアトリーチエ!

フランチェスコ (鞭の柄に手をかけて) 殿様!

ウイットリーノ (跪かうとする。)

フランチェスコ (それを制する。)

公 (ベアトリーチエに) お前の望とわしの考とが一致した以上誰も苦情を云ふ者は無い筈だ。然し

若し此大膽な行爲に依つて他人の権利を侵す様な事に成るなら、わしは出来得る限りの力を盡してそれを償ひ度いと思ふのだ。わしは此ポロニアの町には此男をウイットリーノを指しながら喜んで夫にして、然もお前よりも遙に善い女房に成れる女が幾らも有るだらうと思ふ。此男はどれでも好きな女を撰取りしたが宜しい! (其間に人々追々集つて来る。) 何故お前はぐ／＼してゐるのだ? 之れはお前の両親なのかい? わしはお前達に家と屋敷とを與へやう、何處でも勝手に撰んだがい、生きてゐる間は自由に住んでゐていゝのだ。之れはお前の姉なのか? わしは今日中に立派な仕度を整へて、こゝにゐる貴族の一人に片付けてやらう。フランチェスコの其感すべき勇氣に至つてはわしは最もよく之れを利用しやうと思ふ、わしの爲にも又彼れの爲にもなる様に。——わしは彼れをサラゴツサの門を堅めてゐる一隊の指揮官に任じやう。然しベアトリーチエ、お前には何をやつたものだらう? わしは女達の氣に入り何れも貴重品も色々土産に持つて歸つた。それらは残らずお前に贈らうよ——ダイヤモンドの寶石も織物も眞球の頸飾も一切皆お前の物だ、尙おまけに此上も無く貴重なる面紗も——それは此國の女共などはたとひ公妃と雖も曾て見た事すら無い様な不思議な美さを持つた面紗だ。何しろベルガマムの王が自ら撰んだ妃の結納としてそれを——そして唯それのみを贈つたといふ程の品物だからね。

わしは唯今宵一夜の報酬としてそれをお前に贈らうといふのだよ。然しそれ丈では未だ足りない。若し萬一お前がわしの息子を生んでくれる様な事が有つたら、思掛無き幸運の許す限に於て、わしの軍隊が征服する第一の町を其子に與へる事にして置かう。そして實際わしは眼を凝して謎の如き魅力に充てるお前の美しさの中に見入れば見入る程、此言葉はそれ程大膽な大言壯語とも思はれなく成るのだ、何故なれば、お前の温い抱擁から身を躍らして奮進したら、如何なる強敵と戦つても、必ずや勝利の月桂冠を戴く事が出来相な氣がするのだ！ (男女の市民娼等の人集り益々甚だしく、中にはカツホニ、バジニ、ベンノツツオー等も交つてゐる。沈黙。ペアトリーチエは相變らず不動の姿勢を崩さず。) さあ、ペアトリーチエ、わしはお前の返答を待つて居るのだよ！

ペアトリーチエ沈黙。人々息を凝して彼女の答へを待つ。

フランチェスコ 賢明なる殿様は此沈黙の意味を明に御賢察下される事と存じます。退いて下さい、皆さん！ (ペアトリーチエとウイットリーノに) さあ、おいで、坊さんが待つて居られるよ。

公 (皆々だまつて居る故) 退け！ (人々退く) それからペアトリーチエ、お前はわしが今お前の様な尊い女を手に入れる爲にあんなに詰らない物ばかりを提供した事を許してくれ！ あれは決

してお前を輕蔑した爲でも無い、又わしの根性がけちな爲だとも思つてくれるな！ わしの持つて居る品物などはお前の様な女に對しては實に貧弱な物であつたといふ事を今こそわしは悟つたのだ！

ペアトリーチエ 殿様！ (ペアトリーチエが初めて口を開いたので人々動揺す。) 貧弱なのでは御座いません、只正當な物で無かつたといふだけで御座います！

公 (新たな希望を以て、烈しく) そんなら何なりとお前の欲しい物を望んでおくれ！ 多分わしの持つて居る物だらう！

ペアトリーチエ 無論御持ちになつてゐらつしやる物で御座います。私の欲しいと申しますのは只、明日の朝、あれは賣女だと云つてみんなに後指をさ、れない様にして頂き度いといふ事だけなので御座います！

公 たとひ一夜なりと、君主たる者の腕に抱かれた女は、よしや以前には馬鹿者達の慰物であつたにしても、最早「賣女」では無いのだ！ そしてお前は、そんな風にお前を輕蔑する者が有るだらうと思つてゐるのかい？

ペアトリーチエ たとひ大びらには申しませんが、陰口を利く事は必定で御座います。

公—それがどうしたといふのだ？

ベアトリーチエ—たとひそんな者をば獄門に御掛け下さいましても、事實は矢張り事實に相違無いので御座います、私が身を賣つたと申す事は——高い價で！左様で御座いますから、殿様、何の役にも立ちませぬ私への贈物などは一切御止め遊ばされて、私を殿様の妻として御連れを願はしう存じます！

公—何——妻に、妃きさきにしろといふのか？（家來達に振向いて）お前達は此娘の云ふ事をどう思ふね？

マニアニ—殿様は如何遊ばされる思めしで御座いまするか？
公—お前ならどうするね？

マニアニ—此大膽不敵な女奴をキツと罰してやります、そして此女と無禮な兄とを直様牢屋に打込みます。

公（ガイドツタイに）それからお前は？

ガイドツタイ—殿様、私は刑罰といふ物は須く他の人間が之れを見て以て快と爲す様な物で無ければならないと存じます。それで私は、宜しく此女を廣場に引出してその額と頸筋と胸とに灼

印を押付けたがい、と存するので御座います！

公（マルウエツチに）それからお前の意見は？

マルウエツチ—若し御許し下されますならば、此女を先づ最初に御城へ御連れになつて存分に御慰み遊ばされました上に、更に女郎屋に叩き込んで無数の男の慰み物となし、扱て最後に此花舞殿と目出度く華燭の典を擧げさせる——といふ事に致し度いものだと思存じます。

コジニ—私は確信致します——賢明な殿様は、こんな者共から笑つて目を御そむけになつて、其まゝ御立去りに相成るで御座いませう！

公—お前聞いたらう、ベアトリーチエ、此人達はお前の望みをそれ程飛んでも無い不埒だと思つて居るのだよ！然しわしは思つて居る——此人達は目も無く耳も無いのだらう、それで無ければ早速ベアトリーチエの前に跪いて、あんな無分別な言葉をどうか忘れて了つてくれるやうにと祈らなければならぬ筈なんだから！お前ももう其劔の柄から手を離してもい、だらうフランチェスコ！ベアトリーチエ、お前の額にキッスをさしておくれ！わしはお前の望通りにお前をわしの妻にしてやらう！

ベアトリーチエ彼れに顔を差出して彼れのキッスを受ける。人々の間に非常の動搖。

ウイットリーノ　これはみんなほんとうの事だらうか？　おれは夢を見てるんじや無いだらうか？

フランチェスコ　いや、ウイットリーノ君、夢を見てるのじや無いよ。

ウイットリーノ　ベアトリーチェさん！

ベアトリーチェ　（彼れの方に振向いて、赤の他人を見る様に冷かに彼れの顔を見てゐる。）

公　さあ来い、ベアトリーチェ！

ベアトリーチェ　い、え、殿様、私は首尾よく凱旋遊ばされますまで、こゝで御待ち致す積で御座います！

公　そんならお前は今之れから直ぐにわしの許嫁として共に手を携へて城へは行かないのかい？
ベアトリーチェ　それは出来ませぬ。ボロニア公妃として無ければ私は決してボロニア公の御殿の敷居は踏がぬ決心で御座います。

公　そんなら、さういふ事に取計はう——お前は今日ボロニア公妃として入城するのだ！（勅諭益々加ふる。）
コジニ！　ベトロンベトロンの僧正へ駈付け付けて早く準備を整へさせろ！　一時間内にボロニア公リオナルド・ペンテウオリオがベアトリーチェと手を携へて結婚式の神壇の前に現れ

るであらうから！（コジニ退場。他の人々にお前達は城へ急ぎ歸つて祝宴の用意を致せ！（数人去る。）それからお前達は町中を駈廻れ！　わしはボロニア中の貴族を此祝宴に招く積だ。けれどよく覚えて居れ——今日許りは美しい者のみが貴族だ、家柄なんぞはどうでもかまはないのだ！　睡つてゐる者も目を覺す程に高らかにふれ廻れ、鎖した扉は叩いて直ぐに開かせろ、そして寢ぼけ眼で高貴な使者の姿を見てびつくりする者があつたらかう叫べ——ボロニア公がお前達の姉妹中の第一等の美人と擧げる婚禮へお前達を招待するのだ！　誰でも来い——戀人や夫の胸に睡つてゐる者も、汚れ無き床に一人淋しく睡つてゐる純き者も、抑へ難き情慾に驅られて夜毎々々に新しい男の胸から胸へと走る者も、誰でもかまはないから残らず出て来い——只美しい者でありさへすればいいのだ！　美しい女は誰でも歓迎するのだ！（其間に又数人の者去る。マニアニとマルウエッチに）お前達二人はこゝに残つてゐるのだ！　お前達は此家とお前達の君主の許嫁とを保護して居なければならぬのだ！（他の者に）それからお前達はわしと一緒に城へ来い！　一時間内にわしは花嫁へ結納の品を持つて来るよ、ベアトリーチェ！　そしてお前はボロニアの御妃様らしく着飾つて、わしと手を携へて神と大僧正との前に現れるのだ！

公騎士達及び松明持と共に去る。他の者達非常な昂奮の中に残る。ベアトリーチエは微笑を含んだまま身動きもせずに佇む。

バジニ　そうれ見ろ——云はない事じや無い！　だが待てよ——おれは一體神様に不思議な力を授けられたのだらうか——おれの出鱈目がそっくり其ま、ほん物に成つちまふなんて！

ナルデイの妻（ベアトリーチエに）わたしの子供、幸福な子供！　そしてわたし達は何といふ幸福な親達だらう！　（ナルデイに）お前さん、どんな事が始まつたか分らないのかい？　こんなたまたけた出来事を見てもお前さんは未だ正氣に歸れないのかい？　あ、神様々々！

ナルデイ　うまくやつたな、子供達！　だが、あの殿様の眞似をした綺麗な小仲はどこに奴だ

マニアニ（マルウエツチに）これは確に妖魔の業ですよ！　氣を付けなさいといけませんよ——飛んだ事になるかも知れませんがね！

マルウエツチ　あ、あの女は美しい——美しい！　まあ、よく御覽なさい！

マニアニ　我々はよく用心してかゝりませう！

ナルデイの妻　おいで、ベアトリーチエ、おいで！　髪を解いて上げやう、ふさ／＼と地面に垂

れる様にね。さあおいでなさい、ボロニアの御妃様！

バジニ　そんなに有頂天に成つてゐる場合じやありませんぜ！　殿様の氣紛れも御情も、總べては殿様が生きてゐらつしやる間の事であ、そして明晩はもうボルジアが此處の殿様ですからね！

ナルデイの妻　黙つてゐなさいよ、黙らないと牢へ打込まれるよ！　お前さんは殿様の先刻の御言葉を聞かなかつたのかい？——ベアトリーチエの腕の中で殿様は英雄に成る、勝利者に成るとおつしやるんだ！　さあおいで、ベアトリーチエ！

此間始終凍付いた様に突立つてゐたロジナは此時深い憎悪に燃える目付をベアトリーチエに投げる。

ナルデイ（店へ入つてから聲だけ聞えて来る。）眞暗だ／＼！　灯あかりを持つて来ないか！

ナルデイの妻（一人の松明持に）お前さん、ボロニア公妃殿下の親御達の御歩きになる途を照しておくれ！　さあ、先においで！

松明持店の中へ入る。

ナルデイ 誰だい、こんな隅っこに倚か、つて居るのは？ 立たないか？ 一體誰だい？ 其松明を此方へ！ あ、ウイットリーノだ！ 起たないか？ お前そんなに疲れてるのかい？

此間氣抜けがした様に突立つてゐたフランチェスコ氣が付いて店へ入る。

マニアニ 何といふ人達だらう！ あのお爺さんは？ どうしても一通りや二通りの沙汰では無いて！

フランチェスコ (店から出て来て、ベアトリーチエを店へ連れて行かうとするナルデイの妻を引止める。手に何かかくし持つてゐる。) 入るな、入るな、ベアトリーチエ！ 血の運りが止つて了ふかも知れないから！

ナルデイの妻 何か始まつたのかい？

ロジーナ (急いで店の中へ飛込む。) ウイットリーノだわ！ 隅の方に氣絶して倒れてるわ！

フランチェスコ (手に持つてゐた短剣を見せて) 之れがウイットリーノの胸を突いたんだ——うまく急所をね！

マニアニ 何が始まつたんだ？

ロジーナ (ベアトリーチエに對する異常な憎悪を以て叫びながら) ウイットリーノは死んだ！

フランチェスコ ベアトリーチエ、可哀相な妹！

ベアトリーチエ わたし可哀相じや無いのよ、兄さん、わたしそんな風に云つたら嘘に成つてふわ！

フランチェスコ (じつと彼女を見詰める、彼女は平氣で兄の目に見入る。) 僕は今夜の婚禮には呼ばれて行かないよ！ こんな最初から血を流す様な恐しい婚禮の話は聞いた事も無い！ 可哀相なウイットリーノは死んで了つた、そして僕があんなに可愛がつてゐた妹は死んだよりも悪い物に成つて了つた！ 若し死んだのであつたら——あとから別れの言葉を囁いて、閉ぢた臉にキッスをしてやる事も出来たらう！ 然しベアトリーチエ、お前に對しては僕はもうどうする事も出来ない——お前にはもう何んにも云ひ度くも無い、キッスもしてやり度く無い！ 僕はお前の側から逃出さなければならぬ、それ程お前には縁の無い物に成つて了つたのだ！ (急いで去る。)

(幕)

第三幕

フィリップ・ロスキの家の廣間。右手の奥に側房、風の小室ありて、三級の階段に依りて通じ、半ば掲げられたる暗紅色の重き帳に依て仕切られる。正面は閉ざれた大きな窓から多くの塔を望む。左手前方には露臺に通ずる扉開かれてある。室の中央よりもやゝ左手寄りにテーブル掛を蔽へるやゝ大きな卓、上に燃下りたる五本の蠟燭立てる燭臺二基。卓の上には食事の残り、その周圍には數脚の椅子。窓の近くにも一の小卓。

イサベラは卓の側の椅子に座し、腕をだらりと垂れて睡つて居る。ルクレチアは側房に通ずる階段の上段に頭をもたせて横ばつて居る。第一のヴァイオリン弾は露臺に通ずるドアの敷居に、第二のそれは此ドアに近い椅子の上に睡つて居る。ラウテ(マンドリンに似た樂器)の樂人も頭を卓に伏せて椅子に睡る。笛吹は舞臺の前面卓の前に身體を投出して居る。

フィリップが其時側房の階段を降りて来て、徐々に室の前方へ歩を運ぶ。

フィリップ みんなよく睡つてゐるな——女達も樂師達も！ 床の上には沈黙の樂器、そこらには

空の盃が投出してあるが、その底は未だ乾いてもゐない——燃え盡した歡樂の容器！ あのサタンと魔の指輪の音嘶の様に、世界の一切の快樂は此一時間の中に閉籠められたものでは無いだらうか？ 火の様な酒の酔と、音樂と、其上に向も柔かな腕の抱擁——それだけの物を享樂して下へばもう何も思残す物も無い！ 早くたつた一人切りに成つて、もうおしまひに成つた、とホッと溜息を吐き度いといふ憧れの他にはもう何んにも残つては居ない！ 今度の事はもと／＼何等の意味も無しに始まつた事なのだが、之れだけの享樂を盡した上は、もうおれの出かけて行くのを止め得る物は一つも無いわ！ (暫く考へた後) 然し唯一つ！ 最初には殆ど耳にも入らなかつたあの一言がおれの心の中にだん／＼高鳴りして来る——まるで希望其物がおれの心の絃をかき鳴してもする様に。若しあの言葉がほん物に成つたら、そしてあの女が再びおれの懷に戻つて來たら、そしてさつきあの女が云つた様に、此處でおれと一所に死なうと云出したら！ さうなつたら、之れこそ——そして之れだけがほんとうに女の心を自分の物にしたといふものだ！ (間) だが之れはおれの臆病の新しい着物だらうか？ そんな着物なんぞ脱ぎ棄て、了へ！ さあ今度こそおれの臆病自身が素裸に成つた、そして嘲つてゐる——お前は獨で出かけて行く勇氣が無いのだらう、此期に及んでもまだベアトリーチエに未練が残つてゐるのだ

らう、そして子供がその人形を寢床へまで持つて行かねば気がすまない様に、お前はあの女を自分と共に虚無の境へ迄連れて行かうといふのだらう——お前をも、自分自身をも、それから其虚無といふ事をも何んにも知らないあの小娘を！（間。思案の後目が覺めた様に叫ぶ。）起きろ！もう夜が更けた！

第二のヴァイオリン弾（棒の様に椅子から突立上るが、直ぐに又へなくになる。）

笛吹（床の上に寝そべつたまゝ彼れの笛を捜して一息吹く。）

ラウテの樂師（尙睡り續けて居る。）

第一のヴァイオリン弾（伸びをしてから弓を取つて、開始の相圖でもする様に床を打つ。）さあ始めた！（起上る。）どうぞ御免を——ほんの一寸うたゝ寝を致しましたばかりで！

ファイリツボ ほんの一寸だつて？ 何時間だか睡つた辭に！ もう眞夜中過ぎだよ！

第一のヴァイオリン弾（弓でラウテの樂師の頭に觸れる。）起きろく！

總べての樂師達起上つて露臺に集合する、然し彼等の姿は未だドーアから見える。

イサベラ（目を覺し、ほゝえんで、目を見開いてファイリツボを見る。）わたしの美しいファイリツボ！

ファイリツボ よく睡つただらうね、そしていゝ夢を見ただらうね？

イサベラ 然し何も彼も夢では無かつたのか知ら、ねえ、ファイリツボ！

ファイリツボ 僕には分らないね！（樂師達奏し始める。）もういゝよ！ もう宴會は終つたのだつて云つたじや無いか！ お前達はもう歸つてもいゝのだよ——誰も彼れもみんな残らずの事だよ！（さう云ひながらイサベラの方へ一寸目を遣り、それから、もう目が醒めて側房の階段に腰かけて彼れを見詰めて居るルクレチアの方を見る。）

イサベラ あなたわたし達を追出さうといふの？ しかもこんな眞夜中に？ あなたは未だそんな若さで、こんなに早く參つて了つたといふの？

そして一體今時わたし達に何處へ行けといふの？

樂師達（出かける用意をしながら）左様なら、旦那様！ どうも有難う御座いました！ 左様なら！

左様なら！

ファイリツボ お前達は屹度知つて居るだらう——未だ何處かで騒いで居る處があるだらう。そこへ

此二人を連れて行つておくれ！

イサベラ なるべく元氣が善くつて面白相な人達の集つて居る所へね！ 昨日戰場から歸つて來たばかりで明日又出陣するのだと云つた様な若者達の集つて居る所へね！ わたしいやにけち臭

い男は大嫌ひさ！ 明日の朝はもう討死しなければならぬ様な男達の所へ連れて行つておくれ——そんな人達は屹度恥も外聞も忘れて歡樂を求めぬものだからね！

ファイリツポ 今夜あたりは何處へ行つてもそんな連中ばかりさ！

イサベラ わたし實はあなただつてそんな連中の一人だらうと思つて居たのよ！

ルクレチア (側へ来て) 何故あなたはみんなを追拂つて了ふのかわたしにはちやんと分つてよ！

ファイリツポ 何故だい？

ルクレチア わたしだけあなたのお側に残して置かうといふのでせう？

ファイリツポ 何を云つてるんだ！ お前もみんなと一所に御歸りよ！

ルクレチア いやよ、ファイリツポ！ 冗談でせう！

ファイリツポ 眞面目だよ！ お前は どうでもいゝが、之れだけは大眞面目だよ！

ルクレチア あなたは決して嘘を吐く様な男では無いわね——そしてあなたの御目は慥に「ルクレチア、お前はおれの側に居ておくれ！」と云つてたわ！

ファイリツポ 何時僕の目がそんな事を云つたといふの？

ルクレチア 一時間程前、ほら、あなたの御目がわたしの目の中にじつと見入つたあの時に。

ファイリツポ さうだつたかしら？ 僕はもう忘れて了つた！ (キツパリと振向く。)

ルクレチア (悲し相に) あなた、まさかわたしを追出しはなさないでせうね？

ファイリツポ 追出すよ！

ルクレチア 何處へ？

ファイリツポ 馬鹿な事を訊いてる！ 行き度い所へ何處へでも行くがいゝさ！

ルクレチア ファイリツポ、わたし之れでもあなたに對して他の女よりは實が有る積だわ！

ファイリツポ へえ——何時からそんなに僕の事を思つてくれるの？

ルクレチア あなたに初めて御目にかつたあの瞬間からよ！ 先づ此人を歸らして下さいな、

そしたらわたしどんなに實が有るか、屹度御目にかけますから！

ファイリツポ 一晩だけの「實」だらう！ 一瞬間だけの「實」だらう！

ルクレチア たとひ一晩だけの契でも、永久の眞實を保つて見せるわ！ (懐から小さな壺を取出す。)

イサベラ (樂師達に) わたしお前さん達をみんなフロールニスへ連れて歸るわ、そして自宅の御

抱への樂隊にして上げるわ！ (ルクレチアに振向いて) わたしフラウイアさんの持つてる様なあ

んな樂隊が欲しいのよ！ ルクレチア、あなた——あなたはこゝに残つてる？ わたし達はも

う行くわ!

フィリツボ 一寸待つておくれ、ルクレチアも一緒に行くんだから!

ルクレチア (祈る様に) フィリツボ、どうぞあなたの御側に置いて頂戴! 御覧なさい——わたしどうするか! (壺から盃に二三滴たらし。)

フィリツボ 惚薬かい? お前はまさかそんな物の力を借りて男を征服して喜ぶ様な女だらうとは思はなかつたよ!

ルクレチア 惚薬ならこつそり用ゐるわ。これは別の薬よ!

フィリツボ (真面目になつて) そしてそれをどうしやうといふんだい?

ルクレチア 今夜一晩だけあなたの御側に置いて下すつたら、わたし夜明けと同時に之れを呑んでしまふわ——そしたらいくらあなただつてわたしの實が分るでせう。

フィリツボ (彼女を見て、其薬を床の上にかけて了はうとする様に盃の方へ手を延す。丁度其時庭から)

エルコレの聲 フィリツボ君!

イサベラ あなたを呼んでるわ、聞えなくつて?

フィリツボ (気が付いて) 聞える。誰だらう? (手に取つた盃を窓に近き小卓の上に置く。)

エルコレ (近く) 僕——エルコレだよ! (ドアに現れる。)

フィリツボ (非常に驚いて) 君かい? 何處から入つて来たんだ? そして何の用が有るんだ?

エルコレ (女達に挨拶して) いや、之れは豫想以上の別嬪揃ひだ! フィリツボ君、之れなら無理も無いよ!

フィリツボ 僕はもう一度訊ねるが、君は一體何の用が有るんだ? 今時分、そんな所からどう

してもぐり込んで来たんだ?

エルコレ それは僕の罪じや無いよ、僕は門を叩いたけれど駄目だつた——誰も出て来なかつた。

フィリツボ 僕がみんなを出してやつたんだよ! 今夜はどんな人間でもそれぐし度い事をし過ぎて過さなければならぬ晩だからね。

エルコレ 君の仰せ迄も無く今夜はボロニア中の人間がみんなそれを實行して居るよ! ——僕は

はそれから書齋の窓の前から呼んで見た——それも駄目さ! それで今度は庭の門に急いで行つて見ると——ピツタリ鎖かぎされて居るといふ始末さ! それで僕はどうしても塀を乗超える他に仕方が無かつたんだよ——そして僕はそれをやつた、だからかうしてこゝへやつて来たとい

ふ譯なのさ!

フィリップ 君の用件といふのは、塀を乗り越え損ねて頸つ骨を打折つても惜しくは無いといふ程の重大事件なのかい？

エルコレ 重大事件？——君の爲には何でも無いさ！僕は君に話しに來たのじゃ無いんだ、君にはちつとも用が無いのだ、こゝにおいで美人連を目あてて來たんだからね。

イサベラ (笑ひながら) まあ、何といふ人だらう！そんならあなた、わたし達を御存じなの！そして御存じなら、誰がこゝに居る事を知らしたんです？ 屹度——テバルデイだわ！

エルコレ そんな人は存じませぬ！

イサベラ そんならニゲツテイ？

エルコレ そんな名前も聞いた事が有りませぬ！然し、別嬪さん、あなた方はよく存じて居りますよ。

イサベラ わたしあなたに御目にかゝつた様な覚えはありませんがね。

エルコレ 僕も只今初めて御近付きに成るんです。然し僕はよく知つてますよ——あなたが曾て愛した事のある男達を全部呼集めやうとしたら、隣近所から椅子を借り集めなけりや到底御間に合ひ兼ねる程の騒いでせう。

イサベラ そんな厚かましい事をおつしやるのは、こんな真夜中に限るんでせうね？

エルコレ (ルッケンチアに) 然しあなた方だつて未だほんの十三位の小娘の時分に、夜といふ物に向つて随分怪しげな質問を發したものでせう——唯若い男の口に依てのみ御満足の出来る解答が與へられる様な質問をね！そして只今は、僕が未だあなた方の御名前を知らないからそれであなた方を知らないものゝ様におつしやる！

フィリップ おい、君はそんな下らないしやれを云ふ爲めにわざ／＼塀を乗り越えて來たのかい？そんな事なら、僕はもつとしやれの甘い人を知つてよ！一體何の用が有るのかさつさと云つて了ひ給へ！

エルコレ 未だ云はなかつたかね？僕は此美人達を婚禮の御祝に御招待するのだ。

イサベラ まあ、俄に勿體振つた口をき、出したよ！

エルコレ 冗談じゃ無いです。我がボロニア公殿下がその御婚儀の饗宴にあなた方を御招待しやうとおつしやるんです！

フィリップ 下らない狂言はもういゝ加減にして止さないか！

エルコレ 何？狂言だつて？そんなら——まあ、聞き給へ！

往來の方にガヤンと騒音聞える。
イサベラ 何の音でせう？

フィリツボ 酔拂ひが往來中で騒いでるんでさあ——尤も時々家の中でも騒ぐ奴が有るがね。
エルコレ (窓へ行つて押開ける。) そら、よく聞えるだらう！

往來の人影が聞える、女の笑聲も交る。

色々の聲 (もつれて聞える。) ボロニア公の御招きだ！ 別嬪さん達！御婚禮は御城であります！

城門も廣間も御庭も開け放しだ！ ボロニア公の御婚禮だ！ (聲と笑追々遠ざかる。)

イサベラ じゃあほんとうなのか知ら？

エルコレ 僕は憚乍ら生れて以來未だ曾て嘘といふ物を云つた事の無い人間ですよ！

フィリツボ 何といふ氣まぐれだらう！ 今夜！ あゝ！ かうして最後の一夜を過さうといふのだね！ それで殿様は御客を集めるのかい？

イサベラ わたし達も行つて見るわ！ そこへ行つたら屹度わたしの捜して居る物が見付かるだらうと思ふわ！

イサベラは窓の側に、エルコレは彼女の側に、ルクレチア二人に歩み寄る。

フィリツボ (獨白。) ベアトリーチエはあの呼聲を聞いただらうか？ 聞いたに相違無い！ そしてあの呼聲に應じたらうか？ 應じない事が有るもんか？ 之れ位有り相な事は無いじゃ無いか！

イサベラ 然し一體その花嫁さんは誰なの？

エルコレ それがまるで狂氣じみた話さ！ 只の職人の娘でね、やつと十六に成るか成らない何でも無い小娘なんですよ。但し美しい事は無類に美しいです！

フィリツボ その名前は？

エルコレ ベアトリーチエ・ナルデイ！

フィリツボ 何だつて？ もう一遍！

エルコレ ベアトリーチエ……然しどうして君はそんなにびつくりするんだ？

フィリツボ (氣を取直して) お前さん達はびつくりしないのかい？ 只の小娘——何だつて？

名前は——よく分らなかつたよ——メナルデイだつて？

エルコレ ベアトリーチエ・ナルデイさ！ 殿様は昨日町で其娘を御覽になるとすつかり惚れ込んでしまつて、直ぐに御城へ連れて行つたといふ次第さ！

ファイリツボ (氣を静めて) 連れて行つた？ 奴隷でも連れて行く様にかい？ 殿様が一寸目くばせをした——するとあの女はだまつて躓いて行つたといふのかい？ どうか話してくれ——どうしてそんな風に成つたんだい？ 奇怪極まる話だ！

エルコレ いやどうして君達なんぞの想像以上に奇怪極まる話さ。殿様が其娘を見められたのは——ねえ、よく御聴き！——娘が許嫁いぢぢの男と一緒に婚禮の式場へ出掛けやうといふ瞬間だつたのだ！

ファイリツボ 全くだ！ 想像以上に不思議な話だ！ そして、それから？

エルコレ それで、殿様は娘を抑へて……

聲(往來の方より、前よりも近く) 御城も御庭も眞晝間の様だ！ さあ来い、美人諸君、殿様の御招

待だ——美しいベアトリーチエとの御婚禮へ！

ファイリツボ 殿様が其娘を抑へ付けて——それから？

エルコレ すると其娘はかう云つたのさ——私はボロニア公の寢室の敷居は、ボロニア公妃としてで無ければ決して跨ぎません、とね！

イサベラ 何といふ恥知らずだらう！

ファイリツボ それからそのウィット……何と云つたかね——その何だよ——聖殿さ——指をくわ

へてそれを見て居たのかい？

エルコレ 可哀相に！ そんな男の事なんぞ誰も何とも思つて居ないのさ！

ファイリツボ 其男は自分の花嫁を恭しく殿様に奉つたのかい？

エルコレ 未だ話さなかつたかしら？ 煩悶の揚句自殺して了つたのさ。

イサベラ 馬鹿な男ね！

エルコレ いや、御推量以上の馬鹿者さ！ 殿様は其娘の代りに、金持の貴婦人を妻にしてやら

うとおつしやつたのだからね。

ファイリツボ そして其娘は許嫁の男の自殺を見ては、身體中の血汐も一時に凍つて了つたらうね？

エルコレ 何の——そんな女らしい女じや無いのさ。

ファイリツボ 其時女はどうしたのだらう？ 泣叫ばなかつたのかい？ 世の中にはこれ以上に不

幸な人間は無いだらうといふ程みじめな様子では無かつたのかい？

エルコレ 泣叫んだといふ様な話は聞かへかつたよ。殿様が素敵も無い結納の品々を持って来て

娘は有らゆる裝飾を身に付けて、殆どボロニア中の人間の半分はそのあとから躓いて行つて、

サン・ペトロンのお寺へと向つたんだ。そしてかたの如くに大僧正が式を擧げたといふ譯なのさ。

イサベラ あなたもそれを見て来たんですか？

エルコレ 見ましたよ。お寺の中も前の廣場も群衆で一杯で、その雑踏はとて御話にならない程で、もうどうにもかうにもならなく成つた其時に、天は一つの奇瑞を示したんです。

フィリツボ どんな？

エルコレ 殿様がベアトリーチエと神壇の前に立つた其瞬間、空から群衆の真中へ一羽の黒い翼の手負の鷲が落ちて来て、重い羽ばたきを打つたと思ふと其まゝ死んで了つたんです。

イサベラ 何か凶い事の起る知らせね！

エルコレ さうですよ！ みんなさう云つてますよ！

フィリツボ そして君は當のベアトリーチエは見なかつたのかい？

エルコレ 寺の階段を降りて来る時に見たよ——顔色は蒼ざめて居たが、然し態度は立派なものだつた。全く生れながらの公妃殿下だと云ふ者も有つたがね、中には又……

イサベラ 殿様を魅した……？

エルコレ え、そんな風に云ふ者も有りましたよ。

沈黙。

フィリツボ (突然、元氣よく) さあ、非常に愉快に此一夜を終へる事の出来る場所が見付かつた——さつき始まつた時よりも遙に陽氣にね！ さあ、御兩人はこんないゝ事を敷へてくれた此男に御禮を云つて、それから御城へ連れて行つて貰ひなさい！ 左様なら！

エルコレ さあ、行きませう！ 君も一緒に行かないのか？ フィリツボ！

フィリツボ 御城へ——君達と一緒にかい？ (其處へ自分が現れたらどんな結果になるだらうといふ

想像が瞬間頭の中閃く。)

ルクレチア (フィリツボの側にすり寄つて) 行く前にわたしの誓言を聞いて下さい、フィリツボ、あなたはわたしが先刻あなたの爲めに眞實を立て通して見せると云つた時に、相手にしなかつたのですからね。

イサベラ そら又此人は吃度誓言を始めるんだよ——此人の癖でね。

ルクレチア わたしは茲に神聖な誓を立て、置きます——之れからどんな男でもわたしを一度抱擁したらもう命は無いものです！ 左様なら！

イサベラ、ルクレチア、エルコレ及び樂師達退場。

フィリツボ (唯一人、ひどく昂奮して) あの女は殿様と結婚をする、そしておれはあの女が来るの

を待つて居る！ あの女はおれの所から家へ歸つて、ウイットリーノに口説かれて彼れと結婚をする氣に成つて、お寺へ一緒に行く途中ボロニア公と呼ばれる他の男に出逢つて、其男と手を握る、其間に先の男は死んでしまふ——そしておれはこゝでおとなしくあの女を待つて居る！ あの女は一瞬間に空を飛ぶ星の様に、日が暮れてからの一寸の間に世界中を飛び廻るのだ——そしておれはかうしてあの女を待つて居る！

右手のドアを開き、アンドレア立つ。

フィリツボ (彼れの方へ進む。同じ様に鼻齎して云續ける。) アンドレア君、どうくやつて來たね！早くやつ付けて了つてくれ！ 僕はもう早く決りを付けて貰ひ度くつて、先刻からいらくしてゐるんだ！

アンドレア (ひどくびつくりした様子で) 君はもうそれ程迄に覺悟を決めて居るのかい？

フィリツボ 何をぐづぐづしてゐるんだい？ そんなら君は未だ何んにも御存じ無いと見えるね？僕は約束を反古にした男だよ！

アンドレア 知つてるよ！

フィリツボ 然し君は何故、どつしてそんな風に成つたのかは知らないだらう。

アンドレア 聞かしてくれ！ 僕はそれを聞きに來たんだ。

フィリツボ さあ、君の全體が復讐の鬼と成つて僕の云ふ事を一言も漏さぬ様に聽いてくれ！

僕はね、臨終のお母さんの枕頭に座つて居るテレジーナさんの足下に跪いたのだ——僕の許嫁であり、僕の親友の妹であり、且つは死行く母の呼吸に心配相に耳傾けて居る娘である彼女に對して、僕は普通の女に對するよりも三倍の敬虔の態度を執らなければならぬ筈であつたんだ——其テレジーナさんの耳に僕は熱い唇を持つて行つて囁いた、そして其邊の酒場の娘にでも浴せかける様な不謹慎極まる亂暴な言葉が此口から流れ出たんだ。するとテレジーナさんは只目付だけで以て僕を卻けた、そして僕は出て行つた、然しそれは自分の恥づべき所行を後悔した爲では無くて、自分の醜い慾望の満足を拒まれた爲めの腹立まぎれの仕草であつたんだ。それから僕は種々の競技や踊などで騒いで居る城門外の御祭へ出かけて行つて其處に居させた一人の娘——それはテレジーナさんなどは全然質の違つた娘に、まるで狂人の様に、命も何んにも要らない程に迷込んで了つたんだ。それからといふものはまるで百年間も魔の國をうろくさ迷つて居た人間の様に成つて了つた——此人の世に關係する程の物は何も彼も奪はれて了つて他の人間との交渉は絶えて了ひ、今ではもう君の持つて來た其物の他には何の望み

も無い身體だから、僕はそれを——「死」を有難く頂戴するのだ。

アンドレア 君の知つて居る事はそれだけなのかい？ 僕は君の知らない事も知つて居るよ、君は自分の煩悶だけしか知つてないのだからね。僕が家へ歸つた時には、テレジーナは一言も物を云はない狂亂に陥つて居たのだ！

フィリップ (仰天して) そんな事まで始まつたのかい？ それでも君は未だ躊躇して居るのかい？
アンドレア 君はそんならむざ／＼人手にかゝつて死ぬ積りで居るんだね？
フィリップ さうじゃ無いさ——僕だつてやれるよ！ (側房に近き壁にかゝれる劍を取る。) そら見給へ！ 立派な一騎討の勝負だよ——僕は屹度防禦して見せるよ——決して見かけばかりじゃ

無いんだ——用心し給へ！
アンドレア (劍を抜いて) フィリップ君——いや！ 僕はこんな風にして君を殺して了ふに忍び

ない。

フィリップ どんな神様だつて、坊さんだつて、僕の様な人間の懺悔はもう聞いてくれないよ！
アンドレア (劍を振上げるが、又下す。) 俄に此腕が鈍つて了つたのはどういふ譯だらう？ 恐らく僕が怒つて殺さうと思つてやつて来た人間とはまるで違つた別人をこゝに見出したからだら

う——此様な人間に對しては、あれ程烈しかつた僕の憎惡も、異常な暴風に吹散されでもした様に忽ち消え失せて了ふ。僕は無論僕の家を侮辱し、僕の大切な妹を狂人にして了つたあの男を復讐する積で来たのだ、然し同時に、會ては僕の親友であつたあの男をも求めたのだ。無論僕は我々の手から多くの貴重な物を無残に奪ひ去つたあの男を殺してくれやうと思つた、然しもとは我々の親友として、今日奪へるよりも多くの物を——神から恵まれた豊かな天才を我々に預ち與へてくれたあの詩人フィリップをば哀み悼まうと思つて来たのだ。僕は慥に罪人としてのフィリップを求めて来た、然し同時に、人間としては以前に變らぬ高貴な彼れを見出さん事を豫期して来たのだ！

フィリップ (昂奮して、殆ど苦し相に) じゃあ僕は以前にはどうだつたと云ふんだい？ 僕は確に他の人間に比べて刹那の天恵を受けた人間であつた。然し今日と成つては底知れぬ深淵に墮落して了つた。現在の僕は奴隸や、野に働いて居る百姓や、汗を流して重荷の下に喘いで居る勞働者をさへ、神に恵まれた人でも見る様に、仰ぎ見て居るのだ！ 僕が羨む人達の日々の生活は、唯一の確乎たる計畫に従つて、まるで寶石の如くにうるはしく、丈夫に織られた帯の上に相並んで一の存在を形造つて居るのであつて、強い紐の上に眞物と偽造の寶石がごちや交ぜに

ぶら下つて居る様なだらしの無い物じゃ無いんだ。僕はさういふ人間に成り度いんだ——どつしりした足取りで微笑を含みながら大地を踏んで、起きるも寝るも常に同一人で、今日は神と成り明日は痴漢と成る様な事の無い人間に！今夜婚禮を挙げるといふあのベンテウオリオの様な人間を僕は羨んでゐるのだ——あの男は毎日幾千の清冽な泉から彼れの生命を掬んで飲んで居る、そして其各の泉が皆一樣に彼れの烈しい渴望をそゝり、同時にその渴を癒して彼れの慾望に満足を與へる。彼れは「時」の重荷をそれ程重く感ずる事も無いし、又自ら空中を飛べもし相に軽々しく感ずる事も無い。僕があつた男の様であつたら、そして濡草の上を渡るが如くに人間の頭を踏超えて、踏みしだいた「生」の浴の爲に足もしとゞに濡れる程であつたとしたら僕は決して不正といふ事を知らぬ強い人間に成り得ただらう——そんな人間ならばどんな事をやつても差支が無いのだらう！そして誰か、復讐者の様な顔付をしてやつて来てもしやうものなら、僕は馬鹿者を嗤ふ様に其奴の顔を嘲笑つてやつたんだ。然し今や僕にはそんな大膽は似合はしく無い。そして君の其御情めいた言葉はまるで養油の様に僕の心に恥を注ぎ込むだけだ。君は僕を罰する爲に來たので無いなら、一體何の爲にこんな所へやつて來たのだ？

アンドレア 君は君の苦み抜いた心臓を友達の劍の前に突付ける事をそれ程迄に焦つて居るのな

ら、いかに丁度い、贖罪の方法が有るよ——さあ、來給へ！

フィリッポ (驚いて) 何處へ？

アンドレア 名譽の戰場へ！

フィリッポ 君と一緒に？

アンドレア 僕から決して離れないで！君が僕と一緒に出陣して然も生長らへて明日の夜の星影を仰ぐ事が出来るならば、それは即ち神が君の死を欲しない證據なのだ！

フィリッポ 僕は此上にも尙賈金遣ひの様な偽善の眞似をして見せなければならぬのだらうか？君と共に出陣し、君や其他の勇士と仲間になつた様な顔をするのは、僕にとつて深い事じゃ無いよ！君の命は貴い贈物だ、黄金色の水を縁まで一杯に溢れた大杯の様に、百千の可能性を以て充されて居るのだ。其中には無数の冒險や功名や青春の豊富や此世の有らゆる榮華の渦が巻いて居るのだ、そして其大杯が傾いて血の小川と成つて地上に溢れる時、地は測り知る可からざる多くの物を飲込むのだ。さうした豊富な君の命と並べて、まるで澱み滓の様な僕の命を差出す事は、人を偽るものでもあり、又自ら恥ぢなければならぬ事でもあるのだ。

紗面のエチーリトアベ

アンドレア 現在の君は残滓だらうが何だらうか——明日は溢れるばかりに豊富な人間に成るよ

無限の偉大なる物の爲に身を投出す以上は。そして出かける前に僕は君を妹の所へ連れて行かう——あれは明日修道院へ入つてもう二度と此世へは出て来ない積で居るのだ。然し君の其後悔と決心とは、妹の死んだ様な官能に又新しい光をもたらすかも知れない、そして彼女の純潔な手を舉げて君の首途を祝福するかも知れない、それから、斯くして罪を贖つた後に、僕と共にイザイアの門を守りながら、偉大なる明日の日を待たうでは無いか！

フィリップ　アンドレア！
アンドレア　さあ、行かう！

フィリップ　君は僕に何を見せやうと云ふんだ？　アンドレア！
ベアトリーチエの聲　（右手の戸外にて）　フィリップ！

フィリップ　（アンドレアの側より飛びしきつて、凍付いた様に突立つ。）
ベアトリーチエ　（外から）　聞えないの？　フィリップ！　戸を開けて下さいな！　道が分らないわ、真暗で！

アンドレア　（ひどくびつくりして、フィリップの顔を不審相に見詰める。）
フィリップ　（沈黙。短き間。）

ベアトリーチエ　（外から）　フィリップ、聞えないの？

フィリップ　今行くよ！

アンドレア　どうしたんだ？

フィリップ　アンドレア君、行つておくれ！　僕が今云つた言葉を忘れて了つておくれ！　僕は何か約束めいた事を云つたか知ら？　君には何かそんな風に聞えたか知ら？　若しそんなら僕はもう一度約束を破るよ！　今、非常な重大事件が起つたんだ、他の事なんぞはもうどうでも善く成つたんだ。君はもう行つておくれ！　左様なら！

アンドレア　フィリップ君！

フィリップ　僕の名前はもう呼ばないでおくれ！　忘れて了つておくれ！

ベアトリーチエ　（外から）　フィリップ！

フィリップ　左様なら！

アンドレア　永久にかい？

フィリップ　さうだ。どうぞ其庭の方から……！

アンドレア　フィリップ君！

ファイリツボ 僕は君の足下に跪かなければならぬだろうか？ 僕の名前も、僕自身も、それから僕が口外した有らゆる言葉も忘れてくれと願はなければならぬだろうか？

アンドレア もう澤山だ！ (露臺から退場。)

ファイリツボ (あとを締める。)

ベアトリーチエ (初よりも遠くの方から) ファイリツボ！

ファイリツボ (右手のドアを開く。)

ベアトリーチエ (未だ戸外で) そこなのね！ わたし迷つて了つたの！ さあ来ました！ (ドア

アに姿を現す。白い衣裳、頭に白い面紗。) 随分いつまでも呼ばせたのね！

ファイリツボ (ひどくびつくりして) ベアトリーチエ！ お前は——ボロニア公妃殿下だ相だね？

ベアトリーチエ え、さうよ！

ファイリツボ そして——僕の所へやつて来たのかい？

ベアトリーチエ え、御覽の通りにね！ どうぞあなたの腕でわたしを抱いて下さい！ 時間

が無いんですから、ねえ、可愛いファイリツボ！

ファイリツボ (彼女の側から飛びしまつて) 行け！ 此數時間の中に潜んでゐる謎が黒い面紗の様に
お前を深く包み込んでゐる！ お前の頭を掩ふてゐる其面紗と一緒に、其謎も地びたに投出し

て了へ！ (面紗彼女の肩からこぼり落ちる。)

ベアトリーチエ ねえ、わたし、あなたと一緒にあの世の旅に出かけやうといふ決心で来たので

すわ！ それなのにあなたは、此場に臨んでも未だそんな事を氣にしてるんですか？

ファイリツボ お前は僕に取つては赤の他人だ、無論そんな最後の道連れにする様な女じや無いんだ！

ベアトリーチエ わたしあなたにこんな風にして迎へられやうとは思はなかつた！ もう二人の

一生の最後の時間が来たといふ場合に、過去つて了つた時間にどんな出来事が有つたらうが、
そんな事はわたし達にとつて何ですか？ ねえ——假にあなたが先刻わたしと別れてから、百千

の悪魔の群に交つて空中を飛廻つて来たのであつたとしても、わたしそんな事は何とも思はな
くつてよ。又假にわたしが今晚世界中の人間が頭を下げる女王様に成つたのであつても、又は

馬鹿者達の慰み物に成つたのであつても、そんな事はあなたにとつて何でも無いじやありませんか——
當のわたしがあなたと一緒に死ぬ爲めにちやんとかうしてあなたの御側に來て居る以

上は！

ファイリツボ お前は婚禮の祝宴の眞最中に逃げ出して来たのだらう？ みんなが捜してゐるよ！

ベアトリーチエ わたしの居所を知つてゐる人間は有りはしないわ！ そしてわたしが御城を抜出すところを見付けた人も無いし、跡を蹤けて来た人も無いんですもの！

ファイリツボ 先づ事件の真相を有りのまゝに話してくれ！ お前自身では事件の真相に深く徹して観察する事は出来なく成つてゐる、その複雑な因果関係をよく考察するのは僕の役目だ。さあ、話して御覽！

ベアトリーチエ だつて、あんな風に成つて了つたんですもの！ あなた御解りにならないの？ あなたもう忘れて了つたんですか？——あなたはわたしがあんな夢を見たのが済まないと思つた様子を追出したんでせう、それからわたしうちへ歸つて見ると、俄に獨りぼつちになつた様な気がして淋しくつて堪らないんです。だもんだから、兄さんに勧められて見ると、矢張りあのウィットリーノがわたしの爲には一番安全な、氣の置けない避難所の様に思はれたんです。それから殿様がおいでになつてわたしじつと見詰められたもんだから、いよ／＼先刻の夢が眞物に成ると思つて了つたんです。そしてあの夢の様に御妃様に成つて殿様の御側に居るのも悪くは無いと思つたの、それでわたしあの人の物に成る氣に成つて了つたんです。ファイリツボ それでお前は何故其まゝに成つて居なかつたんだい？ 何故逃げてなんぞ来たんだ

い？ お前のした事をよく考へて御覽！——お前は公妃といふ身分でありながら、然も婚禮の晩に夫の城から、有らゆる榮華と偉大さの中から、光と生との眞只中から僕の懐へ飛込んで来たのだ！ 一寸以前に笑ひながら、そして泣きながら——あの時お前の唇のあたりには確に二つながら浮んで居たよ——立去つた其僕の所へ！ 僕の所にはお前に取つては、はかない、危険な幸福しか無いのだよ！ 一體お前はどないふ積なんだらう？

ベアトリーチエ あなたが戀しかつたのですわ！ そして其戀しさはどんな物よりも力強かつたからですわ！ そして、他の男の物に成つて了つてもうあなたの物では無く成つて了はなければならぬ時が近付けば近付く程、わたしの魂は益々烈しくあなたを戀焦れて苦み悶えたのです！ たつた一度あなたの腕に抱かれる爲には此世の一切の榮華も偉大な物も、光も生も打ちやつてかまはないと思込んだのです！ すると、まるで地獄で佛の様にフツと思付いたんです——逢はうとさへ思へばあの人に又逢ふ事も出来るのだ、わたしは急いで此處から逃出さなければならぬ、さうすればあの方は又わたしの物だ！——さう覺悟してわたしは逃出して来たんです。

ファイリツボ よく御城を抜出られたね？

ベアトリーチェ 御饗宴は終つたけれど、御殿の中はまだわれぬ様な騒ぎなの、御庭には松明が澤山燃えて、物の影は人間の様に、そしてほんとうの人間は影の様に見えるのよ。御門は残らず開け放して、何處も彼處も人で一杯、そして此面紗は額まで顔をかくしてくるでせう、早く町へ——早く御城の近くから拔出して、急いで駆けて行つて、よく見覚えのあるあの小路を辿つて、飛ぶ様にあなたの御側へ——さうして此處まで来たのですわ！ ねえ、解つたでせう、さうしてやつて来たのですわ！ わたしには矢張りかう成るより他に無かつたんだと思へるの。所があなたは不思議だ——と云つてわたしの顔ばかり見詰めて居るのね——何か奇蹟でも起つた様に！

フィリップ (しばらく彼女を見詰めた後) 奇蹟では無いたらう——お前にとつてはね！ お前には不思議でも何でも無いだらう！ 一體お前は物事に驚く様には出来てゐない人間だからね。お前は此世の中に存在するといふ事の不思議に依て名状すべからざる驚異の感を抱いた事も無いだらう、お前は又此世の自然の目まぐるしい華々しさの前に敬虔な黙禱に耽つた事も無いのだらう、そして、ベアトリーチェと名付けられたるお前と、フィリップと稱する人間である僕との二人が、此廣い世界に生ける無数の人間の中から不思議にもたま／＼めぐり逢つてかうし

た關係を結んだといふ事實も、お前の心を深い戦慄を以て脅す事が出来ないのだ。お前のお父さんが狂人に成つても別に心配もしないし、お前をそれ程までに愛してゐたウィットリーノが前の爲めにお前の目の前で死んで了つても、お前の心は烈しい恐怖に襲はれるといふ事も無い。最後に突然ボロニア公妃殿下に祭り上げられて了つたといふ夢の様な出来事さへも、掌に蚊が一疋止つた位にしかお前を驚かす事が出来なかつたのだ、ねえ、ベアトリーチェ！ 若し墓の下から幽霊でも這出して来たなら (ベアトリーチェ身を顫ばす) お前も少しは驚くだらうさ——蝙蝠が飛出して来た位にはね——然しそれ以上には驚きもしなければ、又それと違つた性質の驚きを経験する事も無いだらう。尤も、ほんとうはお前の考へ方の方が正しいのだらう。お前の身の上に起つた一切の出来事も、よく考へて見れば實は何でも無い事だからね。有らゆる謎の如き光明や馬鹿騒ぎや、色々の不安や歡樂の渦を巻いて居る此人生の無常も、今や我々の目の前に迫つてゐるあの物の神祕さに比べれば、實は何でも無い事なんだ、ねえ、ベアトリーチェ、お前は再び世の中へは戻つて行けぬ様な所へうか／＼と来て了つたのだよ！

ベアトリーチェ 勿論わたしその積りで来たのですわ。
フィリップ 然しお前はほんとうにその意味が解つてゐるかね？ よく見て御覽！ 之れが即ち

「存在」といふものだ——それは「お前」だ、之れは「僕」だ、向ふ方には町が在る、そこには無数の人間が生きて居る、街路は街路と交錯して遠くの地方にまで、或は遂に海にまで延びて居る、そして其海を超えれば更に又澤山の町や人間が有る。或は上の方を見て御覽——頭の上には碧みが、つた圓天井とその光とが擴がつて居る——それ等はすべて我々の物だ、何故なれば我々は生きてゐるのだからね！　そして明日の朝にはもう我々の物では無く成つて了ふのだ、丁度此世に遍滿せる赫々たる光明も盲人には見え、有らゆる道の樂しきも遙けきも足のない者には有れ共無きと同じである様に。ねえ、考へて御覽——たとひ百歳の老人と雖も今の我々二人よりは若いのだ、より多くの希望を持つて生きて居るのだ！　解るかい？

ベアトリーチェ（頷く。）

フイリツボ（蠟燭を指して）　此蠟燭の火が消える頃には我々も夙に火が消えて居るのだよ、ベアトリーチェ！　僕が抱擁するお前の美しい肉體は、今こそ熱い血汐が沸つて居るが、其頃には最早一つの物——一個の石よりも悪い物に過ぎないのだ。石ならば何處へ投出されてもその形に成つて居るからね、然しお前は——今こそ吐く息は芳ばしく、その肉は顛へ、一目見る程の有らゆる人間の總べての感覺をかき亂して烈しい慾望を起させても——間も無くお前は見る

人をぞつとさせる様な一つの物質と成り、翌日は早くも人に嘔吐を催させる様な醜惡な物と成り、又其翌日には人々にとつて有害な物に成るので、人々はお前の側から遠ざかり、腐れて行く他の人達と一緒に地の底深く埋めてしまふだらう。そして僕でさへも、そんな有様となつたお前の身體を抱いたなら矢張り戦慄を禁じ得ないだらう——髪と衣裳とはい、香を放つてゐても、お前の息にはもう芳しい匂は無いのだからね！　お前それが解るかい？　ベアトリーチェ！　ベアトリーチェ　え、！

フイリツボ　それからね——我々は、習慣に成て了つた貧弱な言葉で、「永遠に不可解なる物」といふ様な事を云つて片付けて居るあれの事だよ、我々は華やかに生きて居る時の此呼吸と等しく斷未魔の最後の呼吸も單に一瞬間に過ぎないものと心得て居る様だ——それが實際に目の前にやつて来る迄はね。我々はそんな風にのんきに獨合點をしてゐるもの、扱て實際はそれは生きてゐる間には想像も出来ない様な恐る可き何物かを藏して居るのでは無いだらうか、我々は此世に生きて來た一生をその千倍以上の強度と苦悶とを以て繰返しつゝ、新たに又通過しなければならぬのでは無いだらうか、又は一つの全然新しい存在が——まるで想像も出来なかつた様な存在が我々にやつて來るのでは無いだらうか、我々は我れと我が命を斷つた様なもの

、いよく其場に臨んでは、再び光明の世界へ歸り度いといふ苦しい、然も甲斐無き憧憬に烈しく襲はれはしないだらうか、そして我々が今此世に生きて想像する事の出来る有らゆる苦患もそれに比べては單なる微風のそよぎにも過ぎぬ様な物と成つて了ふのでは無いだらうか——之等の事に就いては誰も未だ我々にその經驗を物語つてくれた人は無いのだからね。

ベアトリーチェ（彼れの身體にすり寄つて）どうぞあなたの腕に抱いて頂戴な！

フリッツボ 然し、まあ、考へて御覽——我々が若し思切つてやりさへすれば、我々の命を救ふ事も不可能では無いのだ。若し運命が我々を守護してくれるならば、幸福の招く方へ逃出す事も出来るかも知れないのだよ！ 此「幸福」の一語に依て世界はお前に對して新たに甦るのだ！ 太陽は明日も又今日と等しくお前の上にさし登るだらう——春の花、豊かな土の働き、人の世のどよめき……總べては今日と同じ様にお前の周圍を踊り狂ふだらう！ お前が只一言はいと云ひさへすれば、我々はそれをやつて見やう——どうぞさう云つておくれ！

ベアトリーチェ 若しあなたがさういふ御つもりなら——どうぞわたしを歸らして下さいまし！

フリッツボ 何故？

ベアトリーチェ 一旦かうした經驗をした後に一緒に生きるといふ事は、他の人なら知らぬ事、

あなたとわたしとは到底出來相も無い相談だわ！ 若しそんな風になつたら、あなたはどんなにわたしをいぢめるでせう！

フリッツボ 我々は已に生きてしまつたのだ。

ベアトリーチェ わたし達が今希望を抱いて目指す其生活も、いやで／＼堪らないものに成つて了ふ日がどんなに早くやつて来るか、わたしには今から先が見える様です——わたし達は死に度いのです——だからわたしはかうしてやつて來たのです！

フリッツボ 有難う、ベアトリーチェ！ それでいゝよ。お前の覺悟がよく分つたよ。たとひ二人の命は之れから先へ生き延びても、此數時間の厭はしさを綺麗に消し去る事は到底出來るものではないのだ、そして二人の最期が近いといふ意識のみが、我々を子供の様に純な物にしてくれるのだ。さあ、此幸福を我々は限無く享樂する事にしやうよ！（彼女を卓の方へ導いて行き、酒を注ぐ）さあ、飲まう！ 之れは決して残物じゃ無いよ。先刻と今との間には永劫にも常る一の決心が介在して居るのだからね。（二人盃を擧げて飲む）希望と不安とが交々我々の澄み切つた魂に幻像の様な紛らしい陰影を投げてゐる間には到底不可能であつた事が、今こそ實現せられる時が來たのだ！ 我々は我々自身の存在を生きたのだ。自分の意志を以て我が命を斷つ事

は一の自由だ、而してこれこそは我々弱き凡夫に與へられた唯一の自由だらう！

ベアトリーチエ 太陽はどつちの方から登るのでせうね？

フィリツボ あの塔の方角だよ。お前は何故そんな事を訊くの？

ベアトリーチエ あなた、あの事を思出さない？ ねえ、フィリツボ！ わたし達二人が夜のキツスに耽りながら、どうかして一度は味つて見度いものだと憧れた望みはあの事だつたじやありませんか——二人一緒に口と口、胸と胸とを押し付けながら目覺めた時、あたりがだんぐり明るくなつて太陽の登つて行くのを眺めろ事が出来たなら、どんなにい、だらうつて！

フィリツボ それは此世では到底逢けられない望に成つて了つたのだよ。

ベアトリーチエ 何故出来ないといふの？ 今日こそ出来るのじやありませんか、フィリツボ！ わたしが此處に居るとは誰だつて想像も付きはしないし、わたしの跡をつけて来た人も無いんだから、わたし達は誰にも見付けられる氣遣ひは有りはしないわ。今夜一晩だけは完全にわたし達二人の物よ、そして夜が明け始めた時に——やつて了へばい、じやありませんか！

フィリツボ それはもう我々の力では及ばない事になつて了つたのだよ。

ベアトリーチエ まあ、何故？

フィリツボ (落付を拂つて) お前が此盃を唇に持つて行つた時、お前はそれから「死」を飲んだのだよ。

ベアトリーチエ あの——「死」を？

フィリツボ 此酒を飲めば、即ち「死」を飲んだのだ。

ベアトリーチエ 「死」を？

フィリツボ 多分樂に死ねるだらうよ。

ベアトリーチエ (言葉に現し難き驚愕を以て) そんならあれは毒藥なの？

フィリツボ 何故そんな妙な顔をして僕を見るんだい——心配な事でも有る様に！

ベアトリーチエ わたし毒藥を飲んで了つたといふのね？

フィリツボ さうだよ——僕と同じ様に！ (彼女に近寄る、彼女は逃げる。)

ベアトリーチエ 時間はどの位かゝるでせう？

フィリツボ 分らないね。數秒——數分、或は數時間……ともかくもう決つたのだ。一つ床の中から二人一緒に夜明の空を眺めるといふ様な眞似はもう到底出来ない相談だよ。(二人顔を見合せる。彼女に近寄つて) さあ、おいで、ベアトリーチエ！

ベアトリーチエ 何方が早く死ぬでせうね？
 フイリツボ それは分らないさ！
 ベアトリーチエ そんなら若しかしたら、あなたの方が早く……わたしだけ一人残されるかも分らないのね？

フイリツボ さうなるかも知れないね。然しどつちにしても長い事じや無いよ。さあ、おいで、ベアトリーチエ、未だ残つて居る僅の時間に我々は出来るだけの幸福を味ふ事にしやうじや無いか！もうかう成つては僕の熱情とお前の熱情との間に一番薄い絹一重の隔たりが有つてもいやだ——お前の身體のあのうつとりする様な温味を、お前の體から逃けて行つて了はない中にもう一度僕は感じ度いのだ、そしてお前の唇から漏れる最後の吐息を此唇で飲み度いのだ、ねえ、ベアトリーチエ！（彼女を後方へ引寄せらる。）

ベアトリーチエ（彼れにじつと見詰められて）放して頂戴！いゝえ、そんなに急かないで頂戴と云ふのよ！ねえ、わたしの手は未だこんなに温いでせう——死ぬ迄は未だ大分間が有るに相違無いわ！そんなにあわて、わたしをどうかして了はうとしなくつてもいゝわ！それにわたし此盃をすつかり飲乾したんじや無いのですもの、未だどの位かゝるか——どの位苦まなければ

ばならないのか、分りはしないわ！わたしそんな恐しい目を見せられる事は堪らないわ！ぐつと一息で飲乾せと一寸云つてさへ下されば！あなたは一體何の必要が有つてわたしを騙すのです？わたしあなたと死ぬ積でこゝへやつて来たのですよ！それにこんな事をするなんて、ほんとに卑怯な、見下け果てたやり方だわ！わたしそんなにされる覚えは有りませんわ！

フイリツボ やうくお前はほんとうの事が分つて来たと思えるね！お前をしつかと掴まへて了つた物の正體がはつきりと分つて来たのだ、お前は死なうとする今に成つて漸く「死」といふ事が飲込めたのだ！たつた今迄は「死」と云つてもお前には他の事と同じ様に只浮の空の言葉に過ぎなかつたのだからね！

ベアトリーチエ あなたわたしを輕蔑するんですか？同じ殺すにもやり方が有りますよ！そんな風のやり方はむざむざ暗討にするも同様ですわ！あなたはそんな意地の悪い、卑怯な人だとは思はなかつた！わたしあなたを憎みます！

フイリツボ そんな愚痴はもう澤山だ！さつさど行つて貰はう——只急がないと駄目だよ！ベアトリーチエ そんならわたし未だ助かるの？何處へ行つたらいいの？早くおつしやいよ！

ファイリツポ お前の行き度い處へ行くがい、さ！ 全世界が喜んでお前を迎へてくれるだらうよ！
 此酒の中にはね、毒藥のドの字も入つては居ないのだよ、だから有らゆる生活がもと通りにお
 前の物だよ。うまく嘘を吐いて歸つて行くがい、さ！ お前にうまい嘘を考へ出す智恵が無い
 といふなら、僕が嘘で一杯の大袋をくれてやるよ！ 例へばだね——死んだウイットリノを見
 度く成つてフラ／＼と家へ歸り度く成たんだとでも云ふさ！ 何？——餘りほんとうらしくも
 聞えないといふのかい？ そんならお寺へ行つて來たと云ふがい、よ——殿様から妃きさきにしてや
 ると云はれたあの時に自分でひそかに誓つた心願を果す爲めに、夫の武運と町の安全を神様に
 祈願する爲めに、とでも云つてね！ そんな云草などはお前の云ひ度い様にどうでもかまは
 ないが、只早く歸らないと間に合はないよ——松明を照して捜し廻られない中にね！ お前は
 「生」を欲してゐるのだ。行きなさい——外にはそれがちやんと待つて居るよ、そして双手を舉
 げてお前を歓迎して、忽ち自分の物にして丁だらうよ！
 ベアトリーチエ (すつかり敗亡して) 許して頂戴！

ファイリツポ 何だつて？ 何を許すのだい？ お前は僕を騙したとでもいふのかい？ 若し僕が
 お前の氣まぐれを利用して、實際は行き度くも無い處へお前を引張り込んだとでもいふのなら

僕はお前を騙したのだと云はれても仕方が無いさ！ 一體お前は嘘を吐いたのだらうか？ お
 前は僕と同じに決して嘘を吐く事などは出来ない女だよ！ 只脈搏が打つ度毎に代る／＼新
 しい眞理がお前の血管を駆けめぐるといふのがお前の本性なのだ——それはお前の嘘では無く
 つて、お前の本性其まゝをさらけ出したものに過ぎないんだ。

ベアトリーチエ どうぞいつまでもあなたの御側に置いて頂戴！
 ファイリツポ いや、どうか行つてくれ！

ベアトリーチエ (跪いて) どうぞ御側に置いて！

ファイリツポ 何故？ 僕はもうお前を愛してなんぞゐないのだよ。お前は僕の周圍を包んで居る
 空氣や光線と同じ物なのだ。それを自分と一緒に持つて行かうといふのは僕も虫が善過ぎたよ。
 ベアトリーチエ どうぞわたしを追出さないでね！ あなたはわたしと一緒に死ぬ程の價値も無
 い女だとさけすんでゐらつしやるのでせう、そしてさうした旅立の意味が分らない子供の様に
 わたしを「生」の方へと追返してはうとおつしやるのでせう——わたしそんなにあなたに輕
 蔑され度くはありませんわ。わたしほんとに一生命に御願ひしてゐんです。

ファイリツポ (全くひや／＼かに) ベアトリーチエ、早く行つて了へ！ お前がさうしてぐづ／＼云

つて居れば居るだけ危険が近く迫つて来るのだよ。

ベアトリーチエ あなた、どうしやうといふの？

ファイリツボ さあ、行つて貰はう！ 何をぐづぐづしてるんだい？ (絶望の様子で自分自身にあ

ゝ、先刻あのアンドレアが一旦失はれたおれの有らゆる生活の貴さと力とを掌に載せてわざ
わざおれに持つて来てくれたので無かつたか、そして廊下に女の聲を聞くと同時に、おれは再
びそれを投げ出したのでは無かつたか？ (戦慄して) もう澤山だ！

ベアトリーチエ わたし歸りはしないわ！

ファイリツボ 行つてしまへ！

ベアトリーチエ あなたわたしを追出す事が出来る？

ファイリツボ 出来なくつてさ！ (ルクレチアが毒を注いで置いた盃を執つて一息に飲乾す。) 之れ——
之れこそ「死」だ！ (よろめく。)

ベアトリーチエ (叫出す。) ファイリツボ、わたし——わたしも一緒に！ (彼れの手から盃をもぎ取
る。) あなたと一緒に…… (盃を唇へ持つて行く。)

ファイリツボ (彼女の手から盃を叩き落とし、後へ退つてバツタリ倒れる——頭を側房の中に置いて階段の上に

横はる様に倒れながら) 自分を欺くな！ 逃けろ！「生」が待つて居る！

ベアトリーチエ ファイリツボ！ あなたは……わたしも参りますわ——さあ、見てゐらつしやい！

(盃の上に屈む。) たつた一言でい、から云つて下さいな！ わたしきつとやつて見せますからね！
どうぞ死な、いでね！ わたしあなたと一緒に——どうぞ待つて——ファイリツボ——もう一言！
(彼れを見詰める。) 之れが「死」だらうか？ いや——！ ファイリツボ！ (叫びながら) どうぞ
口を開いて！ (空しく響く自分の聲に驚く。)

往來の方にあたりて騒音。松明の光暫時赤き影を室内に投げる。

ベアトリーチエ わたしどうしやう？ 何故わたしだけ残して行つたの？ 人が来るわ！ 何だ
らう？ あ…… (窓際に寄つて窓掛に身をかくさうとする。)

聲 殿様の婚禮へ——第一等の美人ベアトリーチエとの婚禮へ！ 御城の門も廣間も庭も開け放
しだ！ (遠ざかる。)

ベアトリーチエ 未だ誰も知らない！ 然し今に直き分るだらう。(再び盃の上に身を屈めてそれを
啜ぐ。) 匂だけで死なれるものならい、けれど！ 一滴も残つてゐやしない——まるで蒸發し
て了つた様に！ 此人と一緒に死ねば今頃はもう萬事終つて居たのに！ 此人と同じ様にかう

屹度幸福にあり付けるわ、人生はわたし達の周圍に渦を卷いてるわ、太陽は再びわたし達の上にさし登るのだわ！ さあ、逃げませうよ、そして生きませう——生きませうよ！（彼れの上に身を屈めて初めて彼れの眞に死せる事を見届け、恐しき不安の叫びを發して身を起し、同時に側房の帳とまりを下してフィリップの頭も身體も残らずかくして了ふ。それから外の方へ走り出して、走りながら氣が狂つた様に叫ぶ。）生きなければならぬわ——生きなければ！

幕

して此處に横はつて居たのだらうに！ そして今わたしはたつた一人で出かけて行かなければならぬ！ けれどどうして——わたしはもうあの人に追付く事は出来ないのだ！ わたし庭でやる事にしやう——かうして！（首を縊る様な身振り。）いつそ廣い處でやつたらそんなに恐くは無いかも知れないわ！（遠くからはつきりしない聲。）わたし見付かつて連れて行かれるわ！ 縊られて了ふわ！ わたし一體どんな悪い事をしたといふのだらう？ そんな目に逢ふ理由が無いわ！（遠くの聲聞えなく成る。）行つて了つた！ 誰も捜しには來ない！ 誰も知らない——わたしは歸れるのだ！ ほんとうに——歸れるのだ！ そんなら何故こんな所にぐづぐづしてゐるのだらう？ 此人がわたしを引止めて居るのだらうか？ わたしの裾を掴まへてでもゐる様に！（又フィリップの側へ）あなた、わたし行つてもいい？ あなた、あなたつてば——フィリップ！ 然しあなたはもうフィリップでも何でも無いのね——「一つの石よりも悪い」のね！ けれどそんな筈は無いわ！ 一瞬間でもいい、から目を開いてくれたら、わたし自分の命を投出して了つてもいいわ！（彼れの手を執る。）未だこんなに温かい！ あなた未だ息が有るのね——生きてゐるのね！ 又こんな眞似をして、わたしの愛を試して見る積じや無くつて？ 起きて頂戴よ、ねえ、フィリップ！ 逃げませうよ、一緒に逃げて了ひませうよ！ わたし達は

第四幕

城内廣間。正面は開いて庭に面す。四本づゝの柱の二列正面に立てる故に、恰も三つの入口に依て庭へ通する様に見える。右手と左手とに各一つのドア。右手にはその他に一つの窓有り、之れを開けば奥の中庭を望む心。柱廊の兩端には階段有りて、彎曲して露臺に通す。此露臺は見物には見え、彼の柱の上に在る心。廣間は燈火煌々と輝き、庭は不安の光ゆらめく松明に照されて廣き芝生の上に不確な光ひろがり、芝生を圍む木々の影は或は伸び或は縮む。暫時の間庭は闇の中に沈んでゐる。遠くの方から奏樂の音。芝生の上には男女の組々現れては又消える。正面の奥には不斷の、然し不明瞭なる人影の動搖。幕揚る時舞臺は空虚。

左手のドアからルクレチアとイサベラ登場。

イサベラ あの人は何處へ行つちまつたか知ら？

ルクレチア 見えなく成つて了つたわ！

マルウエツチとツアンピーリ庭より登場。

ツアンピーリ 我がボロニアにはどれだけの美人が居るか、今夜こそ残らず分らうといふものだ！

174

175

今晚は！ 別嬪諸君！

イサベラ 御生憎様——わたし達はフロレンスの者ですからね。ボロニアの御自慢の種にはありませんよ！

マルウエツチ (ルクレチアに) フロレンスですつて？ あなたもですか？

イサベラ ねえ、どうぞ教へて頂戴な——此處はほんとうにボロニア公の御城なんですか？ そして御婚禮が有るといふのはほんとうなんですか？

ツアンピーリ あなた方はそれを疑つてゐるんですか？ こゝで殿様に御目にかゝる事も出来ませ

よ！ (庭を指す。)

イサベラ もつと近い所へいつて見ませうよ！ (ツアンピーリと庭へ。)

マルウエツチ 何故あなたはそんなに黙つてゐらつしやるんです？

ルクレチア あなた一體どうしやうとおつしやるのよ？

マルウエツチ 僕はあなたの御氣に入り度いのですよ！

ルクレチア そんな事を考へるものじやありませんわ！

マルウエツチ あなたの御側に居る事を許して下さる間は、其他の事はもう何んにも考へ度くは